

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
絵画ⅠA	必修科目	1単位	古草 敦史
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・ 絵画（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
制作材料である絵具・筆・パレット・基底材となる紙の基本的な使い方を習得し、その魅力、特性を理解し技術力を高める。			
授業の概要			
日常にあるモチーフによって水彩画（透明）の制作を行い、学校現場で教える際に必要になる彩画の基礎的知識と技術について学ぶ。			
授業計画			
第1回：ガイダンスⅠ（水彩画の多様性について）			
第2回：水彩静物画制作Ⅰ①（下絵制作・構図の検討）			
第3回：水彩静物画制作Ⅰ②（下絵制作・デッサンの検討）			
第4回：水彩静物画制作Ⅰ③（色彩の検討）			
第5回：水彩静物画制作Ⅰ④（総合的な要素の検討）			
第6回：水彩静物画制作Ⅰ⑤（講評会）			
第7回：ガイダンスⅡ（絵画表現の多様性について）			
第8回：水彩静物画制作Ⅱ①（下絵制作・構図の検討）			
第9回：水彩静物画制作Ⅱ②（下絵制作・デッサンの研究）			
第10回：水彩静物画制作Ⅱ③（色彩の検討）			
第11回：水彩静物画制作Ⅱ④（色彩・材質の検討）			
第12回：水彩静物画制作Ⅱ⑤（総合的な要素の検討）			
第13回：水彩静物画制作Ⅱ⑥（総合的な要素の応用としての検討）			
第14回：水彩静物画制作Ⅱ⑦（総合的な要素の発展としての検討）			
第15回：水彩静物画制作Ⅱ⑧（講評会）			
テキスト			
特になし			
参考書・参考資料等			
森田恒之監修『絵画表現のしくみ』美術出版社2000年 3,080円			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
絵画ⅠB	必修科目	1単位	古草 敦史
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・ 絵画（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
制作材料の基本的な使い方を習得し、その魅力、特性を理解するとともに描く喜び、困難さなどあらゆる側面を感じながら絵画制作の技術力を高める。			
授業の概要			
日常にあるモチーフによって、油彩画もしくはアクリル画の制作を行い、学校現場で教える際に必要になる彩画の基礎的知識と技術について学ぶ。			
授業計画			
第1回：ガイダンス			
第2回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作①（下絵制作・構図の検討）			
第3回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作②（下絵制作・構図の応用的な検討）			
第4回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作③（下絵制作・デッサンの検討）			
第5回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作④（下絵制作・デッサンの応用的な検討）			
第6回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑤（講評会）			
第7回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑥（色彩の検討）			
第8回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑦（色彩の応用的な検討）			
第9回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑧（マチエールの検討）			
第10回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑨（マチエールの応用的な検討）			
第11回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑩（マチエールの発展的な検討）			
第12回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑪（総合的な要素の検討）			
第13回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑫（総合的な要素の応用としての検討）			
第14回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑬（総合的な要素の発展としての検討）			
第15回：油彩またはアクリル絵具による静物画制作⑭（講評会）			
テキスト			
特になし			
参考書・参考資料等			
海野弘 小倉正史著『現代美術』新曜社2002年 1,650円			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
絵画ⅡA	選択科目	1単位	古草 敦史
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・絵画（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
自己の興味のありどころを見つけ、探し出したモチーフと古今の画家の作品研究によって充実した画面構成を追求する。			
授業の概要			
与えられてモチーフと各自の構想による制作によって、学校現場で美術を教える際に必要となるデッサン、彩画の実技力の向上を図る。			
授業計画			
第1回：ガイダンス			
第2回：構想エスキース制作①（エスキース制作・モチーフと構想の研究）			
第3回：構想エスキース制作②（エスキース制作・モチーフと構想の応用的な研究）			
第4回：構想エスキース制作③（エスキース制作・モチーフと構想の発展的な研究）			
第5回：構想エスキース制作④（エスキースについて受講者相互のディスカッション）			
第6回：油彩構想画制作①（下絵制作・デッサンの研究）			
第7回：油彩構想画制作②（下絵制作・デッサンの応用的な研究）			
第8回：油彩構想画制作③（本制作・色彩・マチエールの研究）			
第9回：油彩構想画制作④（本制作・色彩・マチエールの応用的な研究）			
第10回：油彩構想画制作⑤（本制作・色彩・マチエールの発展的な研究）			
第11回：油彩構想画制作⑥（本制作・総合的な要素の研究）			
第12回：油彩構想画制作⑦（本制作・総合的な要素の応用としての研究）			
第13回：油彩構想画制作⑧（本制作・総合的な要素の発展としての研究）			
第14回：油彩構想画制作⑨（本制作・総合的な要素の展開としての研究）			
第15回：油彩構想画制作⑩（講評会）			
テキスト			
特になし			
参考書・参考資料等			
若林直樹著『現代美術・入門』JICC出版局1989年 1,540円			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
絵画ⅡB	選択科目	1単位	古草 敦史
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 絵画（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
自己の内面を探る主観性とそれを支える客観性を大事にしながら、古今の画家の作品研究によって充実した画面構成を追求する。			
授業の概要			
各自の構想画制作によって、学校での美術を教える際に必要となる発想の展開力やデッサン、油彩画（場合によっては水性画材）の制作の実技力の向上を図る。			
授業計画			
第1回：ガイダンス			
第2回：構想エスキース制作①（エスキース制作・構図の研究）			
第3回：構想エスキース制作②（エスキース制作・構図の応用的な研究）			
第4回：構想エスキース制作③（エスキース制作・構図の発展的な研究）			
第5回：構想エスキース制作④（エスキースについて受講者相互のディスカッション）			
第6回：油彩構想画制作①（下絵制作・デッサンの研究）			
第7回：油彩構想画制作②（下絵制作・デッサンの応用的な研究）			
第8回：油彩構想画制作③（下絵制作・デッサンの発展的な研究）			
第9回：油彩構想画制作④（本制作・色彩・マチエールの研究）			
第10回：油彩構想画制作⑤（本制作・色彩・マチエールの応用的な研究）			
第11回：油彩構想画制作⑥（本制作・色彩・マチエールの発展的な研究）			
第12回：油彩構想画制作⑦（本制作・総合的な要素の研究）			
第13回：油彩構想画制作⑧（本制作・総合的な要素の発展としての研究）			
第14回：油彩構想画制作⑨（本制作・総合的な要素の展開としての研究）			
第15回：油彩構想画制作⑩講評会			
テキスト			
特になし			
参考書・参考資料等			
フランク・ウィットフォード 木下哲夫訳『抽象美術入門』美術出版社1999年 2,200円			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
造形基礎	必修科目	2 単位	古草 敦史
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・絵画（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
対象物を多角的に観察する探求心をもちながら、描画材料の鉛筆・木炭・消し具を工夫する。 また、自身の作品について批判的に評価し、あらゆる造形表現の基礎としてデッサンの重要性を理解する。			
授業の概要			
学校現場の造形教育に携わる者として、また生涯活動における造形表現の基礎的実習として、形、形態感、空間感、構成などのデッサンの構成要素を鉛筆や木炭（画用紙、木炭紙）など描画材料の特質と合わせて学ぶ。ものの捉え方の概念を確実に理解し、どのようにものを観察するべきなのかを探究する。			
授業計画			
第1回：前期ガイダンス			
第2回：石膏首像の鉛筆描写①（構図の検討）			
第3回：石膏首像の鉛筆描写②（形態の検討）			
第4回：石膏首像の鉛筆描写③（構図・形態等の応用的な検討）			
第5回：石膏首像の鉛筆描写④（描画素材の検討）			
第6回：石膏首像の鉛筆描写⑤（描画素材の応用的な検討）			
第7回：石膏首像の鉛筆描写⑥（総合的な要素の検討）			
第8回：石膏首像の鉛筆描写⑦（講評会）			
第9回：石膏胸像の鉛筆描写①（構図の検討）			
第10回：石膏胸像の鉛筆描写②（形態の検討）			
第11回：石膏胸像の鉛筆描写③（描画素材の検討）			
第12回：石膏胸像の鉛筆描写④（描画素材の応用的な検討）			
第13回：石膏胸像の鉛筆描写⑤（総合的な要素の検討）			
第14回：石膏胸像の鉛筆描写⑥（総合的な要素の応用としての検討）			
第15回：石膏胸像の鉛筆描写⑦（講評会）			
第16回：後期ガイダンス			

第17回：石膏胸像の木炭描写①（構図の検討）

第18回：石膏胸像の木炭描写②（構図の応用的な検討）

第19回：石膏胸像の木炭描写③（描画素材の応用的な検討）

第20回：石膏胸像の木炭描写④（描画素材の発展的な検討）

第21回：石膏胸像の木炭描写⑤（総合的な要素の検討）

第22回：石膏胸像の木炭描写⑥（総合的な要素の応用としての検討）

第23回：石膏胸像の木炭描写⑦（講評会）

第24回：静物の木炭描写①（形態等の応用的解釈）

第25回：静物の木炭描写②（構図の検討）

第26回：静物の木炭描写③（構図の応用的な検討）

第27回：静物の木炭描写④（構図の発展的な検討）

第28回：静物の木炭描写⑤（総合的な要素の応用としての検討）

第29回：静物の木炭描写⑥（総合的な要素の発展としての検討）

第30回：静物の木炭描写⑦（講評会）

テキスト

特になし

参考書・参考資料等

ロバート・マッセイ著 山添耕治訳『画家のための処方箋』クリエイツかもがわ2002年
2, 420円

学生に対する評価

授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）

授業科目名： 絵画演習Ⅰ（映像メディア表現を含む）	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：鈴木久人 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 絵画（映像メディア表現を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ 絵画を描こうとするものは対象物から受けた印象や感動を平面に定着するため，ある程度の技術と知識を必要とする。本授業は絵画制作の基礎的技能と知識の獲得とあわせて，観念的とらえ方を越えた自然や物と対話する喜びを認識することを目的とする。鉛筆画，油彩画に関する描写力，描画材料に関する知識，観察力及び構成力を付けることができる。			
授業の概要 ・ 視覚により外界を客観的に捉える。 ・ 鉛筆画，油彩画制作材料の特性を知る。 ・ 無彩色画，有彩色画の表現について考察し，向上を図る。 ・ 映像メディア表現を体験し，その概念を検討する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション（第7・15週の映像メディア表現での課題説明を含む），鉛筆デッサン，素描の材料，道具や技法の解説， 第2回：鉛筆デッサン 第3回：鉛筆デッサン 第4回：鉛筆デッサン 第5回：鉛筆デッサン 第6回：鉛筆デッサン，発表と鑑賞会 第7回：映像メディア表現実習 第8回：静物油彩画，油彩画の材料，道具や技法の解説 第9回：静物油彩画 第10回：静物油彩画 第11回：静物油彩画 第12回：静物油彩画 第13回：静物油彩画 第14回：静物油彩画，発表と鑑賞会 第15回：映像メディア表現実習，発表と鑑賞会			
テキスト			

教科書は特には指定しない。

参考書・参考資料等

中学校学習指導要領(平成 29 年告示, 文部科学省)

造形の基礎を学ぶ 藤村克裕 角川書店,

洋画を学ぶ I 京都造形芸術大学編 角川書店

出題されたモチーフや個々の学生がもつ課題などにより適宜, 参考文献や参考図版を紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み状況, 宿題作品への取り組み, 授業時間外の制作の有無や提出作品等を総合的に判断する。

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
絵画演習Ⅱ	選択科目	2単位	古草敦史
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・ 絵画（映像メディア表現を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ			
絵画制作におけるテーマの設定、モチーフの選択を通して多様な表現の探究を行い、画材の特性を生かし、発展的に用いることや自己のテーマとして感性豊かな絵画表現を目指すことができるようにする。また、自身の作品を批判的に評価できるようにする。			
授業の概要			
水性絵の具と紙を用いて多様な表現を実験的に試みるなかで、自己の志向性を検討し絵画の可能性を研究するための演習を行う。			
授業計画			
第1回：色彩研究①テーマ・画材設定、制作			
第2回：色彩研究②制作・受講生相互のディスカッション			
第3回：各自モチーフの形態研究①テーマ・画材の設定、制作			
第4回：各自モチーフの形態研究②制作			
第5回：各自モチーフの形態研究③制作・受講生相互のディスカッション			
第6回：構想画制作Ⅰ「自然」をテーマとして①画材設定、制作			
第7回：構想画制作Ⅰ「自然」をテーマとして②制作			
第8回：構想画制作Ⅰ「自然」をテーマとして③制作・受講生相互のディスカッション			
第9回：構想画制作Ⅱ「様々な事柄の状態」をテーマとして①画材設定、制作			
第10回：構想画制作Ⅱ「様々な事柄の状態」をテーマとして②制作			
第11回：構想画制作Ⅱ「様々な事柄の状態」をテーマとして③制作・受講生相互のディスカッション			
第12回：構想画制作Ⅲ「様々な表現方法」をテーマとして（映像・メディア表現を含む）①画材設定、制作			
第13回：構想画制作Ⅲ「様々な表現方法」をテーマとして（映像・メディア表現を含む）②制作			
第14回：構想画制作Ⅲ「様々な表現方法」をテーマとして（映像・メディア表現を含む）③制作・受講生相互のディスカッション			
第15回：全体講評・まとめ			
テキスト			
特になし			
参考書・参考資料等			
教員作成Power Point			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%），学習成果物（70%）			

授業科目名：彫刻Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：長谷川 隆子 担当形態：単独
科 目	教科及び教育の指導法に関する科目 (中学校及び高等学校 美術)		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 彫刻		
授業のテーマ及び到達目標 基礎的な彫刻制作を通して、技術の習得と素材の特性をふまえて表現し、小学校や中学校での美術（特に造形、彫刻）の授業での指導上で必要とされる留意点を学び、実践できることを目標とする。 1. 彫刻の基本的な考え方や見方を理解する。 2. 彫刻の根源や概念について自分自身の視点で習得する。 3. 主体的に量感・動勢・形・空間について追究することができる。 4. 作品の優れた点や問題点を客観的に判断し、言葉で評価できる。			
授業の概要 立体構造を把握し、針金を使用した芯材に粘土や石膏でモデリング、カーヴィングする。 授業の終わりに講評をおこなう。			
授業計画 第1回：授業ガイダンス、 基本的な観点や制作過程の説明、手のデッサン 第2回：針金を使った芯材の制作 1 第3回：針金を使った芯材の制作 2 第4回：芯材に手のモデリング 1 第5回：芯材に手のモデリング 2 第6回：芯材に手のモデリング 3 第7回：芯材に手のモデリング 4 第8回：講評、石膏の特性と理解 第9回：鳥のデザイン、針金を使った芯材の制作 1 第10回：針金を使った芯材の制作 2 第11回：鳥の制作 モデリング 1 石膏じかけ 第12回：鳥の制作 モデリング 2 第13回：鳥の制作 カーヴィング 第14回：鳥の制作 サンドペーパー等による表面処理 第15回：講評、総括 定期試験は実施しない。			

テキスト

なし

参考書・参考資料等

彫刻に必要なヘラ、彫刻刀、シュロ縄、ペンチ、針金、布、新聞紙などの用具や材料は各自で準備する。毎回、クロッキー帳は持参すること。

美術出版社「彫刻を作る」

学生に対する評価

制作態度を勘案し、作品によって評価する。（作品評価は、質、完成度のみならず制作過程における追求内容等も含まれる。）

実技授業であるため、制作の進行状況が遅れた場合は授業時間外に制作を進めておく。

授業科目名：彫刻Ⅱ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：長谷川 隆子 担当形態：単独
科 目	教科及び教育の指導法に関する科目 (中学校及び高等学校 美術)		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 彫刻		
授業のテーマ及び到達目標 立体の形体を三次元的に認識し、彫刻の意味を考え、表現方法を自ら模索する。小学校や中学校での美術（特に造形、彫刻）の授業での指導上で必要とされる留意点を学び、実践できることを目標とする。 1. 彫刻の基本的な考え方や見方を理解する。 2. 彫刻の根源や概念について自分自身の視点で習得する。 3. 主体的に量感・動勢・形・空間について追究することができる。 4. 作品を客観的に分析し、言葉で述べることができる。			
授業の概要 粘土で原型を制作し、石膏による型作り、伝統技法の張り子制作を学ぶ。 授業の終わりに講評をおこなう。			
授業計画 第1回：授業ガイダンス、基本的な観点や制作過程の説明 お面作り、資料を用いてデザイン 第2回：原型作り 1 基本 第3回：原型作り 2 応用 第4回：石膏メ型制作 第5回：粘土書き出し、石膏取り 第6回：石膏はりこみ 第7回：割り出し・修正 第8回：和紙貼り 1 基本 第9回：和紙貼り 2 実践 第10回：着彩 第11回：講評、抽象彫刻について考察 第12回：石膏、または粘土で制作 1 基本 第13回：石膏、または粘土で制作 2 応用 第14回：石膏、または粘土で制作 3 実践 第15回：講評、総括 定期試験は実施しない。			

テキスト なし
参考書・参考資料等 彫刻に必要なヘラ、彫刻刀、シュロ縄、ペンチ、針金、布、新聞紙などの用具や材料は各自で準備する。毎回、クロッキー帳は持参すること。 美術出版社「彫刻を作る」
学生に対する評価 制作態度を勘案し、作品によって評価する。（作品評価は、質、完成度のみならず制作過程における追求内容等も含まれる。） 実技授業であるため、制作の進行状況が遅れた場合は不可となる。

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：武内優記
彫刻特別演習	選択科目	2単位	担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・彫刻		
授業のテーマ及び到達目標			
彫刻等の立体表現の中でも空間を含めて作品とする表現方法（インスタレーション）が、人々の体験に変化を与える方法論として用いられている。本授業では、特定の空間を想定した模型によるインスタレーション作品の制作を通して、空間全体を使った表現について考察するとともに、構成力や発想力の進展を図る。また、インスタレーション作品を研究し、そのコンセプトや効果について理解するとともに、現代の社会と連動した表現の多様性の理解に役立てる。			
到達目標			
・素材の選択から加工、仕上げまで計画的な制作ができる。 ・コンセプトと表現の連関について、自分なりの整理ができる。 ・習得した知識・技能を作品制作や様々な学びの場へ生かすことができる。			
授業の概要			
・インスタレーションの特性を理解し、発想や構想の能力の向上を図る。 ・模型制作では視点の変化を意識し、素材の選定から加工方法までを習得する。 ・空間表現について参考作品を考察するとともに、制作をとおして学んだことを省察し、レポート(800字以上)にまとめて提出する。			
授業計画			
第1回：授業概説および空間の彫刻及びインスタレーションについて			
第2回：フィールドワーク・アイデアスケッチ①（観察）			
第3回：フィールドワーク・アイデアスケッチ②（コンセプトノート）			
第4回：フィールドワーク・アイデアスケッチ③（採寸・作図）			
第5回：模型制作①（製材）			
第6回：模型制作②（組立）			
第7回：模型制作③（加工・構成）			
第8回：模型制作④（構成・着色）			
第9回：中間講評 プレゼンテーション			
第10回：インスタレーション①（造形）			
第11回：インスタレーション②（組立）			
第12回：インスタレーション③（配置）			
第13回：インスタレーション④（構成）			
第14回：インスタレーション⑤（仕上げ・記録）			

第15回：講評会，かた付け（レポート，作品写真提出）
テキスト 特になし。
参考書・参考資料等 適宜，関係資料の紹介・配付を行う。
学生に対する評価 制作態度や意欲， 研究心（35％）， 作品（50％）， 講評会・レポート（15％）

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
デザインⅠA	必修科目	1 単位	尹 智博
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業ではプログラミングソフトウェアを用いて「平面図形」の作品制作を行う。またテキスト型プログラミングの基本や図形データの基本を知る事で、現在のデザイン制作の本質を理解する事を目的とする。			
授業の概要			
近年のデザイン手法は、プログラミングを用いた制作が主流となりつつある。本科目ではデザインやアート制作の新しいツールである「Processing」の基本を学習し、色彩や構成の基礎を踏まえて、プログラミングによる造形表現、自己表現が意図的に出来る様にする。			
授業計画			
第1回：ガイダンスⅠ（ソフトウェアの導入、テーマ設定）			
第2回：プログラミングの基本①（データ型）			
第3回：プログラミングの基本②（演算子）			
第4回：プログラミングの基本③（繰返文）			
第5回：プログラミングの基本④（条件文）			
第6回：プログラミングの基本⑤（関数）			
第7回：プログラミングの基本⑥（まとめ）			
第8回：ガイダンスⅡ（テーマ設定）			
第9回：プログラミングによる平面図形の制作①（基本）			
第10回：プログラミングによる平面図形の制作②（応用）			
第11回：プログラミングによる平面図形の制作③（発展）			
第12回：プログラミングによる平面図形の制作④（制作）			
第13回：プログラミングによる平面図形の制作⑤（制作、映像・メディア表現を含む）			
第14回：プログラミングによる平面図形の制作⑥（講評会）			
第15回：全体講評・まとめ			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			
教員作成オリジナル資料			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
デザインⅠB	必修科目	1単位	尹 智博
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業ではプログラミングソフトウェアを用いて「動画」や「インタラクショナルデザイン」の作品制作を行う。またデバイス制御を学ぶ事で、パソコンのマウスやキーボード以外を入力装置に出来るようになる事で、現在のデザイン制作の本質を理解する事を目的とする。			
授業の概要			
近年のデザイン手法は、プログラミングを用いた制作が主流となりつつある。本科目ではデザインやアート制作の新しいツールである「Processing」の応用と「Arduino」の基本及びデバイス制御を学習し、プログラミングによる造形表現、自己表現が意図的に出来る様にする。			
授業計画			
第1回：ガイダンスⅠ（テーマ設定）			
第2回：プログラミングによる動画の制作①（基本）			
第3回：プログラミングによる動画の制作②（応用）			
第4回：プログラミングによる動画の制作③（発展）			
第5回：プログラミングによる動画の制作④（制作）			
第6回：プログラミングによる動画の制作⑤（制作、映像・メディア表現を含む）			
第7回：プログラミングによる動画の制作⑥（講評会）			
第8回：ガイダンスⅡ（ソフトウェアの導入、テーマ設定）			
第9回：インタラクショナルデザイン①（基本）			
第10回：インタラクショナルデザイン②（応用）			
第11回：インタラクショナルデザイン③（発展）			
第12回：インタラクショナルデザイン④（制作）			
第13回：インタラクショナルデザイン⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第14回：インタラクショナルデザイン⑥（講評会）			
第15回：全体講評・まとめ			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			
教員作成オリジナル資料			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
デザインⅡA	選択科目	1 単位	尹 智博
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業ではコンピュータソフトウェアを用いて「3Dデザイン」による作品制作を行う。またソリッド／メッシュ等とコンピュータデータにおける「3D」の特性を知る事で、現在のデザイン制作の本質を理解する事を目的とする。			
授業の概要			
立体制作の基礎として、3Dモデリングソフトウェアを用いて自由な発想で「指輪」のデザインを試みる。これより3次元の造形表現、自己表現が意図的に出来る様にする。またアルゴリズム・デザインの基礎を知る事で複雑な形状を容易に制作する技術を習得する。			
授業計画			
第1回：ガイダンスⅠ（ソフトウェアの導入、テーマ設定）			
第2回：3次元造形の基礎①（基礎）			
第3回：3次元造形の基礎②（応用）			
第4回：3次元造形の基礎③（発展）			
第5回：3次元造形の基礎④（制作）			
第6回：3次元造形の基礎⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第7回：3次元造形の基礎⑥（講評会）			
第8回：ガイダンスⅡ（テーマ設定）			
第9回：アルゴリズム・デザインの基礎①（基礎）			
第10回：アルゴリズム・デザインの基礎②（応用）			
第11回：アルゴリズム・デザインの基礎③（発展）			
第12回：アルゴリズム・デザインの基礎④（制作）			
第13回：アルゴリズム・デザインの基礎⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第14回：アルゴリズム・デザインの基礎⑥（講評会）			
第15回：総括			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			
教員作成オリジナル資料			
学生に対する評価			
授業への参加度（30％）、学習成果物（70％）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
デザインⅡB	選択科目	1 単位	尹 智博
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業ではコンピュータソフトウェアを用いて「3Dデザイン」と「アルゴリズムック・デザイン」による現代的な3Dモデル制作を行う。自動生成による造形データを制作する事で、現在のデザイン制作の本質を理解する事を目的とする。			
授業の概要			
立体制作の応用として、3Dモデリングソフトウェアを用いて自由な発想で「ペンダント及びイヤリング」の制作を試みる。またアルゴリズムック・デザインの応用を知る事で、様々なデザイン制作を行える技術を習得する。			
授業計画			
第1回：ガイダンスⅠ（ソフトウェアの導入、テーマ設定）			
第2回：3次元造形の応用①（基礎）			
第3回：3次元造形の応用②（応用）			
第4回：3次元造形の応用③（発展）			
第5回：3次元造形の応用④（制作）			
第6回：3次元造形の応用⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第7回：3次元造形の応用⑥（講評会）			
第8回：ガイダンスⅡ（テーマ設定）			
第9回：アルゴリズムック・デザインの応用①（基礎）			
第10回：アルゴリズムック・デザインの応用②（応用）			
第11回：アルゴリズムック・デザインの応用③（発展）			
第12回：アルゴリズムック・デザインの応用④（制作）			
第13回：アルゴリズムック・デザインの応用⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第14回：アルゴリズムック・デザインの応用⑥（講評会）			
第15回：総括			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			
教員作成オリジナル資料			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
構成ⅠA	必修科目	1単位	尹 智博
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業ではコンピュータソフトウェアを用いて「形と色」による作品制作を行う。またベクター／ラスター、CMYK／RGB／HSB等とコンピュータデータにおける「形と色」の特性を知る事で、現在のデザイン制作の本質を理解する事を目的とする。			
授業の概要			
視覚的造形の基礎である「形と色」について、コンピュータソフトウェア「Inkscape」を用いて自由な発想で制作を試みる。これより「形と色」による造形表現、自己表現が意図的に出来る様にする。			
授業計画			
第1回：ガイダンスⅠ（ソフトウェアの導入、テーマ設定）			
第2回：形の構成①（基礎）			
第3回：形の構成②（応用）			
第4回：形の構成③（発展）			
第5回：形の構成④（制作）			
第6回：形の構成⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第7回：形の構成⑥（講評会）			
第8回：ガイダンスⅡ（テーマ設定）			
第9回：色の構成①（基礎）			
第10回：色の構成②（応用）			
第11回：色の構成③（発展）			
第12回：色の構成④（制作）			
第13回：色の構成⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第14回：色の構成⑥（講評会）			
第15回：総括			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			
教員作成オリジナル資料			
学生に対する評価			
授業への参加度（30％）、学習成果物（70％）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
構成ⅠB	必修科目	1単位	尹 智博
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業ではコンピュータソフトウェアを用いて「画像加工」による作品制作を行う。またピクセルを中心としたコンピュータデータの特性を知る事で、現在のデザイン制作の本質を理解する事を目的とする。			
授業の概要			
画像加工技術について、コンピュータソフトウェア「GIMP」を用いて自由な発想で制作を試みる。これより「構成ⅠA」でテーマとした「形と色」の知識を基に、画像加工による造形表現、自己表現を意図的に出来る様にする。			
授業計画			
第1回：ガイダンスⅠ（ソフトウェアの導入、テーマ設定）			
第2回：画像加工の基礎①（基礎）			
第3回：画像加工の基礎②（応用）			
第4回：画像加工の基礎③（発展）			
第5回：画像加工の基礎④（制作）			
第6回：画像加工の基礎⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第7回：画像加工の基礎⑥（講評会）			
第8回：ガイダンスⅡ（テーマ設定）			
第9回：色調補正と画像合成①（基礎）			
第10回：色調補正と画像合成②（応用）			
第11回：色調補正と画像合成③（発展）			
第12回：色調補正と画像合成④（制作）			
第13回：色調補正と画像合成⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第14回：色調補正と画像合成⑥（講評会）			
第15回：総括			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			
教員作成オリジナル資料			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
構成Ⅱ A	選択科目	1 単位	尹 智博
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業ではコンピュータソフトウェアを用いて「文字と紙面」による作品制作を行う。また文字（和文／欧文の各フォント）、紙面レイアウト上に必要なコンピュータデータの特性を知る事で、現在のデザイン制作の本質を理解する事を目的とする。			
授業の概要			
視覚的造形の基礎である「文字」について、コンピュータソフトウェア「Inkscape」を用いて自由な発想で制作を試みる。これより「構成Ⅰ A／IB」で習得した技術を含め、「文字・形・色」を用いた「紙面レイアウト」の自己表現を意図的に出来る様にする。			
授業計画			
第1回：ガイダンスⅠ（テーマ設定）			
第2回：文字の構成①（基礎）			
第3回：文字の構成②（応用）			
第4回：文字の構成③（発展）			
第5回：文字の構成④（制作）			
第6回：文字の構成⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第7回：文字の構成⑥（講評会）			
第8回：ガイダンスⅡ（テーマ設定）			
第9回：紙面の構成①（基礎）			
第10回：紙面の構成②（応用）			
第11回：紙面の構成③（発展）			
第12回：紙面の構成④（制作）			
第13回：紙面の構成⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第14回：紙面の構成⑥（講評会）			
第15回：総括			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			
教員作成オリジナル資料			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
構成Ⅱ B	選択科目	1 単位	尹 智博
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業では音楽製品を用いたコラージュと、コンピュータソフトウェアを用いた「音」の構成による作品制作を行う。芸術領域を理解する事においては美術と音楽を分けて考える必要性はなく、「構成」という 1 つの共通言語を基に領域横断の本質を理解する事を目的とする。			
授業の概要			
近代の構成主義の芸術家達は造形芸術だけでなく音楽や文学作品も制作していた。本授業においても「構成」（compositionは作曲の意味も有する）を学ぶ上で音と造形芸術との関わりを学ぶ事によって、領域横断型の造形表現、自己表現が意図的に出来る様にする。			
授業計画			
第1回：ガイダンスⅠ（テーマ設定）			
第2回：コラージュによる構成①（基礎）			
第3回：コラージュによる構成②（応用）			
第4回：コラージュによる構成③（発展）			
第5回：コラージュによる構成④（制作）			
第6回：コラージュによる構成⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第7回：コラージュによる構成⑥（講評会）			
第8回：ガイダンスⅡ（ソフトウェア導入、テーマ設定）			
第9回：音の構成①（基礎）			
第10回：音の構成②（応用）			
第11回：音の構成③（発展）			
第12回：音の構成④（制作）			
第13回：音の構成⑤（制作、映像メディア表現を含む）			
第14回：音の構成⑥（講評会）			
第15回：総括			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			
教員作成オリジナル資料			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（70%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：柴田悠基
立体表現基礎演習A	選択科目	1単位	担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校、高等学校 美術）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
ものの捉え方の概念を確実に理解すること、つまり、どのようにものを観察し、情報を収集し発見し、発想し、創造するかといった、造形活動の基礎的な過程を理解し探求する。また、造形表現の基礎的実習として、形、形態感、空間感、構成などのデッサンの構成要素を表現するための鉛筆など描画材料の特質を合わせて学ぶ。視覚のメカニズムの理解を起点とし、ダブリンの透視図法理論などを經由して単純な幾何学的形態を精密に描くことによって、基礎的な空間感覚を養いながら、紙などによって実制作を行い、立体造形感覚の基礎を構築する。			
到達目標			
1.基本的なものの見方とその捉え方について理解ができる。			
2.描画材料の鉛筆・木炭・消し具の基本的な使い方ができる。			
3.自身の作品について批判的に評価することができる。			
授業の概要			
ものの捉え方の概念を確実に理解すること、つまり、どのようにものを観察し、情報を収集し発見し、発想し、創造するかといった、造形活動の基礎的な過程を理解し探求する。また、造形表現の基礎的実習として、形、形態感、空間感、構成などのデッサンの構成要素を表現するための鉛筆など描画材料の特質を合わせて学ぶ。			
授業計画			
第1回：ガイダンス			
第2回：視覚のメカニズム と基礎デッサン			
第3回：遠近法と図形			
第4回：正方形の書き方、1点透視図法による空間表現			
第5回：立方体の描き方、2点透視図法による空間表現			
第6回：立方体の描き方、3点透視図法による空間表現			
第7回：立方体の描き方			
第8回：立方体の表示			
第9回：同一平面上の複数の立方体表現 基礎			
第10回：同一平面上の複数の立体表現 応用			
第11回：紙による立方体制作			

第12回：立方体表示（単体）

第13回：立方体表示（複数）

第14回：立方体による空間表現

第15回：まとめ

テキスト

特になし

参考書・参考資料等

「エレメンツ・オブ・デザイン」，ゲイル・グリート・ハナ著，美術出版社

学生に対する評価

毎回の授業の課題制作25%、宿題25%、最終課題50%

授業科目名：	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数：	担 当 教 員 名 ： 佐 原 理 (徳島大学)
映像メディア表現		2 単位	担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・デザイン（映像メディア表現を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業の目標は美術教育における映像メディア領域がどのような経緯で導入され、どのような能力形成が可能なのか、実践的な授業運営方法論やテクノロジーの活用方法を学ぶことを目標とする。特にデザインとは何かという基礎的な知識を得るとともに、映像によるデザインと映像のデザインの2つの視点から美術教育における映像の活用方法に焦点をおく。			
授業の概要			
映像のデザインという視点からは主に原初の映像装置による体験等に依拠しながら諸処の映像表現やその方法論について学ぶ。また、映像によるデザインという視点から、主に個人が 20 世紀に撮影・記録した映像群を公共財と位置づけ、そこに映し出された大きな歴史に回収されない貴重な個々の物語に価値を見出しながら、それらが現代のコミュニティーの中で新しい物語を紡ぎ出すための手段とする方法論を学ぶことを通し、デザインすることの基礎的な知識を身につける。			
授業計画			
第1回：デザインとは何か？イタラティブなデザインプロセスとプロトタイピング			
第2回：映像撮影とアニメーションデザインワークショップ1：コマドリでうごかす			
第3回：映像撮影とアニメーションデザインワークショップ2：体をつかう			
第4回：映像撮影とアニメーションデザインワークショップ3：描き出す			
第5回：映像撮影とアニメーションデザインワークショップ4：光をつかう			
第6回：映像撮影とアニメーションデザインワークショップ5：自作プレイドーをつくる			
第7回：映像のデザイン：制作発表とディスカッション			
第8回：映像撮影とアニメーションワークショップ6：クレイアニメーションで表現する			
第9回：記録写真とフィールドワーク：白黒写真をカラー化する1（写真画像技術の解説）			
第10回：記録写真とフィールドワーク：白黒写真をカラー化する2（写真画像技術の実践）			
第11回：記録写真とフィールドワーク：プレゼンテーション1（作品のプレゼンテーション）			
第12回：記録写真とフィールドワーク：プレゼンテーション2（作品の講評と展示）			
第13回：マッピングしてストーリーを構成する。			
第14回：映像によるデザインの振り返りとディスカッション			
第15回：映像によってデザインするとは？まとめとレポート制作のためのテーマ			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			
・アンソニー・ダン（著）、フィオーナ・レイビー（著）「スペキュラティブ・デザイン 問題解決から、問題提起へ。―未来を思索するためにデザインができること」ビー・エヌ・エヌ新社			
・広瀬 秀雄（著）、矢牧 健太郎「図説 映像トリック―遊びの百科全書」河出書房新社			
東京都写真美術館（監修）、森山 朋絵（編集）「映像体験ミュージアム―イメージネーションの未来へ」工作舎			
・神林 恒道 ふじえ みつる（監修）「美術教育ハンドブック」三元社			
・原田 健一、石井 仁志他「映像は未来とともに懐かしさは未来とともにやってくる:地域映像アーカイブの理論と実際」学文社			

・岩井俊雄「岩井俊雄の仕事と周辺」六耀社

・Becci Manson「(Re)touching lives through photos」『Ted.com』

http://www.ted.com/talks/becci_manson_re_touching_lives_through_photos

学生に対する評価

作品のポートフォリオ評価 60% 最終レポート 40%

授業科目名： 造形基礎演習Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：柴田悠基 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 工芸		
授業のテーマ及び到達目標			
本演習は下記の目的を達成することをテーマとする。 平面表現は①描く行為についての理解、②描写の基礎技術を習得し、③自分の考えを絵や図で示すことができることや立体表現につなげることを目的とする。 立体表現は④アイデアの言語化、⑤アイデアの立体化、⑥最適な素材と技法の選択を行い、生活や社会の中の工芸や工芸の文化に関わる資質、能力を育成しながら、立体を表現できる基礎技術の習得を目的とする。			
到達目標			
① 描く行為を概念として理解し、それぞれの研究分野に活かすことができる。 ② 描写の基礎技術の習得し、立体物の形を正確に把握できる。 ③ 自分の考えを絵や図を用いて相手にわかりやすく説明できる。 ④ アイデアを言語化することができる。 ⑤ 機能と美しさとの調和を考え、アイデアを洗練された形に表現することができる。 ⑥ 素材の特性を理解し、それに適した加工方法を身に付ける。			
授業の概要			
絵や図を用い平面的に表現し説明すること、立体的に表現し説明することは、自分の考えを相手に明確に伝える手段として有効である。本演習は、身近な生活の視点に立ちながら、自分の考えを平面的・立体的に表現するための基礎的な表現技法を習得する。 本演習は平面表現分野と立体表現分野の2セクションに分ける。			
授業計画			
第1回：平面表現1：絵を描くとは 第2回：平面表現2：線を知る 第3回：平面表現3：模写する 基礎 第4回：平面表現4：模写する 応用 第5回：平面表現5：デッサン 形を捉える 基礎 第6回：平面表現6：デッサン 形を捉える 応用 第7回：平面表現7：表現 自分の考えを相手に伝える 第8回：構成による立体表現1：3 Blocks Composition 課題説明			

第9回：構成による立体表現2：3 Blocks Composition アイデアプレゼン／スタイロフォーム制作
 第10回：構成による立体表現3：3 Blocks Composition スタイロフォーム制作 構成展開 基礎
 第11回：構成による立体表現4：3 Blocks Composition スタイロフォーム制作 構成展開 応用
 第12回：構成による立体表現5：3 Blocks Composition スタイロフォーム制作 構成展開 発展
 第13回：構成による立体表現6：3 Blocks Composition 水性パテ塗り／水性パテ研磨
 第14回：構成による立体表現7：3 Blocks Composition サーフェーサー吹き付け／研磨
 第15回：構成による立体表現8：3 Blocks Composition プレゼンテーション

テキスト

特になし

参考書・参考資料等

「エレメンツ・オブ・デザイン」，ゲイル・グリート・ハナ著，美術出版社

学生に対する評価

授業での取り組み姿勢20%、各回（全15回）の課題80%

授業科目名： 造形基礎演習Ⅱ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：柴田悠基 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 工芸		
授業のテーマ及び到達目標			
目的 本演習は立体表現の手法を習得し、①アイデアの言語化をおこない、②素材の特性を理解しそれに適した加工方法を選択し、③洗練された造形表現ができることを目的とする。			
到達目標 ① アイデアを言語化することができる。 ② 素材の特性を理解し、それに適した加工方法を選択できる。 ③ アイデアを洗練された形に表現することができる。			
授業の概要 創造的活動においてアイデアを的確にまとめ表現することは、自分の考えを相手に的確に伝える手段として社会のあらゆる場面に応用することができる。本演習では、自分の考えを立体的に表現するための表現技法を習得する。			
授業計画 第1回：構成立体表現1：Oblique 3 Blocks Composition 課題説明 第2回：構成立体表現2：Oblique 3 Blocks Composition アイデアプレゼン 第3回：構成立体表現3：Oblique 3 Blocks Composition スタイロフォーム制作 構成展開 基礎 第4回：構成立体表現4：Oblique 3 Blocks Composition スタイロフォーム制作 構成展開 応用 第5回：構成立体表現5：Oblique 3 Blocks Composition スタイロフォーム制作 構成展開 発展 第6回：構成立体表現6：Oblique 3 Blocks Composition 水性パテ塗り／水性パテ研磨 第7回：構成立体表現7：Oblique 3 Blocks Composition サーフェーサー吹き付け／研磨 第8回：構成立体表現8：Oblique 3 Blocks Composition プレゼンテーション 第9回：構成立体表現2：3 Blocks Composition 課題説明 第10回：構成立体表現応用1：Wires Composition アイデアプレゼン 第11回：構成立体表現応用2：Wires Composition ワイヤー制作 構成展開 基礎 第12回：構成立体表現応用3：Wires Composition ワイヤー制作 構成展開 応用 第13回：構成立体表現応用4：Wires Composition ワイヤー制作 構成展開 発展 第14回：構成立体表現応用5：Wires Composition 仕上げ 第15回：構成立体表現応用6：Wires Composition プレゼンテーション 本演習は造形基礎演習Ⅰの単位習得を前提に授業を行うものとする。			

テキスト

特になし

参考書・参考資料等

「エレメンツ・オブ・デザイン」，ゲイル・グリート・ハナ著，美術出版社

学生に対する評価

授業での取り組み姿勢20%、各回（全15回）の課題80%

授業科目名： 工芸演習	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：栗原慶 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 工芸		
授業のテーマ及び到達目標 < 目的及び主旨 > 工芸は生活に根ざした芸術ともいえ、その表現には自然や他者を尊重し対話をしていく姿勢が求められる。工芸観を養うことや工芸制作の技能習得は、素材に対して様々なアプローチを繰り返すことによって達成することができる。このことは、主体的に生きることや文化の創造、豊かな個性を育むことにもつながっていくものとする。 < 到達目標 > ① 楽焼に関する知識と技術を習得する。 ② 工芸の造形要素と意義を説明できる。			
授業の概要 ・ 陶芸制作の基礎的な造形技法を確認するとともに、楽焼技法による焼成を行う。 ・ 「素材」「造形」「機能性」をテーマとした茶碗制作を行う。			
授業計画 第1回（1日目）：授業概要の説明と陶芸の造形技法確認 第2回（1日目）：陶芸の造形技法実践 第3回（1日目）：作品（茶碗）制作 第4回（1日目）：作品（茶碗）制作 第5回（1日目）：作品（茶碗）制作 第6回（2日目）：作品の荒削り 第7回（2日目）：作品の仕上げ削り 第8回（2日目）：作品の仕上げ削り 第9回（2日目）：作品の加飾 第10回（2日目）：釉薬掛け：乾燥炉で乾燥 第11回（3日目）：楽窯作り（テント設営） 第12回（3日目）：楽窯作り（耐火煉瓦とガスバーナーで築窯） 第13回（3日目）：焼成 第14回（3日目）：焼成 第15回（3日目）：窯出し、片付け、作品発表と講評、授業アンケート			
テキスト テキストは特に指定しない。適宜、関連資料を配布する。			

参考書・参考資料等
「図画工作・基礎造形-美術教育の内容-」 建帛社
「伝統工芸ってなに？」 日本工芸会
「はじめての楽焼陶芸」 誠文堂新光社
学生に対する評価
授業への参加度（40%），学習成果物（60%）

授業科目名： 美術理論・美術史	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：小川勝 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・美術理論・美術史（鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 美術の魅力を伝えるためには、日頃から美術作品について考える習慣を身につけておくことが大切である。美術の教員にとっても、それは基本的な資質であるといえよう。美術について受講者独自の考え方が得られれば、本講義受講の目標に到達したといえるだろう。			
授業の概要 この講義では、人類最初の美術作品である「洞窟壁画」について詳しく紹介し、その時代的背景や、造形原理、また、使用された材料・技術を見てゆく。さらには、表現された意味内容についても考察を進める。			
授業計画 第1回：洞窟壁画の発見・アルタミラⅠ 第2回：大天井画の作品群・アルタミラⅡ 第3回：洞窟壁画の認定・フォン＝ドゥ＝ゴーム 第4回：洞窟壁画の解釈・ニオー 第5回：洞窟壁画の宗教性・ペシュ＝メルル 第6回：洞窟壁画の芸術性・ラスコーⅠ 第7回：情景などの解釈・ラスコーⅡ 第8回：研究の進展・ルフィニャックなど 第9回：海底の洞窟壁画・コスケールⅠ 第10回：指の欠けた手形・コスケールⅡ 第11回：最新の大発見・ショーヴェⅠ 第12回：特異な表現など・ショーヴェⅡ 第13回：野外の岩面刻画・コアなど 第14回：立体作品・ホーレ・フェルスのヴィーナスなど 第15回：人間にとって美術とは何か			
テキスト 授業中に適宜指定する。			
参考書・参考資料等 授業中に適宜指定する。			
学生に対する評価 レポートにより成績評価する。レポートのテーマは講義の中で随時指定する。			

授業科目名： 美術教育の未来を考 える		教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：山田芳明 担当形態：単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項 ・美術理論・美術史（鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 美術教育の通時的変遷を入り口に現代において美術教育に求められる変化をグローバルな視点から眺望しその教育的意義と可能性を理解する。また、SDGsなどの国際的目標においてどのように美術教育が寄与可能なのか、特にインクルーシブ教育の観点からその役割を理解する。さらに美術教育におけるテクノロジーの利活用や求められる汎用的能力の育成といった副次的な役割を理解する。				
授業の概要 我が国の美術教育の中心的価値は創造性や感性に根ざした教育にある。本授業ではそうした伝統的な美術教育がどのように変遷し、グローバルな視点から美術教育がどのように位置づけ可能なのか、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization(UNESCO)やInternational Society for Education through Art(InSEA=国際美術教育学会)といった国際機関の指標に沿って理解する。また21世紀型能力などの汎用的能力や、SDGsに沿ったインクルーシブ教育など現代の美術教育に求められる諸般の項目について紹介し、実際の教育現場での事例に学ぶ。また、教育現場でどのようにテクノロジーを美術教育に活用可能なのか、上記のグローバルな視点を踏まえ、実際の現場教員や支援企業などからワークショップ形式で学び教育現場での即戦力として活用可能なスキルを身につける。以上を通して日本国の美術教育を省察的に学び、どのように進展すべきか授業実践者とともに考え、美術教育の未来を担う実践的な知識およびスキルを身につけ、持続的に学び続ける姿勢とノウハウを体得する。				
授業計画 第1回： イントロダクション：これまでの美術教育とこれから 第2回： InSEAは何をしてきたのか？今求められる美術教育の変化 第3回： 持続可能な社会とグローバルアートエデュケーション 第4回： 世界の潮流からみる美術教育のこれから 第5回： 持続可能な社会とインクルーシブ教育 第6回： インクルーシブ教育の最前線 第7回： インクルーシブ教育とテクノロジー 第8回： 美術教育とテクノロジー：ギガスクールの現場から1（デジタル端末に触れる） 第9回： 美術教育とテクノロジー：ギガスクールの現場から2（アプリケーションを知る）				

第10回：美術教育とテクノロジー：ギガスクールの現場から3（制作ツールを知る）
第11回：美術教育の未来を考える－AIと美術教育
第12回：美術教育の未来を考える－求められる資質能力
第13回：これからの美術教育を担うために：自ら考え未来をつくる教師になるために
第14回：総括とまとめ
第15回：レポート作成とフィードバック

テキスト

なし

参考書・参考資料等

神林恒道 ふじえみつる「美術教育ハンドブック」三元社

学生に対する評価

毎授業のレポート40% 最終レポート 60%

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
先端芸術表現論	選択科目	2 単位	佐原 理
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・美術理論・美術史（鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ			
問い：「最先端芸術はいかにして教育的観点から豊かな社会を探究する手段となるのか？」			
目標：履修者は上記のテーマに対して表現プロセスのデザインを通して自らの答えを導き出すことを目標とする。			
授業の概要			
我が国の美術教育の中心的価値である創造性や感性に根ざした教育という枠組みから、ポストヒューマニズム社会における AI などのテクノロジーが社会の中でどのように位置付けられるのか、最先端芸術の視点から我々の社会の持続可能性や諸侯の課題を探究する。最先端芸術表現がいかに教育的視点からより批判的な知識や地域社会を豊かにする手段となり得るのか、美術・教育の観点から先端芸術を掘り下げる。			
授業計画			
第 1 回：イントロダクション：GlobalMediaArts 21 世紀のメディア表現と美術教育			
第 2 回：現代美術：先端芸術は何をみるのか？未来と芸術			
第 3 回：現代美術：先端芸術と教育ー多様性と持続可能性を模索する現場			
第 4 回：先端芸術表現の通時的変遷			
第 5 回：映像ってなんですか？：映像の発見で社会はどうか変わった？			
第 6 回：映像と認知の関係：身体への眼差し：生命をみつめる・生命を与える			
第 7 回：映像教育の現場から：映像メディアによる教育は何ができるのか？			
第 8 回：映像メディア表現を実践するー映像：アニメーションと身体			
第 9 回：映像メディア表現を実践するー映像とテクノロジー			
第 1 0 回：映像メディア表現を実践するー映像表現と映像による表現			
第 1 1 回：映像メディア表現を実践するー映像とメディアの先端			
第 1 2 回：映像メディア表現を実践するー美術教育と先端表現			
第 1 3 回：美的世界への眼差し：美的表現としてのアニメーションデザイン			
第 1 4 回：社会を捉える眼差し：ドキュメンタリーとしてのアニメーションデザイン			
第 1 5 回：振り返り：作品制作とレポート提出			
テキスト			
授業時に指定			
参考書・参考資料等			
森美術館「未来と芸術 Future and the Arts」美術出版社			
学生に対する評価			
学習成果物（40%） ， レポート（60%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
20 世紀の美術理論と現在	選択科目	2 単位	吉川 暢子
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・美術理論・美術史（鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ			
本授業の目標は美術教育をどのような学説に立って教育するのか、その諸侯の基盤的理論や教育原理を理解することである。さらには、そうした基盤的理論の理解を本授業の礎とした上で、最先端の美術教育研究を学ぶ手続きや研究の現場に学び、将来にわたって持続的に調査研究し教育現場においても最新の学説を学び続ける姿勢を獲得することである。			
授業の概要			
我が国の美術教育の中心的価値である創造性や感性に根ざした教育を中心的価値に据え置き、本授業ではまず、チゼック、ローウェンフェルド、リードといった美術教育の基盤となる理論発展の歴史を学ぶ。また、20 世紀初頭から現代までの主たる教育原理がどのように美術教育に生かされるのかその基盤を美術教育の観点から学ぶ。その上で 21 世紀の最新の美術教育理論研究や最新の学術成果の調査方法に触れ、継続的に美術教育実践者として教育理論を学びつづける姿勢や方法論を学ぶ。			
授業計画			
第 1 回：イントロダクション			
第 2 回：美術教育ってなぜ必要なのですか？			
第 3 回：第二次世界大戦の前後の美術教育・子どもの発見と発達段階そして芸術による人間形成へ			
第 4 回：経験と教育 1ーデューイなど経験に関わる理論			
第 5 回：経験と教育 2ー美術教育から鑑みるデューイなどの経験論			
第 6 回：モンティソーリとエリクソン　メルロー＝ポンティ			
第 7 回：認知の発達と他者/社会との関わり:メルロー＝ポンティやピアジェ：ヴィゴツキー			
第 8 回：他者/社会との関わりー抑圧から対話と民主主義的教育を考える: フレイレ			
第 9 回：映像表現と美術教育：ドゥルーズ			
第 1 0 回：社会との接点：歴史・分析・批評、美学、制作ーアイスナー			
第 1 1 回：多重知性から考える子どもの多様性：ガードナー			
第 1 2 回：美術教育研究の最前線 1ーArts Based Research などー			
第 1 3 回：美術教育研究の最前線 2 認知科学から考える美術教育			
第 1 4 回：最新の美術教育は何をあたえる教育なのか？ディスカッション			
第 1 5 回：振り返りとまとめレポート作成			
テキスト			
福田 隆眞 ,茂木 一司, 福本 謹一「美術科教育の基礎知識」建帛社			
参考書・参考資料等			
Carol Garhart Mooney「Theories of childhood」Redleaf Press			
学生に対する評価			
授業時の小レポート 20%　ポートフォリオ評価 60% 最終レポート 20%			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
美術科内容構成	選択科目	2単位	古草 敦史
			吉川 暢子
			尹 智博
			担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科及び教科の指導法に関する科目における複数の事項を合わせた内容に係る科目		
授業のテーマ及び到達目標			
図画工作、美術科の指導、支援において必要となる専門の知識、技能を習得して、様々な授業実践の場面に応用できるようにする。			
授業の概要			
教科専門の知識、技能が実際の授業実践の様々な場面に、どのように関わっているのかを理解し、指導、支援につなげることを学ぶ。			
授業計画			
第1回：図画工作科、美術科における指導上の自己課題の設定（吉川）			
第2回：指導案試作に関連する材料、道具、技術等をふまえた自己課題の設定（吉川）			
第3回：自己課題に基づいた題材の検討と指導案の試作①（吉川）			
第4回：自己課題に基づいた題材の検討と指導案の試作②（吉川）			
第5回：実習授業の展開と指導上の工夫についての考察（絵画、彫刻に関して）（古草）			
第6回：実習活動の検討①絵画制作題材研究（古草）			
第7回：実習活動の検討②彫刻制作（立体表現）題材研究（古草）			
第8回：実習活動の探求①絵画、彫刻（立体表現）に関する自己課題に基づいた題材研究（古草）			
第9回：実習活動の探求②絵画、彫刻（立体表現）に関する自己課題の明確化と発展性の検討(古草)			
第10回：実習授業の展開と指導上の工夫についての考察（デザイン、工芸に関して）（尹）			
第11回：実習活動の検討①デザイン制作題材研究（尹）			
第12回：実習活動の検討②工芸（立体表現）題材研究（尹）			
第13回：実習活動の探求①デザイン、工芸（立体表現）に関する自己課題に基づいた題材研究(尹)			
第14回：実習活動の探求②デザイン、工芸（立体表現）に関する自己課題の明確化と発展性の検討（尹）			
第15回：総括（図画工作科、美術科における題材の分析）（吉川）			
テキスト			
小学校学習指導要領解説図画工作編、中学校学習指導要領美術編			
参考書・参考資料等			
M.ハイデッガー著 関口浩訳『芸術作品の根源』平凡社2002年 2,420円			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（40%）、レポート（30%）			

授業科目名	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
美術科教育論	必修科目（中学校）	2 単位	古草 敦史
	選択科目（高等学校）		吉川 暢子
			尹 智博
			担当形態：
			オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
学校教育における美術教育実践において、求められる美術科教育と絵画やデザイン制作に関する各分野の基礎的理念を獲得する。			
授業の概要			
美術教育の領域別理念・内容を美術科教育、絵画、デザインの各教員によって横断的に学ぶ。			
授業計画			
第1回：絵画分野における実習活動の指導、支援の要点の考察(担当：古草敦史)			
第2回：絵画分野における色彩の基礎をふまえた造形表現、自己表現の設定①(担当：古草敦史)			
第3回：絵画分野における形態の基礎をふまえた造形表現、自己表現の設定②(担当：古草敦史)			
第4回：絵画分野における構成の基礎をふまえた造形表現、自己表現の設定③(担当：古草敦史)			
第5回：絵画分野における総合的な要素による造形表現、自己表現の探求(担当：古草敦史)			
第6回：デザイン分野における実習活動の指導、支援の要点の考察(担当：尹智博)			
第7回：デザイン分野における色彩の基礎をふまえた造形表現、自己表現の設定①(担当：尹智博)			
第8回：デザイン分野における構成の基礎をふまえた造形表現、自己表現の設定②(担当：尹智博)			
第9回：デザイン分野における音と造形との関わりによる造形表現、自己表現の探求①(担当：尹智博)			
第10回：デザイン分野における音と造形との関わりによる造形表現、自己表現の探求②(担当：尹智博)			
第11回：絵画分野の教材の理解をふまえた実習活動の指導、支援の検討(担当：吉川暢子)			
第12回：デザイン分野の教材の理解をふまえた実習活動の指導、支援の探求(担当：吉川暢子)			
第13回：鑑賞教材の理解をふまえた実習活動の指導、支援の検討(担当：吉川暢子)			
第14回：鑑賞教材の理解をふまえた実習活動の指導、支援の探求①(担当：吉川暢子)			
第15回：鑑賞教材の理解をふまえた実習活動の指導、支援の探求②(担当：吉川暢子)			
テキスト			
小学校学習指導要領解説図画工作編89円、中学校学習指導要領美術編100円			
参考書・参考資料等			
ハーバート・リード著 滝口修造訳『芸術の意味』みすず書房2001年 2,970円			
学生に対する評価			
授業への参加度（30%）、学習成果物（40%）、レポート（30%）			

授業科目名： 美術科教育法	教員の免許状取得のための 必修科目（中学校） 必修科目（高等学校）	単位数： 2単位	担当教員名：吉川暢子 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
1 中学校・高等学校における美術科教育の教科目標や内容を理解することができる。			
2 美術科の学習指導要領及び教科書に基づいて授業を構想することができる。			
3 中学校・高等学校における美術科の学習指導案を作成して模擬授業を実施し、その成果と課題を検討することができる。			
授業の概要			
中学校・高等学校美術科の目標や内容を理解し、学習指導要領及び教科書を参照しながら具体的な教科内容について考察する。今日的な科目に関わる教育課題を基にした教材を開発し、模擬授業を行いながら活動を提案し、中学校・高等学校美術科での実践力を身につける。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション（美術科教育の今日的課題や動向）			
第2回：美術科教育の歴史と理念			
第3回：中学校・高等学校学習指導要領について			
第4回：中学校・高等学校美術の題材について（教科書分析）			
第5回：年次・年間指導計画の作成			
第6回：内容と方法1（絵画・彫刻）-Miro・ロイロノートを用いて-			
第7回：内容と方法2（デザイン・工芸）-Miro・ロイロノートを用いて-			
第8回：内容と方法3（映像・メディア）-Miro・ロイロノートを用いて-			
第9回：内容と方法4（鑑賞教育）-Miro・ロイロノートを用いて-			
第10回：年次・年間指導計画の作成			
第11回：題材開発と学習指導案の作成1（中学1・2年生対象）			
第12回：題材開発と学習指導案の作成2（中学3年生・高校生対象）			
第13回：模擬授業1（発表）			
第14回：模擬授業2（省察）			
第15回：まとめ（美術科教育の意義の再考）			
テキスト なし			
参考書・参考資料等：中学校学習指導要領解説美術編、高等学校学習指導要領解説美術編			
学生に対する評価			
教材制作（30％）、レポート作成と提出（30％）、指導計画立案・模擬授業実践（40％）			

授業科目名： 美術科教材開発 実践研究	教員の免許状取得のための 選択科目（中学校） 選択科目（高等学校）	単位数： 2 単位	担 当 教 員 名： 佐原 理（徳島大学） 山田 芳明（鳴門教育大学） 吉川 暢子（香川大学） 担当形態： 複数
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 中学校および高等学校学習指導要領美術を中心に美術教育の役割について理解し教材開発が可能な知識および技術を獲得する。			
授業の概要 我が国の美術教育の中心的価値である創造性や感性に根ざした教育をどのような観点から構築可能なのか、美術科における教材開発実践の視点から経験的知識を体得したい。そこで、実際の教育現場ですぐに授業設計が可能となるための教材開発の知識を深め、教育現場を模して指導案を組み立て、模擬授業ができるように以下の事業計画に沿って美術教育の実践研究を行う。			
授業計画 第1回 美術教育はなぜ必要か？美術教育の現場から 第2回 教材開発の専門性と実際—実際の教育現場で求められる教材開発 第3回 教材開発の専門性と実際—学習指導要領から見る教材開発 第4回 教材開発の専門性と実際—実例にふれる教材開発アートの現場から 1 実例紹介 第5回 教材開発の専門性と実際—実例にふれる教材開発アートの現場から 2 ワークショップ 第6回 教材開発をしてみよう 1（ICT サポート：遠隔でアイデアをまとめる方法論） 第7回 教材開発をしてみよう 2（教育効果に合わせた教材開発） 第8回 教材開発内容の発表とフィードバック—まとめ 第9回 開発教材による授業設計をする 1（具体的な授業運営を考える） 第10回 開発教材による授業設計をする 2（必要な素材や教室づくり） 第11回 開発教材による模擬授業準備（授業運用をサポートする I C T の活用） 第12回 模擬授業発表 1（香川大学学生発表） 第13回 模擬授業発表 2（鳴門教育大学発表） 第14回 模擬授業発表 3（徳島大学発表） 第15回 模擬授業発表と振り返り			
テキスト 文部科学省中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説美術編 文部科学省高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説美術編			
参考書・参考資料等 福田 隆眞，茂木 一司，福本 謹一「美術科教育の基礎知識」建帛社 山崎 正明「中学校 美術の授業がもっとうまくなる 50 の技」明治図書出版 新聞伸也 他「ルーブリックで変わる美術鑑賞」三元社 神林 恒道，ふじえ みつる「美術教育ハンドブック」三元社			
学生に対する評価 授業毎小レポート（20%）、指導案作成課題（40%）、最終レポート（40%）			

授業科目名： 美術科授業研究Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目（中学校） 必修科目（高等学校）	単位数： 2単位	担当教員名：吉川暢子 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ 1. 美術科教育の教科指導に関する課題を抽出し、説明することができる。 2. 実際の授業での美術科教育の意義や方法について説明することができる。 3. 授業の立案・実践・評価をすることができる。			
授業の概要 美術科教育法の内容を踏まえ、美術科教育における課題を見だし、教材研究を行う。教材研究から見いだされた成果や課題を踏まえ、美術科における授業を立案し、模擬授業を実施する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション（美術教育の歴史） 第2回：学校現場における美術科教育の役割と価値 第3回：中学校・高等学校美術科の内容と目標 第4回：これまでの美術科教育における表現教育1（教育課題・社会背景） 第5回：これまでの美術科教育における表現教育2（内容） 第6回：これまでの美術科教育における表現教育3（材料・用具） 第7回：実践事例を基にした教材開発1（色や光・素材） 第8回：実践事例を基にした教材開発2（絵画・彫刻） 第9回：実践事例を基にした教材開発3（デザイン） 第10回：実践事例を基にした教材開発4（鑑賞教育）-デジタルカメラ・iPadを活用して- 第11回：模擬授業1（発表）（中学校1・2年生） 第12回：模擬授業2（発表）（中学校3年・高等学校） 第13回：模擬授業1・2（省察）-Miro（オンラインホワイトボードツール）を用いたディスカッション- 第14回：教材及び指導計画の再検討 第15回：まとめ（自己評価） 定期試験			
テキスト：なし			
参考書・参考資料等：中学校学習指導要領解説美術編、高等学校学習指導要領解説美術編			
学生に対する評価 教材制作（30%）、レポート作成と提出（30%）、指導計画立案・模擬授業実践（40%）			

授業科目名： 美術科授業研究Ⅱ	教員の免許状取得のための 必修科目(中学校 選択科目(高等学校)	単位数： 2単位	担当教員名：吉川暢子 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ 1. 美術科教育の課題を抽出し、説明することができる。 2. 教材研究の意義や方法について説明することができる。 3. 授業の立案・実践・評価をすることができる。			
授業の概要 美術科の教科書をはじめとした資料を検討し、その題材について、美術教育における教材としての可能性を追求する。美術科教育での教材について、素材研究を行い、その素材の性質を生かした授業提案や制作する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション（美術科教育の流れ） 第2回：美術科教育における教育的課題と社会的背景 第3回：中学校一学年の教科書の題材分析 第4回：中学校一学年の教科書の題材検討 第5回：中学校二学年の教科書の題材分析 第6回：中学校二学年の教科書の題材検討 第7回：中学校三学年の教科書の題材分析 第8回：中学校三学年の教科書の題材検討 第9回：素材研究①自然物、リサイクル素材 第10回：素材①実践 第11回：素材①の評価と成果発表 第12回：素材研究②各自の興味がある素材 第13回：素材②実践 第14回：素材②の評価と成果発表 第15回：まとめ（自己評価）			
テキスト：なし			
参考書・参考資料等：中学校学習指導要領解説美術編			
学生に対する評価 教材制作（30％）、レポート作成と提出（30％）、指導計画立案・模擬授業実践（40％）			

授業科目名： 美術科教育法Ⅰ	教員の免許状取得のための 選択科目（中学校） 選択科目（高等学校）	単位数： 2単位	担当教員名： 佐原 理
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 中学校および高等学校学習指導要領美術を中心に美術教育の役割について理解し授業担当が可能な知識を獲得する。			
授業の概要 この授業は美術教員の免許取得のための科目である。学習指導要領を中心に中学校美術科および高等学校美術科教育についての知識を深め、中学校美術科および高等学校美術科の役割を理解し授業を組み立てる事が出来るようになるように講義を進める。			
授業計画 第1回 美術教育はなぜ必要か？美術教員の役割と進路 第2回 学習指導要領が出来るまで－OECD2030プロジェクトと生きる力 第3回 学習指導要領総則編と美術教育のつながり 第4回 学習指導要領美術編と解説を理解しよう 第5回 美術教育の目標と表現・鑑賞 第6回 感性と情操について 第7回 教科内容学領域の取り扱い－美術の教育と美術による教育 第8回 獲得すべき能力と学習モデル 第9回 発達段階と指導方法 第10回 クラスルームマネジメントの方法 第11回 美術教育と言語活動（ICTの活用） 第12回 美術教育と身体 第13回 各社の教科書を参考に指導案を作成しよう 第14回 指導案の作成と評価方法 第15回 指導案の作成と模擬授業			
テキスト 中学校学習指導要領解説 美術編(最新版)，高等学校学習指導要領解説 美術編(最新版)			

参考書・参考資料等
日本文教出版、開隆堂、光村図書 各社の中学校および高等学校向け各学年教科書
学生に対する評価
授業課題及びレポート（ポートフォリオ）による評価

授業科目名： 生活経営学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 時岡晴美
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・家庭経営学（家族関係学及び家庭経済学を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 現代社会における生活の仕組みや、生活構造について理解することによって、主体的に家庭生活の経営・管理に取り組むことの重要性を理解できる。また、現代社会における生活の変容過程について学習することにより、生活の将来像について構想することができる。生活を客観的に捉えてその改善に取り組む態度を養うことは、生活実践を中核に据える家庭科において非常に重要な課題である。そこで到達目標は、①現代社会における生活の仕組みや、生活構造について理解し、その変容過程について考察することができる、②自己の生活を客観的にみることができ、よりよい生活を主体的に営むことができる、である。			
授業の概要 人間の生活の中核である家庭生活の経営と管理について概説する。狭義の基礎的な事項として、生活時間とストレスの管理、家族関係、生活経済の基本構造、家庭の経済活動などをとりあげ、人との相互作用としての生活のいとなみを解明していく。			
授業計画 (1) 家庭と社会 (2) 現代の生活と家族 (3) 現代の生活と家族関係の変化 (4) 家庭の機能 (5) 生活構造と生活 (6) 生活構造と生活の変容 (7) 生活時間構造からみた現代の生活 (8) 生活時間とストレス管理 (9) 生活経済の基本構造 (10) 生活経済の現代的特徴 (11) 消費者行動と家庭経済 (12) 消費者行動からみた今後の生活経済 (13) これからの家庭生活 (14) 生活経営の将来像 (15) まとめと課題レポート出題 定期試験			

テキスト

時岡・大久保・岡田編『地域・学校の協働が醸成する「まちづくりマインド」～多様化する現代社会における「ソフトのまちづくり」の展望』福村出版、2022年

参考書・参考資料等

必要に応じて適宜配布する

学生に対する評価

定期試験（50％）、課題レポート（50％）

授業科目名： 家族関係学	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 時岡晴美
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・家庭経営学（家族関係学及び家庭経済学を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
現代は家族に関する情報があふれており、必ずしも正しいとはいえないものや誤解を生むものなども多く存在している。この授業では、まず、家族に関する正しい認識を得ることを基本の目的とし、さらに、家族のありようについて、さまざまな立場から考察する態度を養うこととする。教育の現場においては、生徒の家族環境は多様な意味で重要な要素であるが、プライバシー保護の観点から個別の詳細については知り得ないこともある。このため、一般的な状況に関する知識をもって個別対応ができる力を身につけるものである。			
到達目標：①家族に関する正しい認識を得る。②現代家族のありようについて、さまざまな立場から考察できる。			
授業の概要			
生活の単位としての家族について、その実態と近年の動向を明らかにし、社会変容との相互関係をふまえながら、現代の家族関係について考察していく。日本の家族の歴史的変遷や、世界の多様な家族形態、各国における最新の動向についても論述する。			
授業計画			
(1) オリエンテーション～家族とは～			
(2) 変わりゆく家族と世帯			
(3) 家族類型と近年の変化			
(4) 家族制度の変遷			
(5) 日本における家父長制			
(6) 民法にみる家族関係			
(7) 数字でみる現代日本の家族			
(8) 家族のコミュニケーションと人間関係			
(9) 現代の夫婦関係			
(10)現代の親子関係			
(11)「連合」と「同盟」からみた家族関係			
(12)家族の発達段階とその課題			
(13)現代における老親と子家族の関係			
(14)先進事例にみる家族支援のあり方			

(15)まとめ、小テスト
定期試験
テキスト
必要に応じて適宜資料を配布する、下記書籍を参照すること
参考書・参考資料等
岩上真珠「ライフコースとジェンダーで読む家族（第3版）」有斐閣コンパクト、2013年
学生に対する評価
定期試験50%、小テスト20%、課題レポート30%

授業科目名： 生活課題の調査と分析	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名：坂本有芳 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 家庭経営学（家族関係学及び家庭経済学を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) 持続可能な社会を目指したライフスタイルに対する理解を深め、生活の中から問題を見いだして課題を設定しそれを解決する方法を検討する。 (授業の到達目標) 世の中に大量にあふれる生活情報の中から家庭経営に関連した適切な情報を収集する方法を学ぶとともに、 I C Tや統計資料等を活用して整理できる力を身につける。			
授業の概要 オンデマンドによる講義と課題による演習を行う。各自の関心に応じて持続可能な社会づくりにかかわる家族、衣食住、消費の諸課題よりテーマを定めて統計データを検索し、時系列的变化や国際比較などを行い、現代日本の課題について各自の見解をレポートにまとめる。			
授業計画 第1回：生活課題に関わる公的統計とその利用、持続可能な社会づくりにかかわるテーマ設定 第2回：表計算ソフトウェアを利用した統計資料の加工と整理 第3回：収集したデータに応じたグラフ作成 第4回：様々な質的調査、量的調査の特徴 第5回：標本抽出法、良質な標本の判断基準 第6回：概念測定、変数の型と測定誤差 第7回：文書作成アプリケーションソフトを活用したレポート作成法 第8回：生活課題レポートの作成（レポート提出）			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 『消費者白書』『環境・循環型社会白書』各年版			
学生に対する評価 出席および授業内での課題実施状況（60%）、レポート課題の成績（40%）により、本授業科目の到達目標への達成度を総合的に判断する。			

授業科目名： 家庭経営学		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：森田美佐 担当形態：単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項 ・家庭経営学（家族関係学及び家庭経済学を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 （授業のテーマ）本授業は、個人と家族成員の誰もが、かれらの福利（well-being）の獲得を通して、より自分らしく生きること（クオリティ・オブ・ライフの向上）を目指す。 （授業の到達目標）受講生は、生活者としての主体形成と、受講生が家庭科の授業を行う際に必要な学問的背景と授業展開の際に重視すべき知識を修得する。				
授業の概要 本授業では、受講生は中学・高校の家庭科免許のために必要な理論と実践をふまえつつ、家族・家庭の機能と、個人・家族および家庭生活を取り巻く社会・経済・政策等の現状と課題を学ぶ。またそれらの問題をジェンダー平等の視点から捉え、受講生の生活をめぐる諸問題への対応を学問として学びつつ、持続可能な生活設計に役立つ力を身につける。				
授業計画 第1回：オリエンテーション （授業の目標、テーマ、概要、評価、注意事項、学習指導要領における本授業の位置付け） 第2回：今日の生活経営 （今日の生活における多様性・複雑性とその課題を明確にする） 第3回：生活経営に求められる視点 （学問としての生活環境、生活資源、生活価値、生活関係とそれらとの関連性を理解する） 第4回：生活経営の研究 （先行研究を土台として、ライフ（生命・暮らし・人生）の視点で持続可能な生活を考える） 第5回：生活を取りまく社会環境－生活の組織と地域－ （地域や仲間・団体などの互助・共助による自立と共生の可能性を考える） 第6回：生活時間を考える （生活時間における知識の獲得と生活時間に潜むジェンダー問題を明らかにする） 第7回：家計を考える （経済的自立に向けた知識の獲得と家計に潜むジェンダー問題を明らかにする） 第8回：ひと・ものとの関わり－生活のための「資源」－ （現代社会における、モノやサービスとの付き合い方を考える） 第9回：生活経営における労働問題 （人間らしい働き方(Decent work)とワーク・ライフ・バランスの課題を明らかにする） 第10回：生活の社会化・家事労働 （家庭の機能の理解と生活の多様化における家事労働の課題を明らかにする） 第11回：生活と福祉 （介護問題を含めて、今後の日本の社会保障のあり方を生活経営の側から考える） 第12回：持続可能な生活設計を考える （個人・家族の生活の豊かさが担保・維持される社会のあり方を、他国の事例も含めて考える） 第13回：プレゼンテーション（A班） （生活の持続可能性を保障する社会に向けた受講生の提案と質疑応答） 第14回：プレゼンテーション（B班） （生活の持続可能性を保障する生活者の役割と責任に関する受講生の提案と質疑応答） 第15回：本講義のまとめ （前回、前々回の班における受講生の発表を踏まえての、全員の議論と総括） 定期試験は実施しない				

テキスト

日本家政学会生活経営学部会編，2020，『持続可能な社会をつくる生活経営学』朝倉書店，
ISBN 978-4-254-60025-4

参考書・参考資料等

日本家族社会学会編，2018，『現代家族を読み解く12章』，丸善出版
ISBN 978-4-621-30343-6

学生に対する評価

総合的に評価（①課題（50％），③レポート内容（50％））

授業科目名： 被服学Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 一色玲子
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・被服学（被服製作実習を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 中学および高等学校の家庭科の衣生活領域を教えるために必要な基礎的知識や技能を身につけることを目的とする。また、ハーフパンツや布を用いた小物の製作を通して、実習を指導するために必要な基礎的知識や技能を身につける。 1. 中等家庭科の衣生活分野の基礎的な知識について説明することができる。 2. 被服管理の効果的な方法を説明することができる。 3. 被服や布を用いた小物の製作に関する基礎的な技能を身につけることができる。 4. 被服や布を用いた小物の構成をふまえた教材を作成することができる。			
授業の概要 中学及び高等学校の衣生活領域に関する内容について、素材の特性を把握した被服管理及び被服製作の基礎的な知識及び技能を身につけることを目的とする。			
授業計画 第1回：ガイダンス、衣服の成り立ちと役割 第2回：被服構成と被服の歴史、平面構成・立体構成 第3回：被服の選択：品質表示、サイズ表示、新しい衣服素材 第4回：着装とライフステージ 第5回：被服管理の基礎：家庭洗濯と商業洗濯 第6回：被服管理の実験① 界面活性剤、洗濯用洗剤 第7回：被服管理の実験② 汚れの種類と繊維、染み抜き 第8回：被服製作① ショートパンツ：素材の特性と型紙製作 第9回：被服製作② ショートパンツ：裁断、縫製 第10回：被服製作③ 縫製、縫い代・布端の始末 第11回：布を用いた小物の製作① 基礎縫い、巾着袋 第12回：布を用いた小物の製作② ファスナー付ポーチ 第13回：教材作成① 製作過程で生徒がつまづくポイントの整理 第14回：教材作成② 生徒のつまづきを解消する教材作成 第15回：まとめ 定期試験			
テキスト 適宜資料を配布する。			
参考書・参考資料等 ・衣生活論 持続可能な消費と生産、山口庸子・生野晴美編著、アイ・ケイコーポレーション			
学生に対する評価 定期試験40％、提出課題40％、授業への参加度20％			

授業科目名： 被服学Ⅱ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 一色玲子
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・被服学（被服製作実習を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 中学校及び高等学校の家庭科で取り上げられる被服材料、被服環境、被服の維持管理などについて学習する。特に、中学校や高等学校教員として、身近な材料を用いて簡単な実験や実習を計画、実践できることを目指す。 1. 被服の材料、被服環境、維持管理について説明することができる。 2. 被服の材料、被服環境、維持管理について、身近な材料を用いて簡単な実験や実習を計画・実践できる。			
授業の概要 中学校及び高等学校の家庭科教員として必ず身につけておきたい、被服の材料、着用によって作り出される環境、維持管理などについて扱う。被服の材料である繊維や布の性質や成り立ち、被服の機能や維持管理などに関する知識及び技能を身につけることをねらいとしている。			
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：被服の材料① 繊維の特徴 第3回：被服の材料② 繊維の鑑別実験 第4回：被服の材料③ 布の構造と特徴 第5回：被服の材料④ 布の構造と特徴に関する実習 第6回：被服の材料⑤ 布の性質 第7回：環境としての被服① 温熱環境と運動機能 第8回：環境としての被服② 温熱環境と運動機能に関する実験 第9回：被服の管理① 基礎 第10回：被服の管理② 家庭洗濯 第11回：被服の管理③ 商業洗濯 第12回：被服の管理④ 仕上げ・保管 第13回：被服の購入 第14回：被服と環境 第15回：まとめ 定期試験			
テキスト 適宜資料を配布する。			
参考書・参考資料等 ・消費者のための被服材料、石毛フミ子他、実教出版 ・被服の資源と被服材料、日本家政学会編、朝倉書店			
学生に対する評価 試験40%、実験レポート40%、授業への参加度20%			

授業科目名： 被服学実習	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1 単位	担当教員名： 一色玲子
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・被服学（被服製作実習を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 被服の構成の原理と特徴について学ぶとともに、基礎的な実習を通じて中学校や高等学校の家庭科で生徒に説明・提示ができるよう、知識と技能を身につけることを目指す。 1. 被服の構成の原理とそれぞれの縫製手順について説明できる。 2. 被服製作に必要な基礎的知識および技能を身につけている。			
授業の概要 被服製作の基礎的な知識及び技能を扱う。シャツブラウス、一つ身の製作を通して、中学校や高等学校の家庭科教員として必要な知識と技能を身につけることを目指す。			
授業計画 第1回：ガイダンス 被服の構成、洋裁① デザイン画の作成 第2回：洋裁② 採寸、型紙作成 第3回：洋裁③ 地直し、しるしつけ、裁断 第4回：洋裁④ ミシンの使い方、ポケット付け 第5回：洋裁⑤ 襟の縫製 第6回：洋裁⑥ 前身頃の打合せの始末、肩の縫い合わせ 第7回：洋裁⑦ 襟の縫い合わせ 第8回：洋裁⑧ 袖口の始末、袖付け 第9回：洋裁⑨ 袖下、脇の縫い合わせ 第10回：洋裁⑩ 袖口の始末、裾野始末 第11回：洋裁⑪ ボタンホール作成、ボタン付け 第12回：洋裁⑫ 着装評価 第13回：和裁① 基礎縫い、一つ身の作成：裁断 第14回：和裁② 一つ身の作成：縫製 第15回：和裁③ 一つ身の作成：仕上げ、まとめ			
テキスト 適宜資料を配布する。			
参考書・参考資料等 ・改訂版・服飾造形講座〈3〉ブラウス・ワンピース（文化ファッション大系）、文化服装学院編、文化出版局			
学生に対する評価 製作レポート30%、製作物のできばえ30%、着装評価10%、授業への参加度30%			

授業科目名： 被服学実験	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名： 一色玲子
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・被服学（被服製作実習を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 中学校及び高等学校の家庭科の衣生活の学習には実験を取り入れた題材があり、自身で実験が組み立てられることが求められる。本科目では、繊維や被服に関する基礎的な実験を計画、実行、評価できることを目指す。 1. 衣生活に関する簡単な実験の操作ができる。 2. 衣生活に関する実験結果を説明することができる。 3. 衣生活に関する簡単な実験結果について考察・討議・評価することができる。 4. 家庭科の衣生活に関する題材をわかりやすく説明できるような実験計画が立てることができる。			
授業の概要 繊維や被服に関する基礎的な実験を扱う。中学校及び高等学校の家庭科教員として必要な知識と技能を身につけることを目的としている。			
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：繊維の合成 第3回：繊維の鑑別 第4回：布の性質 1 天然繊維 第5回：布の性質 2 化学繊維 第6回：洗濯用水 第7回：界面活性剤の合成 第8回：界面活性剤の性質 第9回：洗浄力試験 第10回：染料の合成 第11回：染料濃度の定量 第12回：染色実験 1 草木染め 第12回：染色実験 2 型染め 第14回：染色堅牢性 第15回：まとめ			
テキスト 適宜資料を配布する。			
参考書・参考資料等 ・被服の機能性保持、日本家政学会編、朝倉書店			
学生に対する評価 実験レポート60%、授業への参加度40%			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：福井典代
テキスタイル基礎科学	選択科目	2 単位	担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・被服学（被服製作実習を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ			
(授業のテーマ)			
本講義は、被服材料・整理に関する基礎的な知識を習得し被服構成を理解することである。			
(授業の到達目標)			
1. 被服材料に関する基礎的な知識を習得する。			
2. 被服整理に関する基礎的な知識を習得する。			
3. 手縫いの基礎、ミシン縫いの基礎を習得する。			
授業の概要			
繊維から糸、糸から織物・編物にいたる各段階の組織・構造が、衣服の外観、ドレープ性、フィット性、取り扱いやすさなどの消費性能にどのように影響するかについて理解する。さらに洗濯に関する基礎的な知識を習得するとともに、被服製作実習を行う。			
授業計画			
第1回：繊維の種類と特徴			
第2回：糸の種類と特徴			
第3回：織物・編物の種類と特徴			
第4回：洗剤の種類と特徴			
第5回：家庭洗濯（洗濯機の種類、合理的な洗濯方法）			
第6回：商業洗濯（ドライクリーニング、ウェットクリーニング、ランドリー）			
第7回：被服製作実習（手縫いの基礎）			
第8回：被服製作実習（型紙作成）			
第9回：被服製作実習（布の地直し、裁断）			
第10回：被服製作実習（しるしつけ）			
第11回：被服製作実習（ミシン縫いの基礎）			
第12回：被服製作実習（縫い代の始末）			
第13回：被服構成実習（部分縫い）			
第14回：被服構成実習（本縫い）			
第15回：試験と着装観察			
テキスト			
特になし			

参考書・参考資料等

必要に応じてプリントを配布する。

学生に対する評価

小レポート，製作物，製作レポート

授業科目名： 食物学Ⅰ		教員の免許状取得のための 必修科目		単位数： 2単位		担当教員名：畦 五月 担当形態：単独	
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）					
施行規則に定める 科目区分		教科に関する専門的事項 ・食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む。）					
【授業のテーマ】 食品中の栄養成分について食品群毎、栄養素毎に学習することにより家庭科の食領域の学習内容の理解を図る。							
【授業の到達目標】 1.食品成分の特徴やその機能について学習する。食物中での存在形態及び、調理され食用となることで変化する成分やそれらの成分が消化・吸収される仕組みを理解する。 2.中学校・高等学校の調理実習の教材内容を実習によって理解する。 3.中学校の家庭科における食物領域の授業が実施できる技能を身につけることができる。							
授業の概要 食品中の栄養成分の特徴や役割、特殊成分について学習する。また食品衛生学の基本を学習することで、食材の扱いの基本を知る。これらの学習後、成分の特徴を生かした基本的な調理操作の実習を行う。さらに、栄養学の観点からは五大栄養素の役割や体内への消化吸收、微量栄養素の欠乏症などについても理解の浸透をはかる。							
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：米の特性[栄養成分（化学構造、結合様式など）・調理性・調理による成分変化など] 第3回：麦・種子の特性 第4回：芋の特性 第5回：野菜・果物・海藻の特性 第6回：卵、牛乳の特性 第7回：畜肉・魚の調理性 第8回：食品衛生（食中毒など） 第9回：食品衛生(食品添加物、食の安全など) 第10回：栄養価の評価方法と消化吸收 第11回：食文化 第12回：調理実習（炊飯・みそ汁、お茶の入れ方） 第13回：調理実習（炊飯・肉じゃがなど） 第14回：調理実習（ムニエル・スープなど） 第15回：まとめ							

定期試験
テキスト
・「調理学」学文社、吉田勉監修（平成25年） ・「食べ物と健康」学文社、吉田勉監修（平成24年）
参考書・参考資料等
文科省(平成29年)小学校学習指導要領解説 文科省(平成29年)中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 文科省(平成30年)高等学校学習指導解説 家庭編
学生に対する評価
定期試験(60%)、プレゼンテーション(40%)により評価する。

授業科目名： 食物学Ⅱ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：畦 五月 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分	教科に関する専門的事項 ・食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む。）		
【授業のテーマ】 健康的な生活を送るための食生活の基本である、栄養学の内容を中心に授業をすすめる。さらに栄養を含む食品への理解を深めるためにその調理性及び、加工についての理解を深める。			
【授業の到達目標】 1. 食品の栄養成分を理解し、その消化・吸収、代謝の仕組みを理解する。 2. 各栄養素を多く含む食品について理解する。 3. 植物性及び動物性食品の特性と調理性について理解する。			
授業の概要 現代の食生活の特徴を捉え、課題を認識する。その上で、食物を摂取した際に得られる栄養成分の体内での吸収・代謝の仕組みを学習することで、健康的な食生活を送るための基礎的知識を得る。また、食品の調理性を理解することにより食品個々の性質を知り、その性質を利用したさまざまな加工についても理解する。			
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：栄養学の基礎 第3回：日本人の食生活とその現状 第4回：栄養と代謝 第5回：児童生徒の食生活 第6回：消化吸収の仕組み 第7回：糖質・脂質を多く含む食品 第8回：タンパク質を多く含む食品 第9回：糖質・脂質を多く含む食品 第10回：ビタミンの代謝 第11回：植物性食品の加工 第12回：植物性食品の調理性 第13回：動物性食品の加工 第14回：動物性食品の調理性 第15回：まとめ 定期試験			

テキスト
・「基礎栄養学(第三版)」江指隆年編著 同文書院、
・「食べ物と健康」吉田勉監修 学文社 (平成24年)
参考書・参考資料等
文科省(平成29年) 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編
文科省(平成30年) 高等学校学習指導要領 家庭編
学生に対する評価
試験60%、プレゼンテーション40%により評価する。

授業科目名： 調理学実習Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1 単位	担当教員名：畦 五月 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分	教科に関する専門的事項 ・食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む。）		
【授業のテーマ】 調理操作の基本と調理による状態変化た成分変化について実習や実験により理解を深めることにより、現場での調理実習を組み立てることができる。 【授業の到達目標】 1. 各料理の調理方法、調理による状態や成分変化の特徴を理解しながら、実習を行うことができる。 2. 調理用語について理解し、自分の言葉として説明できる。 3. 調理操作によって起こる食品成分の変化について詳細に調べ、まとめることができる。 4. 調理実習を現場での授業時間に合わせて組み立てることができる。			
授業の概要 中学校・高等学校の家庭科の実習に必要な調理操作を日本料理を中心に実習する。主として日本料理の特徴と、操作毎の調理のコツと技術を習得する。また、調理操作による食品中の成分変化についてもあわせて学習する。			
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：きり方の理論と実習（野菜） 第3回：さばき方の理論と実習（魚） 第4回：だしについての理論と実習・炊飯についての理論と実習 第5回：ゆで方の理論と実習 第6回：煮る調理操作についての理論と実習 第7回：蒸す調理操作についての理論と実習 第8回：焼く調理操作についての理論と実習 第9回：揚げる調理操作についての理論と実習 第10回：練る調理操作についての理論と実習 第11回：寄せる調理操作についての理論と実習 第12回：日本の料理形式 第13回：環境について配慮した実習 第14回：1時間分の献立作成 第15回：1時間分の献立作成分についての実習			

テキスト：

- ・「調理学」吉田勉監修、学文社（平成25年）
- ・開隆堂「技術・家庭」家庭編（中学校教科書）
- ・東京書籍「家庭基礎」（高等学校教科書）
- ・「NEW 調理と理論 第二版」山崎清子ら著 同文書院

参考書・参考資料等

文科省（平成29年）中学校学習指導要領解説 技術・家庭編

文科省（平成30年）高等学校学習指導要領解説 家庭編

学生に対する評価：

実習中の態度や実習に対する取り組み方(20%)と、最終レポート(実習ノート)(80%)により評価する。

授業科目名： 調理学実習Ⅱ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名：畦 五月 担当形態：単独
科 目	教科及び指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む。）		
【授業のテーマ】 調理実習Ⅰで学習した内容と技術をもとにして、中国料理と西洋料理の基本的操作、理論などを学習する。 【授業の到達目標】 1. 中国料理や西洋料理に関する調理用語や調理法について理解することができる。 2. 食材の知識を得ることにより、食材の扱い方を理解し、その扱いにあった調理法を知る。 3. 料理法ごとのマナーを習得し、食文化の理解を図る。			
授業の概要 調理学実習Ⅰで履修した基本的調理操作を確認しながら、中国料理や西洋料理の特徴を理解する。中国料理では、料理法毎の食材の扱いの相違点や中国料理独自の素材などの基本を知る。また配膳方法や食べ方についても実習する。西洋料理では、主としてソースに着目した献立を実習し、同時に配膳方法やマナーも学修する。各様式の調理のコツと技術、その科学を習得するとともに、調理操作による食品中の成分変化についてもあわせて学修する。			
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：中国料理の特徴について 第3回：湯菜の理論と実習 第4回：炒菜の理論と実習 第5回：炸菜の理論と実習 第6回：蒸菜の理論と実習 第7回：溜菜の理論と実習 第8回：拌菜の理論と実習 第9回：点心の理論と実習 第10回：西洋料理の特徴について 第11回：ホワイトソースの理論と実習 第12回：ブラウンソースの理論と実習 第13回：ベシャメルソースの理論と実習 第14回：カラメルソースの理論と実習			

第15回：パイとスポンジケーキの理論と実習

テキスト：

「調理学」吉田勉監修、学文社（平成25年）

「NEW 調理と理論 第二版」 山崎清子ら著 同文書院

開隆堂「技術・家庭」家庭編(中学校教科書)

東京書籍「家庭基礎」(高等学校教科書)

参考書・参考資料等

文科省(平成29年)中学校学習指導要領解説 技術・家庭編

文科省(平成30年)高等学校学習指導要領 家庭編

学生に対する評価：

実習中の態度や実習に対する取組み方と、最終レポート(実習ノート)により評価する。

授業科目名： 食物学実験	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名：畦 五月 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分	教科に関する専門的事項 ・食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む。）		
【授業のテーマ】食品の成分に関する実験や加工実習の基本操作を習得し、現場での授業計画に導入できる技能と能力を養う。			
【授業の到達目標】			
1. 食品に関する実験操作及び内容を把握でき、計画的に実験・実習に取り組むことができる。			
2. 安全に、かつ計画的に実験ができるように考えて実施することができる。			
3. 食品を加工することで生じる成分変化や状態変化を実験を通して理解することができる。			
4. 将来家庭科の教員として授業計画に実験内容を組み入れることができるようになる。			
授業の概要			
家庭科の授業に実験や加工実習を導入する、あるいは課題研究に利用するために食品の成分に関する基礎実験や食品加工の実習を行う。			
授業計画			
第1回目 ガイダンス			
第2回目 水分の測定			
第3回目 脂質の定性試験			
第4回目 脂質の定量			
第5回目 タンパク質の定性試験			
第6回目 タンパク質の定量			
第7回目 ビタミンCの定性・定量			
第8回目 食品の色素の調理における変化			
第9回目 酵素による消化実験			
第10回目 官能検査の方法			
第11回目 食品加工（ヨーグルト作成）			
第12回目 食品加工（シヤム作成）			
第13回目 食品加工（豆腐作成）			
第14回目 食品加工（かまぼこ作成）			
第15回目 まとめ			
テキスト			
毎時間、該当の実験・実習方法に関する資料を配布する。			
参考書・参考資料等			

「調理学」学文社、吉田勉監修

文科省（平成29年）小学校学習指導要領解説、中学校学習指導要領解説 技術・家庭編

文科省（平成30年）高等学校学習指導解説 家庭編

「NEW 調理と理論 第二版」山崎清子ら著 同文書院

学生に対する評価

レポート(80%)、授業への積極的な取り組み(20%)

授業科目名： 食物学特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名：西川和孝 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) 教育実践の基礎として、食物学の授業展開に必要な知識を習得する。 (授業の到達目標) ①食物学の基礎知識について理解できるようになる、②食生活の課題を認識し、学校現場で 授業展開できる能力を身に付けるようになる、③ICT 機器に関心を持ち、食教育に活用できる ようになることが、授業の到達目標である。			
授業の概要 ・現代の食生活の課題をまとめる。 ・食事の役割を理解するとともに、食物に含まれる五大栄養素の基本的役割をまとめる。 ・学校教育における食教育、地域の食文化について授業を行う。			
授業計画 第1回：授業概説、現代の食生活の課題、食事の役割等 第2回：食品、栄養と食生活（炭水化物について） 第3回：食品、栄養と食生活（脂質について） 第4回：食品、栄養と食生活（たんぱく質について） 第5回：食品、栄養と食生活（ビタミンについて） 第6回：食品、栄養と食生活（無機質、水について） 第7回：学校教育における食教育、地域の食文化等 第8回：まとめ			
テキスト 授業中に適宜資料を配布する。			
参考書・参考資料等 精選栄養学（五十嵐一脩、藤原葉子著、実教出版） 食品成分表（香川明夫監修、女子栄養大学出版部）			
学生に対する評価 毎回の授業の最後に提出する課題			

授業科目名： 食物学総論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名： 畦 五月
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・食物学(栄養学、食品学及び調理実習を含む。)		
授業のテーマ及び到達目標 (授業のテーマ) 栄養の情報は氾濫混し、フェイク情報も入り混じっている状態ともいえる。そこで、五大栄養素の知識を理解し身につけた上で、誤った栄養学の知識に振り回されていないか、偏った食生活になっていないかなどの観点から食生活の見直しを行い、その解決方法を提示・実践できるようにする。 (授業の到達目標) ・五大栄養素の働きについて説明し、記述できる。 ・食品の組み合わせと栄養バランスを説明し、食生活の改善点を見つけることができる。 ・偏った栄養摂取による疾病について説明し、その予防策を記述することができる。 ・自らの食生活の課題を見つけ、解決方法を探り、実践することができる。			
授業の概要 栄養素の基本的知識や、偏った栄養摂取で発生する疾病を学習した上で、栄養バランス、食材の組合せの方法を知り、健康を維持していくために自分(家族)の食生活を見直し、改善方法を見つけ、実践(改善)していく。			
授業計画 第1回：オリエンテーション、食品の成分とは 第2回：糖質の機能と疾病、自分の食生活の課題に気づく 第3回：タンパク質の機能と疾病、自分の食生活の課題に気づく 第4回：脂質の機能と疾病、自分の食生活の課題に気づく 第5回：ビタミン、ミネラルの働き、自分の食生活の課題に気づく 第6回：栄養バランスの見極め方、自分の食生活の課題に気づく 第7回：自らの食生活の課題解決方法を探る(プレゼンテーション) 第8回：まとめ・試験			
テキスト： 栄養学に関する資料を授業内容に応じて配付する。			
参考書・参考資料等： 栄養学に関する資料を授業内容に応じて配付する。			
学生に対する評価：試験（50%）、毎回の授業後の小テスト（20%）、提出物（30%）			

授業科目名： 住居学Ⅰ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 時岡晴美
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・住居学 ・住居学（製図を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 現代は、住生活においても主体的取り組みが必要となっている。自己の住生活を自ら創造していく取り組みと共に、その質的向上を図ることが求められる。本授業では、理論的な学習に加えて、現在の自己の住生活について客観的に考察することを通して、主体的に住生活を創造していく態度を養うことを目的としている。さらに、アジアやヨーロッパ各国の歴史的・伝統的な住居の学習を通して、それぞれの住まい方について理解し、環境に配慮した住生活について考察し実践する力を身につける。到達目標は、①現代の住まいと住環境にかかわる基礎的・基本的事項を理解する、②環境に配慮した住生活について考察することができる、③学習したことを自己の生活の質的向上に生かすことができる。			
授業の概要 現代の住生活は、商品としての住宅を購入して居住する傾向が強まっている。このため、自己の住生活創造およびその質的向上に資することを目的として、住生活にかかわる基本的事項について解説する。また、映像資料等を用いて、日本をはじめとしてアジアやヨーロッパの歴史的都市地区を例示し、それぞれの住まい方について検討を加えて、環境に配慮した住生活について考察する。			
授業計画 (1) オリエンテーション、住まい学のすすめ (2) ライフスタイルと住まいの仕組み (3) 都市化する世界 (4) 西洋の住まいの変遷 (5) 日本の伝統的住居とその変遷 (6) 歴史的都市の町並みと住環境 (7) 居住水準とアメニティ (8) 多様化する家族の住まい方 (9) 現代の子育てと住まい (10) ライフステージと住宅選択 (11) 住宅商品化時代の住まいづくり			

- (12) 高層住宅の安心と安全
- (13) 災害時への対応と住まい
- (14) 住まいづくりの展望
- (15) まとめ、小テスト

定期試験

テキスト

建築のテキスト編集委員会編（2015）初めて学ぶ住居学、学芸出版社 ISBN978-4-7615-2596-5

参考書・参考資料等

必要に応じて配布する

学生に対する評価

定期試験（50％）、授業中に出題する小レポート3点の計（50％）

授業科目名： 住居学Ⅱ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 時岡晴美
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・住居学 ・住居学（製図を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
授業のテーマ：現代の住まいと住環境にかかわる現状と課題を理解することである。具体的なテーマに即して質の高い住環境について検討した上で、住環境の今後の方向性について考察する。			
到達目標：①現代の住まいと住環境にかかわる現状と課題について説明できる。②具体的なテーマに即して質の高い住環境について説明できる。③住環境の今後の方向性について考察し課題を挙げることができる。			
授業の概要			
現代の住まいや住環境は、短期間で大きく変化する傾向にあるため、現状や課題を認識した上で将来像を描くことが求められる。本授業では、住まいと住環境にかかわる現状と課題について解説し、具体的なテーマごとに今後の方向性について考察する。全体を通して、質の高い住環境について検討していく。			
授業計画			
(1) オリエンテーション、人間生活と住環境			
(2) ライフステージと住環境			
(3) ライフステージの進展に伴う住生活の変化			
(4) ライフステージからみた課題の整理と探求			
(5) 家族と住環境			
(6) 現代における家族の変容と住環境			
(7) 現代の住環境からみた課題の整理と探求			
(8) 高層・低層住宅と住環境			
(9) 事例にみる高層・低層住宅の住環境			
(10) 高層・低層住宅からみた課題の整理と探求			
(11) 伝統的住文化について			
(12) 日本の伝統的住文化			
(13) 歴史的都心地区における伝統的住文化			
(14) 伝統的住文化からみた住課題の整理と探求			

(15) まとめ、課題レポート出題

定期試験

テキスト

建築のテキスト編集委員会編（2015）初めて学ぶ住居学、学芸出版社

参考書・参考資料等

必要に応じて適宜配布する

学生に対する評価

定期試験（50％）、課題レポート（50％）

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：金貞均
住居学	必修科目	2単位	担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 住居学 ・ 住居学（製図を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) 住居と住生活に関する基礎知識の修得および課題探究 (授業の到達目標) 住居と住生活に関する基礎知識の修得および課題探究を通して、①住居と住生活に関する基礎知識を理解し、説明できる、②住生活および住環境問題を認識し、改善・解決方法を提案できる、③健全な住意識や住要求を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 住まいを時間軸と空間軸から捉え、住まいの機能・役割や住文化の継承と発展の様相を学び、今日の住生活および住環境を取り巻く状況や問題点を探究する。			
授業計画 第1回：日本の住居と生活様式 第2回：日本の住まいの近代化 第3回：生活行為と住空間の構成 第4回：間取りの計画と住まい方・使い方の分析 第5回：住宅平面図を読む 第6回：住宅平面図を描く 第7回：住まいの日常的管理 第8回：高齢期の住まい 第9回：災害と住まい 第10回：健康で快適な住まい 第11回：環境と住まい 第12回：地域性から住まいのかたちを問う 第13回：地域の伝統的な住まい・まちの調査（フィールドワーク） 第14回：地域の伝統的な住まい・まちの調査報告会 第15回：総括 住教育の意義と課題			
テキスト 必要に応じて適宜資料を配布する。			

参考書・参考資料等

精選住居学（後藤久著、実教出版、2016）

初めて学ぶ住居学（＜建築のテキスト＞編集委員会編、学芸出版社、2015）

図解住居学2 住まいの空間構成（図解住居学編集委員会編、彰国社、2000）

図解住居学4 住まいと社会（図解住居学編集委員会編、彰国社、2005）

建築製図 基本の基本（櫻井良明著、学芸出版社、2010）

日本人のすまい（平井聖著、市ヶ谷出版社、1998）

学生に対する評価

授業テーマ別レポート（70%）、フィールドワーク報告書と発表（30%）

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
保育学Ⅰ	必修科目	2単位	松井 剛太
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・保育学（実習を含む。） ・保育学（実習及び家庭看護を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ （授業の到達目標） ・現代の子どもと家庭・福祉・行政的な環境について説明することができる。 ・家庭科の授業における保育学の位置づけと授業例について説明することができる。 （授業のテーマ） 「保育学」に関するテーマとして、「乳幼児の発達」、「乳幼児の文化財（絵本やおもちゃなど）」、「中高生と乳幼児のふれあい体験」、「家庭看護」の4つを扱う。			
授業の概要 上記の4つのテーマに関して、現代の社会背景や授業例をもとに理解を深める。			
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：「乳幼児の発達」：子どもを取り巻く環境（家庭） 第3回：「乳幼児の発達」：子どもを取り巻く環境（地域社会） 第4回：「乳幼児の発達」：発達の基本と人間形成 第5回：「乳幼児の文化財」：遊びについて 第6回：「乳幼児の文化財」：おもちゃについて 第7回：「乳幼児の文化財」：絵本について 第8回：「中高生と乳幼児のふれあい体験」：ふれあい体験の目的について 第9回：「中高生と乳幼児のふれあい体験」：ふれあい体験のプログラムについて 第10回：「中高生と乳幼児のふれあい体験」：ふれあい体験の評価について 第11回：「中高生と乳幼児のふれあい体験」：授業例について 第12回：「中高生と乳幼児のふれあい体験」：実際の授業参加 第13回：「家庭看護」：食事について 第14回：「家庭看護」：健康管理について			

第15回：まとめ
テキスト 特になし
参考書・参考資料等 授業中に適宜資料を配付する。
学生に対する評価 毎回の授業の事前に提出するレポート（30％）、授業への参加（履修者生間での対話）（50％）、授業後の小レポート（20％）

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
保育学Ⅱ	選択科目	2 単位	松井 剛太
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 保育学（実習を含む。） ・ 保育学（実習及び家庭看護を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ (授業の到達目標) ・ 「保育学」のテーマに関して、文献の情報を収集し、整理することができる。 ・ 「保育学」のテーマに関して、整理した情報をもとに対話し、結論を導くことができる。 (授業のテーマ) 「保育学」に関するテーマとして、「乳幼児の発達」、「乳幼児の文化財（絵本やおもちゃなど）」、「中高生と乳幼児のふれあい体験」、「家庭看護」の4つを扱う。			
授業の概要 上記の4つのテーマに関して、文献購読をもとに理解を深める。			
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：「乳幼児の発達」：発達の基本について（1） 第3回：「乳幼児の発達」：家庭での生活について（2） 第4回：「乳幼児の発達」：保育施設での生活について（3） 第5回：「乳幼児の文化財」：絵本について（1） 第6回：「乳幼児の文化財」：おもちゃについて（2） 第7回：「乳幼児の文化財」：デジタルデバイスについて（3） 第8回：「中高生と乳幼児のふれあい体験」：ふれあい体験の目的について（1） 第9回：「中高生と乳幼児のふれあい体験」：ふれあい体験のプログラムについて（2） 第10回：「中高生と乳幼児のふれあい体験」：ふれあい体験の評価について（3） 第11回：「家庭看護」：食事について（1） 第12回：「家庭看護」：健康管理について（2） 第13回：「家庭看護」：病気について（3） 第14回：個々の関心に応じて、さらに深めた内容を共有 第15回：まとめ			

テキスト

特になし

参考書・参考資料等

「家庭科保育学習 中学生と乳幼児のふれ合い体験事例集」

学生に対する評価

毎回の授業の事前に提出するレポート（30％）、授業への参加（履修生間での対話）（50％）、授業後の小レポート（20％）

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名： 磯部 香
保育学	選択科目	2単位	担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 保育学（実習を含む。） ・ 保育学（実習及び家庭看護を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 (授業のテーマ) 家庭科の保育領域から、中学生・高校生に教える保育、及び、保育周辺領域を家族・ジェンダー・グローバルな視点で理解する。 (授業の到達目標) 保育・子育てを取り巻く最近の課題について理解できる。 グローバルな視点を養い、保育・子育てを相対化できる力を身につけることができる。 保育施設に赴き調査を遂行する能力、その結果を共有し表現する能力を修得できる。			
授業の概要 本授業では、中学・高校の家庭科免許のために必要な理論と実践をふまえつつ、保育・子育て周辺の領域である、家族、地域、政策、ジェンダーの側面から、日本を含めたアジアの保育・子育ての現状と課題を学ぶ。また実際にフィールドワーク調査に行き、体感することでグローバルな視点から保育・子育てを理解する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション (授業の目標、テーマ、概要、評価、注意事項、学習指導要領における本授業の位置付け) 第2回：親性準備性とは？ (「親性準備性」について理解し、その課題を明確にする) 第3回：性別役割分業意識とイクメン (性別役割分業意識、及び、子育て・家族の中の問題の所在がどこにあるかを考える) 第4回：子どもの貧困 (福祉学・社会学の視点から子育て・家族の中の問題の所在がどこにあるかを理解する) 第5回：少子化と子育ての社会化 (人口学、社会学の視点を導入し、少子化減少・子育て支援対策について理解する) 第6回：ジェンダー・性的多様性を考える (教育現場のジェンダー平等・性的多様性の実現に向けての取り組みと課題を考える) 第7回：アジアの保育・子育て① (中国の子育て事情・家族・子育て支援・教育政策を理解する) 第8回：アジアの保育・子育て② (台湾の子育て事情・家族・子育て支援対策を理解する) 第9回：保育と多文化共生 (多文化共生社会の保育の最新動向と課題について理解する) 第10回：家庭看護 (家庭看護の基礎を修得する) 第11回：実習の事前準備 (実習に向けて留意すべき点、園児・保育者の観察するべき点を整理し討論する) 第12回：保育実習① (保育施設に赴き、園児・保育者の言動を観察する) 第13回：保育実習② (子育て支援施設に赴き、子育ての専門家に聞き取り調査を行う) 第14回：グループディスカッション			

(実習で得た知見を共有するため、グループディスカッションを行う) 第15回 : プレゼンテーション (実習で得た気づき・学びを受講生の前でプレゼンテーションをする。本授業全体の総括) 定期試験は実施しない。
テキスト 適宜資料を配布する。
参考書・参考資料等 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 技術・家庭編』（平成29年7月），『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 家庭編』（平成30年7月）
学生に対する評価 授業の参加態度（ディスカッション・発言：20％），プレゼンテーション（20％），学期末レポート（60％）

授業科目名： 家庭科内容構成		教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 畦五月・一色玲子
				担当形態：複数
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科及び教科の指導法に関する科目における複数の事項を合わせた内容に係る科目		
【授業のテーマ】 家庭科教師としての資質と能力を高めるため、家庭科教育の目標と内容を理解し、家庭科の教材研究能力を高めつつ各自の指導観や教材観を養う。それに基づいて具体的に家庭科の授業設計を実施するための基礎的能力と技能を養う。				
【授業の到達目標】 1. 家庭科教育の目標と特質を理解し、指導に生かすことができる。 2. 家庭科のカリキュラムや学習内容を理解したうえで発展性のある学習内容をつくることができる。 3. 新しい資料や教材に関する研究成果を効果的な学習指導の立案に生かすことができる。 4. 家庭科の評価について理解し、学習指導計画に生かすことができる。 5. ICTなどの効果的な活用方法について理解し、指導に生かすことができる。				
授業の概要 教科教育と教科内容の架橋となる授業として、教科教育と教科内容の専門性を持つ教員で実施する授業である。家庭科の学習内容（家族・家庭経営・食生活・衣生活・住生活と環境・保育等）の知識・理解を教材研究により深めるとともに、授業実践事例の研究を通して家庭科授業を構想する総合的能力の習得をめざす。教材や先行する実践事例の収集とその分析、研究成果の発表と討議をとりいれる。				
授業計画 第1回：オリエンテーション、家庭科の特質と課題、教材研究の意義 第2回：家庭科授業の題材構成と年間指導計画 第3回：家庭科における到達目標と評価の観点 第4回：情報機器の効果的な利用と課題 第5回：テーマ別の題材と学習内容の構想Ⅰ（資料収集） 第6回：テーマ別の題材と学習内容の構想Ⅱ（資料調査） 第7回：構想発表 第8回：構想発表についての討議 第9回：学習指導案の作成（授業のねらいの明確化） 第10回：学習指導案の作成（学習者の認識過程と指導方法） 第11回：学習指導案についてのテーマ別グループ討議（家族・家庭生活・家庭経済） 第12回：学習指導案についてのテーマ別グループ討議（衣・食・住生活） 第13回：グループ討議の結果・成果の発表（家族・家庭生活・家庭経済） 第14回：グループ討議の結果・成果の発表（衣・食・住生活） 第15回：教科観の再考と教材観の総括 最終レポート				
テキスト：開隆堂 「わたしたちの家庭科5・6」（小学校家庭科教科書）、「技術・家庭 家庭分野」（中学校家庭科教科書）、「家庭基礎」「家庭総合」（高等学校家庭科教科書）				
参考書・参考資料等：文部科学省（平成29年）小学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省（平成29年）中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 文部科学省（平成30年）高等学校学習指導要領解説 家庭編				
学生に対する評価：提案レポート 30%、学習指導案・ワークシート 30%、模擬授業 20%、最終レポート 20%				

授業科目名： 持続可能な生活づくり	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 坂本有芳、磯部香 担当形態： オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科及び教科の指導法に関する科目における複数の事項を合わせた 内容に係る科目		
授業のテーマ及び到達目標 (授業のテーマ) 生活者の視点から四国の様々な事象をとらえて課題を設定し、持続可能な社会づくりに向け て解決する力を養う。 (授業の到達目標) ・ 私たちの取り巻く家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化、グローバル化や少子高齢社会 の進展、持続可能な社会の構築等、今後の社会の急激な変化を複合的に理解できる。 ・ 四国の特徴や抱える特有の生活課題を日本そしてアジアといったグローバルな視点でとらえ 相対化し、 解決のための行動変容を具体的に提案する。			
授業の概要 オンライン（同期／非同期）と対面型のハイブリッド型の集中講義とする。各界のゲストス ピーカーを招いたレクチャーにより、私たちを取り巻く生活課題を複合的に理解する。さらに フィールドワーク調査によって課題をつかみ、四国に集う大学生同士で議論やプレゼンテーシ ョンを行い、問題解決に向けて共に「答え」を探索する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション 持続可能な生活づくりとは何か？（担当：坂本、磯部） 第2回：大量消費社会の問題①：衣服ロス問題（担当：坂本） 第3回：大量消費社会の問題②：食品ロス問題（担当：坂本） 第4回：製造のグローバル化と生活安全の確保（担当：坂本） 第5回：ライフオーガナイズによる持続可能な生活創り（担当：坂本） 第6回：ローカルSDGs（地域循環共生圏）実現の取り組み（担当：坂本） 第7回：グローバルの視点で地域間格差を考える① 農村振興（担当：磯部） 第8回：グローバルの視点で地域間格差を考える② 高齢者政策（担当：磯部） 第9回：グローバルの視点で地域間格差を考える③ 外国人ケア労働者（担当：磯部） 第10回：四国での生活を考える（担当：坂本、磯部） 著名なゲストスピーカー招聘 第11回：フィールドワークとは何か？調査方法・分析視角（担当：磯部） 第12回：フィールドワーク調査① 四国の生活文化とその可能性（担当：坂本、磯部） 第13回：フィールドワーク調査② 四国の少子高齢化と課題（担当：坂本、磯部） 第14回：グループ・ディスカッション（担当：坂本、磯部） 第15回：グループごとのプレゼンテーション（担当：坂本、磯部） 定期試験は実施しない。			
テキスト 授業中に適宜資料を配布する。			
参考書・参考資料等 特になし			
学生に対する評価 学期末レポート（60%），ミニレポート（20%），ディスカッション・プレゼンテーション（20%）			

授業科目名： 家庭科教育論	教員の免許状取得のための 必修科目（中学校） 選択科目（高等学校）	単位数： 2単位	担当教員名：松井剛太、時岡 晴美、畦 五月、一色玲子 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
【授業のテーマ】 中学校・高等学校の家庭科の学習内容(家族・家庭経営・食生活・衣生活・住生活・環境・保育等)とその指導方法について、基礎的な内容を理解する。それにより、家庭科の授業者としての実践的能力の基礎を身につける。			
【授業の到達目標】 1. 食生活領域の内容及び学習方法について、具体的に説明することができる。 2. 衣生活領域の内容及び学習方法について、具体的に説明することができる。 3. 住生活と環境領域の内容及び学習方法について、具体的に説明することができる。 4. 保育領域の内容及び学習方法について、具体的に説明することができる。 5. 中学校及び高等学校家庭科の授業研究の成果と課題について、具体的に記述できる。			
授業の概要 中学・高等学校における家庭科の学習内容（食生活・衣生活・住生活・環境・保育等）とその指導方法について、基礎的・実践的能力を身につけることを目的に、各専門分野の教員によるオムニバス形式で行う。ビデオ視聴、討議や実習、プレゼンテーションといった様々な活動を交え、履修者が主体的に参加できる授業である。			
授業計画 第1回 家庭科の学習内容(畦) 第2回 家庭科の目標（畦） 第2回 衣生活に関わる中学校家庭科の授業（一色） 第3回 衣生活に関わる高等学校家庭科の授業（一色） 第4回 住生活と家族に関わる中学校家庭科の授業（時岡） 第5回 住生活と家族に関わる高等学校家庭科の授業（時岡） 第6回 食生活に関わる中学校家庭科の授業（畦） 第7回 食生活に関わる高等学校家庭科の授業（畦） 第8回 保育に関わる中学校家庭科の授業（松井） 第9回 保育に関わる高等学校家庭科の授業（松井） 第10回 家庭科教育の実践・食生活領域（附属小学校教員・畦） 第11回 家庭科教育の実践・衣生活領域（附属小学校教員・一色） 第12回 家庭科教育の実践・住生活と環境領域（附属中学校教員・時岡） 第13回 家庭科教育の実践・保育領域（附属中学校教員・松井） 第14回 家庭科授業研究の動向（一色） 第15回 家庭科授業研究の可能性と課題（一色）			
テキスト：開隆堂「わたしたちの家庭科5・6」（小学校家庭科教科書）、「技術・家庭 家庭分野」（中学校家庭科教科書）、「家庭基礎」「家庭総合」（高等学校家庭科教科書）			
参考書・参考資料等：文部科学省（平成29年）小学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省（平成29年）中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 文部科学省（平成30年）高等学校学習指導要領解説 家庭編			
学生に対する評価：食生活領域・20%、衣生活領域・20%、住生活と環境領域・20%、保育領域・20%、家庭科教育の実践領域・20%のレポート課題			

授業科目名： 家庭科教育法		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 一色玲子
				担当形態： 単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 学習指導要領の目標と内容、評価を理解し、体験的学びによって実践的指導力の獲得を目指す。それにより家庭科教員として求められる資質・能力や技能を育成し、適切な指導方法を選択し、家庭科を構成する各分野の内容を体系的に、かつ「主体的・対話的で深い学び」を導入した授業手法で指導できるようにする。 1. 家庭科の目標及び内容、全体構造について理解している。 2. 教材研究の仕方を理解し、題材ごとに教材を適切に選択選定し、教材研究ができる。 3. 学習到達目標に基づいた指導計画を理解し、学習指導案や教材を作成することができる。 4. 学習指導案に基づいて模擬授業を実施し、協議により、工夫改善することができる。 5. 学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標評価など）について理解している。				
授業の概要 中等家庭科の目標、内容、指導方法等について理解を深め、現代における家庭科教育の役割や意味について考察する。1 単位時間の具体的な学習指導案、ワークシート、板書計画等も作成して模擬授業の実践・評価活動を行う。これらの学習を通して、基本的な家庭科の授業実践力の習得を図る。				
授業計画 第1回：ガイダンス、家庭科教育の歴史／家庭科教育のめざすもの 第2回：家庭科の教科目標(学習指導要領から)、家庭科の内容構成・系統性 第3回：家庭科における評価 第4回：ICTを活用した家庭科指導 第5回：家庭科学習指導案の構成と作成 第6回：授業映像の視聴(授業観察)と学習指導案の検討 第7回：家庭科における多様な活動・指導法 第8回：家庭科学習指導案の分析・検討 第9回：模擬授業の計画 1：家族・消費経済分野 第10回：模擬授業の発表と協議 1：家族・消費経済分野 第11回：模擬授業の計画 2：食物分野 第12回：模擬授業の発表と協議 2：食物分野 第13回：模擬授業の計画 3：衣服分野、住居分野、環境分野 第14回：模擬授業の発表と協議 3：衣服、住居、環境分野 第15回：家庭科の授業観・教材観の整理				
テキスト 適宜資料を配布する。				
参考書・参考資料等 ・ 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 ・ 高等学校学習指導要領解説 家庭編 ・ 開隆堂「技術・家庭 家庭分野 生活の土台 自立と共生」（文部科学省検定済教科書）				

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・東京書籍 「新しい技術・家庭 家庭分野 自立と共生を目指して」(文部科学省検定済教科書)・東京書籍「家庭総合 自立・共生・創造」(文部科学省検定済教科書) |
|---|

学生に対する評価

レポート課題50%（うち、学習指導案20%）、模擬授業20%、授業への参加度30%

授業科目名： 家庭科授業研究Ⅰ		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 一色玲子
				担当形態： 単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 家庭科教育の目標や内容、課題を理解した上で、小・中・高等学校の家庭科授業を構想できるようになる。また、生きる力をつける家庭科の授業について考え、授業及び教材を開発できるようになると共に、家庭科の評価についても理解を深める。 1．小学校、中学校、高等学校の家庭科の目標、内容を説明できる。 2．現代の子どもたちの生活をふまえて家庭科の学習課題について説明できる。 3．生きる力を育成する家庭科の授業や教材について具体例をあげて説明できる。 4．中学校、高等学校の家庭科の学習計画を作成し、学習指導案、ワークシート等を作成できる。 5．実践的な授業研究を通して、指導に必要な教授技術を習得できる。				
授業の概要 家庭科教育の内容、課題を様々な視点からとらえ、現代的課題に対応した家庭科の学習指導を検討する。また、家庭科授業における評価や教員に必要な資質や能力などについても探究し、実践力を身につける。				
授業計画 第1回：ガイダンス／家庭科で何をどう学ぶのか 第2回：「食べる」ことに焦点を当てた授業 第3回：「着る」ことに焦点を当てた授業 第4回：「育つ・育てる」ことに焦点を当てた授業 第5回：「住まう」ことに焦点を当てた授業 第6回：「家族」に焦点を当てた授業 第7回：「高齢者」に焦点を当てた授業 第8回：「防災」に焦点を当てた授業 第9回：家庭科の学習指導案、ワークシートの作成 第10回：家庭科授業における評価 第11回：家庭科における情報機器の活用 第12回：模擬授業（家族・家庭分野）と協議 第13回：模擬授業（衣・食・住分野）と協議 第14回：模擬授業（消費・環境分野）と協議 第15回：まとめ				
テキスト ・生活主体を育む一探究する力をつける家庭科、荒井紀子編著、ドメス出版				
参考書・参考資料等 ・中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 ・高等学校学習指導要領解説 家庭編 ・開隆堂「技術・家庭 家庭分野 生活の土台 自立と共生」（文部科学省検定済教科書） ・東京書籍「新しい技術・家庭 家庭分野 自立と共生を目指して」（文部科学省検定済教科書）				

科書)

・東京書籍「家庭総合 自立・共生・創造」(文部科学省検定済教科書)

学生に対する評価

学習指導案・ワークシート30%、模擬授業30%、最終レポート20%、授業への参加度20%

授業科目名： 家庭科授業研究Ⅱ		教員の免許状取得のための 必修科目（中学校） 選択科目（高等学校）	単位数： 2単位	担当教員名：畦五月 担当形態：単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
【授業のテーマ】 教育実習後の事後指導に相当する授業となる。教育実習の経験を基に自らの課題を認識した上で弱点の克服と得意分野の発展を促すために主体的に教材研究や指導力向上に取り組み、授業実践力の向上を目指す。				
【授業の到達目標】 1) 自らの指導における課題を把握した上で、主体的に教材研究に取り組むことができる。 2) 現代における生活課題を教材化した後、どのように授業構成するかを考察し、プレゼンテーションすることができる。 3) 実践例の研究や学習指導案の作成・討論を通して、よい授業とは何かを多角的に分析することができる。 4) 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせる学びや主体的な課題への取り組みを通して獲得することができる。				
授業の概要 家庭科教育の内容や課題を様々な視点から捉え、現代的な課題に対応した家庭科の学習指導について考察していく。また家庭科の独自性を生かした教材研究を行い、実践力を身に付け、家庭科教師に求められる資質・能力を取得する。				
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：実践授業と授業評価と研究協議1（家族・家庭生活分野） 第3回：実践授業と授業評価と研究協議2（衣食住分野） 第4回：実践授業と授業評価と研究協議3（消費生活と環境分野） 第5回：現代の生活課題をテーマとして取り上げる手法 第6回：「主体的・対話的な学び」を導入した現代の生活課題の授業とは1（生涯生活の確立のための意思決定）（プレゼンテーションと討議） 第7回：「主体的・対話的な学び」を導入した現代の生活課題の授業とは2（ジェンダー）（同上） 第8回：「主体的・対話的な学び」を導入した現代の生活課題の授業とは3（持続可能な社会の構築のための意思決定）（同上） 第9回：「主体的・対話的な学び」を導入した現代の生活課題の授業とは4（シティズンシップ）（同上） 第10回：「主体的・対話的な学び」を導入した現代の生活課題の授業とは5（地域との繋がること）（同上） 第11回：「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ活動」などの主体的に取り組む問題解決学習の指導 第12回：学習指導案の作成と構成 第13回：「生活の営みに係る見方・考え方」の視点からの教材開発と指導計画の具体化 第14回：対話的な学びを導入した学習指導案の見直しと改善 第15回：模擬授業と研究協議、まとめ				
テキスト：文部科学省(平成29年)「新中学校学習指導要領解説 技術・家庭編」 文部科学省(平成30年)「高等学校学習指導要領解説 家庭編」 開隆堂「技術・家庭」家庭分野(中学校教科書) 東京書籍「家庭基礎」（高等学校教科書）				
参考書・参考資料等：必要に応じてプリントを配布する。				
学生に対する評価：模擬授業評価とその改善に関するレポート 20%、生活課題に関するプレゼンテーション 40%、学習指導案 20%、最終レポート 20%				

授業科目名： 中等家庭科教育特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：速水多佳子 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ （授業のテーマ） 家庭科に関する実践的指導力を培うことを目的とする。家庭科の教科内容理解に基づいた教材研究，模擬授業を行い，実践後に授業分析を重ねる中で，授業実践力や授業評価力，そして教員として必要なコミュニケーションスキルについても高めていくことを目指す。 （授業の到達目標） 家庭科の各内容の専門的な知識を基にした授業設計ができること，模擬授業実践ができること，授業を分析・評価ができる能力を身に付けることである。			
授業の概要 各自が作成した学習指導案を基に，模擬授業の実践を中心に進める。受講者は教員役と生徒役を担当し，授業後は改善点を相互に指摘し合って学習指導案を練り直していく。			
授業計画 第1回：家庭科教育の意義と課題 第2回：家庭科教員の資質・能力 第3回：家庭科における学習指導方法と工夫（1）家族・家庭生活 第4回：家庭科における学習指導方法と工夫（2）食生活 第5回：家庭科における学習指導方法と工夫（3）衣生活 第6回：家庭科における学習指導方法と工夫（4）住生活 第7回：家庭科における学習指導方法と工夫（5）消費生活と環境 第8回：授業設計と学習指導案の作成 第9回：情報機器及び教材を活用した模擬授業と授業評価（1）家族・家庭生活 第10回：情報機器及び教材を活用した模擬授業と授業評価（2）食生活 第11回：情報機器及び教材を活用した模擬授業と授業評価（3）衣生活 第12回：情報機器及び教材を活用した模擬授業と授業評価（4）住生活 第13回：情報機器及び教材を活用した模擬授業と授業評価（5）消費生活と環境 第14回：模擬授業の分析と学習指導案の検討 第15回：学習評価の方法			
テキスト ・ 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編（文部科学省）			

・高等学校学習指導要領解説 家庭編（文部科学省）
参考書・参考資料等 授業中に適宜資料を配付する。
学生に対する評価 レポート（20％），学習指導案作成力（20％），模擬授業実践力（20％），授業評価力（20％），授業への積極的参加度（20％）

授業科目名： 中等家庭科実践研究	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名： 一色玲子
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術及び教材の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業では、家庭科教育法の中でも教育評価と授業研究の理論と実践を取り入れ、授業実践力を育成することを目指す。 ・家庭科授業の評価方法について、事例をもとに説明することができる。 ・授業研究を通して、中学・高校家庭科の授業作りの実践的能力を備えることができる。			
授業の概要			
本授業では、前半は教育評価の理論や家庭科の事例を中心に講義を行う。さらに、評価を核とした授業研究を協働で実施し、模擬授業や学校現場での実践（授業者は協力校の教員）をふまえて授業の効果や改善点について議論する。これら授業研究のプロセスを通して、授業作りの実践的能力を身に付けることを目的とする。			
授業計画			
第1回：ガイダンスー授業の進め方、模擬授業等の方法について			
第2回：家庭科授業の評価方法①教育評価の基礎的知識			
第3回：家庭科授業の評価方法②パフォーマンス評価の理論と実践			
第4回：家庭科授業の評価方法③ポートフォリオ評価の理論と実践			
第5回：授業研究の方法、国内外の家庭科授業研究の様相			
第6回：授業映像をもとにした授業検討			
第7回：家庭科の授業研究①評価を核とした授業の構想			
第8回：家庭科の授業研究②学習指導案の作成			
第9回：家庭科の授業研究③教材の作成			
第10回：家庭科の授業研究④模擬授業の実施			
第11回：家庭科の授業研究⑤模擬授業についての議論			
第12回：家庭科の授業研究⑥学習指導案の再検討			
第13回：家庭科の授業研究⑦再検討した授業の協力校での実践および観察			
第14回：家庭科の授業研究⑧学校現場での授業実践についての議論			
第15回：まとめーさらなる授業改善に向けて			
テキスト			
学習指導要領（平成29年改訂）中学校・高等学校			

参考書・参考資料等

- ・教育評価（田中耕治著、岩波書店、2008年）
 - ・未来の生活をつくる 家庭科で育む生活リテラシー（日本家庭科教育学会編、明治図書、2019年）
- その他、授業時に適宜資料を配布する。

学生に対する評価

出席態度及び発言貢献度（30%）、学習指導案（30%）、レポート（40%）

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
中等家庭科指導法Ⅰ	選択科目	2単位	小島郷子
			担当形態：
			単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 （授業のテーマ） 中学校技術・家庭科家庭分野および高等学校家庭科の授業を実践するために必要な知識、技能、実践力を身につける （授業の到達目標） ・中学校技術・家庭科の家庭分野および高等学校家庭科を指導するために必要な知識と技能を修得するとともに、実践的指導力を身につける。 ・学校教育の制度や簡単な歴史、中学校技術・家庭科家庭分野および高等学校家庭科の学習内容や学習方法、評価方法について理解する。 ・ICTを活用した教材研究の方法や授業づくりの方法についても学習するとともに、学習指導案の作成、模擬授業ができる。			
授業の概要 学習指導要領の内容を理解し、具体的な授業場面を想定した学習内容・学習方法・評価について理解するとともに、中学生・高校生の実態を踏まえた授業設計と学習指導案の作成を行い、模擬授業と振り返りを通して授業改善を行う。家庭科におけるICT（情報通信技術）の効果的な活用方法について学ぶ。			
授業計画 第1回：オリエンテーション 本科目の目的と到達目標、授業計画等を概説し受講生自らの課題を認識する 中学生および高校生の生活の現状と家庭科の課題 第2回：家庭科の歴史的理解と学習指導要領の目標・内容 第3回：SDGsの目標達成と家庭科教育 第4回：家庭科の学習内容・学習方法―家族・家庭生活・保育― 第5回：家庭科の学習内容・学習方法―食生活― 第6回：家庭科の学習内容・学習方法―衣生活― 第7回：家庭科の学習内容・学習方法―住生活― 第8回：家庭科の学習内容・学習方法―消費・環境― 第9回：家庭科の評価 第10回：教育の情報化と家庭科におけるICTの有効的な活用について ―電子黒板・デジタル教科書・タブレット端末の活用方法― 第11回：教材研究の理論と方法 第12回：授業設計と学習指導案の作成 第13回：模擬授業と振り返り ―家族・家庭生活・保育― 第14回：模擬授業と振り返り ―食生活・衣生活・住生活― 第15回：模擬授業と振り返り ―消費・環境― 定期試験			
テキスト 「教育の情報化に関する手引き」（文部科学省）			
参考書・参考資料等 平成29年告示中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 文部科学省 平成30年告示高等学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省			

評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 技術・家庭】【高等学共通教科 「家庭」】国立教育政策研究所教育課程研究センター 中学校 技術・家庭 家庭分野 教科書 高等学校 家庭基礎 家庭総合 教科書 中学校技術・家庭 家庭分野 デジタル教科書
学生に対する評価 定期試験（30％）、授業中の課題（20％）、学習指導案の作成及び模擬授業と授業改善（50％）

授業科目名： 家庭電気・機械・生活 情報処理		教員の免許状取得のための 必修科目（高等学校） 選択科目（大学独自(中学校)）	単位数： 2単位	担当教員名： 一色玲子 担当形態：単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 家庭） 大学が独自に設定する科目（中学校 家庭）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項 ・家庭電気・家庭機械・情報処理		
授業のテーマ及び到達目標 普段の生活で利用している電気や機械の仕組みについて基本的知識を身につけるとともに、持続可能な社会の実現に向けた家庭電気や機械の利用方法を探究する。また、教育現場での実践を想定し、情報機器の特徴や利用方法、注意すべき点等の知識や技能を身につけることを目指す。 1. 身近な家庭電気・機械の仕組みについて説明することができる。 2. 環境に配慮した家庭電気・機械の利用方法について具体的に述べることができる。 3. 実際の教育現場を想定して情報機器を活用することができる。 4. プライバシーや個人情報の保護に配慮した情報機器の利用方法について具体的に述べる ことができる。				
授業の概要 家庭電気・機械の基礎と生活情報処理の基礎をそれぞれ学習した上で、高等学校専門科目「家庭」の指導に結び付けることができるよう、レポートや発表等で各自が考えを深めることを目指している。				
授業計画 第1回：ガイダンス 身近な家庭電気・機械 第2回：冷蔵庫、洗濯機の仕組み 第3回：電子レンジ、IHヒーターの仕組み 第4回：照明、電球等の仕組み 第5回：電子ミシン、コンピューターミシンの仕組み 第6回：再生可能エネルギーの種類と特徴 第7回：環境に配慮した家庭電気・機械の利用方法（発表） 第8回：情報機器の仕組み 第9回：情報通信ネットワークの仕組みとセキュリティシステム 第10回：ICT機器の活用① パソコンの利用 第11回：ICT機器の活用② スマートフォン、スマートフォンアプリの利用 第12回：ICT機器の活用③ 授業におけるアプリ活用：基礎 第13回：ICT機器の活用④ 授業におけるアプリ活用：応用（発表） 第14回：情報社会におけるプライバシー及び個人情報の保護 第15回：まとめ				
テキスト：適宜資料を配布する。				
参考書・参考資料等 ・新しい時代の家庭機械・電気・情報、池本洋一・山下省蔵著、ジュピター書房				
学生に対する評価 レポート40%、発表30%、授業への参加度30%				

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：竹口幸志
情報社会と情報倫理	必修科目	2単位	担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・ 情報社会・ 情報倫理		
授業の到達目標及びテーマ			
本授業では、国内の情報利用動向、情報政策、情報法、情報教育、情報セキュリティについて理解し、受講生それぞれが情報社会に求められる情報倫理について考え、情報社会に参画する態度を養うことを目標とする。			
授業の概要			
本授業では、国内の情報利用動向、情報政策、情報法、情報教育、情報セキュリティの各観点から情報社会に起こっている事象を取り上げる。情報社会に起こる様々な事象を理解することを通して、将来の情報社会の構築と情報倫理について検討し、受講生ひとり一人が情報社会に参画する態度を養う。			
授業計画			
第1回：情報社会とは			
第2回：近年の情報通信技術利用動向			
第3回：近年の情報関連政策動向			
第4回：情報と法1：表現の自由に係る問題と対応の検討			
第5回：情報と法2：著作権に関わる問題と対応の検討			
第6回：情報と法3：知的財産権に関わる問題と対応の検討			
第7回：情報と法4：個人情報の保護に関する法律に関わる問題と対応の検討			
第8回：情報と経済1：電子商取引における問題と情報倫理			
第9回：情報と経済2：マーケティングにおける問題と情報倫理			
第10回：情報と教育1：情報リテラシー育成の検討（情報活用能力，メディアリテラシーを含む）			
第11回：情報と教育2：教育の情報化政策の動向			
第12回：情報と教育3：情報モラル育成の検討			
第13回：情報セキュリティ1：日本のサイバー環境が置かれる状況と情報セキュリティの動向			
第14回：情報セキュリティ2：不正アクセス禁止法に関わる問題と対応の検討			
第15回：情報セキュリティ3：プロバイダ責任制限法に関わる問題と対応の検討			
定期試験			
テキスト			
特になし			

参考書・参考資料等

授業中に適宜資料を配付する。

学生に対する評価

毎回の授業の最後に実施する試験（60％）、レポート（40％）

授業科目名： インターネット社会 のための情報倫理		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1 単位	担当教員名： 河村 泰之
				担当形態： 単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項 ・ 情報社会・ 情報倫理		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) 情報社会・ 情報倫理 (授業の到達目標) ・ 情報社会に関する法律にどのようなものがあるかを知り，その概要を理解する。 ・ 法と倫理の違いを理解する。 ・ 情報社会で守るべき法と倫理を理解する。 ・ 情報通信技術を用いる利便性と危険性のトレードオフを理解する。				
授業の概要 高等学校「情報」の免許科目である。今後の情報社会を生きる高校生に必要な知識や心構えを身につけさせるために必要なことを確認する。そのためにも基本的な情報技術（特にネットワークやセキュリティ）への理解が求められる。				
授業計画 第1回：ガイダンス、情報社会と情報倫理 第2回：インターネット社会と情報倫理 第3回：個人情報と知的財産権 第4回：ネットコミュニケーション 第5回：情報社会における生活 第6回：情報セキュリティ 第7回：時事問題 第8回：試験とまとめ				
テキスト 情報教育学研究会監修「インターネット社会を生きるための情報倫理 改訂版」、実教出版				
参考書・参考資料等 なし				
学生に対する評価 期末試験（80％）および課題（20％）によって総合評価する。				

授業科目名： ヒューマンインタフェース	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：山田 貴志 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理（実習を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ （授業のテーマ） コミュニケーションにおける身体性の役割 （授業の到達目標） 1. ヒューマンインタフェースの概念と歴史を説明できる。 2. 情報システムとしての人間特性に関する基礎的な知識を習得できる。 3. インタラクションの要素としてのコンピュータに関する基礎的な知識を習得できる。 4. インタフェースのデザイン・評価に関する基礎的な知識を習得できる。 5. ヒューマンインタフェースの可能性を表現できる。			
授業の概要 人間と情報機械、情報機械を介した人間のインタラクションを円滑にし、コミュニケーションを支援することがヒューマンインタフェースの主要な目的である。本授業では、この目的を達成する過程でのインタラクションに焦点を当て、情報システムとしての人間特性、インタラクションの要素としてのコンピュータ、インタフェースのデザイン・評価について実習を交えて概説するとともに、先進的インタフェースについて紹介する。さらに、先進的インタフェースに関する自らの提案発表を通じて、ヒューマンインタフェースの本質を能動的に理解する。 ※授業形態：オンライン同期型			
授業計画 第1回：ヒューマンインタフェースの概要 第2回：情報システムとしての人間特性（1）認知特性 第3回：情報システムとしての人間特性（2）感性とインタラクション 第4回：インタラクションの要素としてのコンピュータ（1）入力機器とのインタラクション 第5回：インタラクションの要素としてのコンピュータ（2）出力機器とのインタラクション 第6回：インタフェースのデザイン・評価（1）デザインの技法 第7回：インタフェースのデザイン・評価（2）評価の技法 第8回：先進的インタフェースのトピックス（1）バーチャルワールド 第9回：先進的インタフェースのトピックス（2）リアルワールド 第10回：先進的インタフェースの提案発表（1）テーマの設定			

第11回：先進的インタフェースの提案発表（2）調査

第12回：先進的インタフェースの提案発表（3）資料の作成

第13回：先進的インタフェースの提案発表（4）発表

第14回：先進的インタフェースの提案発表（5）全体交流

第15回：まとめ

テキスト

授業中に適宜資料を配付する。

参考書・参考資料等

西田正吾著、電子情報通信学会編：ヒューマンインタフェース、コロナ社

田村博編：ヒューマンインタフェース、オーム社

学生に対する評価

質疑応答・グループワークの学習態度（30%）とレポート・発表（70%）により評価する。

授業科目名： プログラミング		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1 単位	担当教員名： 宮崎英一、宮崎隼人、山田貴志
				担当形態：オムニバス
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理（実習を含む）		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) 最近、我々の身の周りには、様々なICT機器が多数存在する。しかしそれらの多くがブラックボックス化されており、その中身であるソフトウェアについて深く理解する事は困難である。しかし本講義を学ぶ事でソフトウェアの基礎的な知識を身に着けていけば、プログラミングに対する対応や評価が異なってくる。更に本講義では基礎的なプログラミングを学ぶことで、将来に向けてこれからの情報化社会に対応できる「コンピューテーショナルシンキング」が可能な人材を養成するものである。 (授業の到達目標) 1. プログラミング環境を構築できる。 2. プログラムの作成手順について理解できる。 3. 簡単なプログラムの作成とデバックができる。 4. プログラミングを自分の目的に応じて作成できる。				
授業の概要 本講義は、コンピュータの重要な役割を持つソフトウェアに着目し、それを将来渡り、自分で開発・評価できることを目的とした「基礎的なコンピュータ言語およびプログラミング」について学習を行う。特に本講義では初学者を対象とし、今後の応用的なプログラミング技術習得を目指す基礎となる知識とプログラミング技術の修得を目標とする。				
授業計画 第1回：プログラミング環境の構築（担当：山田貴志） 第2回：問題の分析・検討（担当：山田貴志） 第3回：流れ図の作成（担当：山田貴志） 第4回：プログラミングと実行・デバッグ（担当：山田貴志） 第5回：アプリケーションのアルゴリズム例（担当：宮崎英一、宮崎隼人） 第6回：アプリケーションで物理シミュレーション（担当：宮崎英一、宮崎隼人） 第7回：アプリケーションで応用プログラミング（担当：宮崎英一、宮崎隼人） 第8回：プログラム発表と評価（担当：宮崎英一、宮崎隼人）				
テキスト 授業中にプログラムの基礎となる資料及びWEB上の動画のURL等適宜資料を配付する。				

参考書・参考資料等

特になし。

学生に対する評価

出席態度及び発言貢献度（30％）、授業の最後に提出する小レポート（30％）、
最終課題（40％）

授業科目名： プログラミング言語I	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：河村 泰之 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理（実習を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) プログラミング言語 (授業の到達目標) ・ プログラミングに必要な基礎知識を身につける ・ 条件分岐、繰り返し、配列、関数を使った基本的なプログラムを作成できる ・ プログラムの間違ったところを特定（エラーやバグなどを発見）する方法を身につける			
授業の概要 高等学校「情報」の免許科目である。前半はプログラミングに触れたことのない入門者を想定している。しかし、小学校からプログラミングを学んでいる高校生に授業をするには、入門でとどまるわけにはいかない。後半では与えられた課題について、各自で十分な時間を取って演習に取り組むことが求められる。			
授業計画 第1回：ガイダンス、プログラミング環境の確認 第2回：簡単な式や変数の扱い 第3回：条件分岐 第4回：繰り返し 第5回：配列 第6回：関数 第7回：デバッグの考え方 第8回：試験または課題 第9回：試験または課題の解説 第10回：演習課題1 例：複雑な条件分岐 第11回：演習課題2 例：複雑なループ構造 第12回：演習課題3 例：複雑な組み合わせ 第13回：演習課題4 例：再帰関数 第14回：演習課題5 例：参照渡しと値渡し 第15回：試験または課題、まとめ			
テキスト			

必要な情報を web で示す。
参考書・参考資料等 なし
学生に対する評価 試験または課題（100%）

授業科目名： データ構造とアルゴリズム		教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名：河村 泰之 担当形態：単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理（実習を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) データ構造とアルゴリズム (授業の到達目標) ・ コンピュータで情報を処理する際に必要なデータ構造を理解する ・ コンピュータで情報を処理するためのアルゴリズムの表現法を身につける ・ よく知られている基本的なアルゴリズムを理解する				
授業の概要 高等学校「情報」の免許科目である。コンピュータで情報を処理するための手順（アルゴリズム）に関する基本的な考え方を学ぶ。また、処理する際にデータをどのように蓄えられているかによって、処理の効率が変わってくることを経験し、その際に基本的なデータ構造を学ぶ。				
授業計画 (リスト、スタック、キュー木) 第1回：ガイダンス 第2回：アルゴリズムの記述 第3回：配列とリスト 第4回：スタックとキュー 第5回：グラフの表現 第6回：迷路の探索（深さ優先探索、幅優先探索） 第7回：木、平衡二分木、ヒープ 第8回：迷路の探索（ヒープを使った探索） 第9回：ハッシュ法 第10回：ハッシュ関数 第11回：ハッシュ法におけるデータの蓄え方 第12回：最短経路問題 第13回：最短経路を求めるアルゴリズム 第14回：課題 第15回：試験とまとめ				

テキスト 浅野哲夫「データ構造」、近代科学社
参考書・参考資料等 なし
学生に対する評価 期末試験（80％）および課題（20％）によって総合評価する。

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：福谷 遼太
情報工学 I	必修科目	2 単位	担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理（実習を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 (授業のテーマ) コンピュータおよびネットワークの基本的な構成と動作原理に関する知識を修得する。 (授業の到達目標) ● コンピュータの基本的な構成と動作原理について説明できる。 ● コンピュータ・ネットワークの基本的な動作原理について説明できる。 ● コンピュータ・プログラムの基本的な動作原理について説明できる。			
授業の概要 情報技術の基本的な仕組みや動作原理について扱う。授業形態はオンライン同期型と非同期型の併用を前提とし、実習を伴う内容はオンライン同期型にて実施する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション／近年の情報技術 第2回：教育の情報化 第3回：コンピュータの歴史 第4回：コンピュータシステムの基本構成と動作原理 第5回：情報の表現（2進法，10進法，16進法／数値データ，文字データ，音声・画像データ） 第6回：論理回路とCPU 第7回：記憶装置と周辺機器 第8回：機器選定の実践① 端末の選定 第9回：機器選定の実践② 選定した端末に関する発表 第10回：OSとアプリケーション 第11回：ネットワーク 第12回：セキュリティ 第13回：プログラムとアルゴリズム 第14回：Scratchを用いたプログラミングによる問題解決の実践① プログラムの実装 第15回：Scratchを用いたプログラミングによる問題解決の実践② 実装したプログラムに関する発表 定期試験			
テキスト [必携] 安井 浩之，木村 誠聡，辻 裕之，“基本を学ぶ コンピュータ概論（改訂2版）”，オーム社，2019.			
参考書・参考資料等 授業中に適宜資料を配布する。			
学生に対する評価 期末試験（60%），授業における課題への取り組み状況（30%），授業における質問・発問への応答（10%）で総合的に評価します。			

授業科目名： 情報工学Ⅱ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 福谷 遼太・道法 浩孝・ 相良 宗臣 担当形態：複数
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理（実習を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 （授業のテーマ） システムやアプリケーションの設計理論について学習した上で、アプリケーション開発などの実習を通じて、システム・アプリケーション開発に関する知識・技能の修得・向上を図る。 （授業の到達目標） ● UIやレイアウトを考慮してアプリケーションを適切に設計できる。 ● 設計したアプリケーションを開発することができる。 ● プログラミングを通じて身近な課題を解決できる。			
授業の概要 Pythonを用いてアプリケーションを開発する。授業形態はオンライン同期型と非同期型の併用を前提とし、実習を伴う内容はオンライン同期型にて実施する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション（福谷・道法・相良） 第2回：さまざまな情報システム① ～IoT, VR, MR, AR～（福谷） 第3回：さまざまな情報システム② ～人工知能～（福谷） 第4回：さまざまな情報システム③ ～学習支援システム／校務支援システム～（福谷） 第5回：さまざまな情報システム④ ～身近なアプリケーション～（福谷） 第6回：システム開発 ～設計理論～（福谷・道法・相良） 第7回：システム開発 ～UI・色彩理論～（福谷・道法・相良） 第8回：システム開発 ～要求分析～（福谷・道法・相良） 第9回：システム開発 ～環境構築～（福谷・道法・相良） 第10回：システム開発 ～テキスト入力, ボタン設置～（福谷・道法・相良） 第11回：システム開発 ～画面遷移, 権限～（福谷・道法・相良） 第12回：システム開発 ～外部ファイルの活用～（福谷・道法・相良） 第13回：システム開発 ～センサの活用～（福谷・道法・相良） 第14回：システム開発 ～実装～（福谷・道法・相良） 第15回：システム開発 ～成果発表～（福谷・道法・相良） 定期試験は実施しない。			
テキスト 授業中に適宜資料を配布する			
参考書・参考資料等 授業中に適宜資料を配布する			
学生に対する評価 授業における課題への取り組み状況（60%），最終課題（30%），授業における質問・発問への応答（10%）により，総合的に評価します。			

授業科目名： 計測・制御システムの 設計	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：大西 義浩 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報システム(実習を含む。)		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) コンピュータによる計測と制御を題材として、その関連技術を取り扱う。 (授業の到達目標) ・ センサの役割を理解する。 ・ AD変換の原理を理解する。 ・ システムのモデル化とその特性を理解する。 ・ 制御目的にあったP I D制御のパラメータ調整ができる。			
授業の概要 本授業は、数学、電気、情報関連の知識をベースとして、身の回りの機器がどのような仕組みで動いているのかを学ぶものである。現在、コンピュータの普及、低価格化に伴い、自動車や家電など多くの機器にコンピュータが組み込まれている。これらはセンサによって周囲の状況を計測し、その情報に基づいて制御を行っている。本授業では、身のまわりの機器がどのように計測し、制御されているかを理解する。アナログ信号とデジタル信号の違い、センサによる計測、システムの特性、P I D制御系設計などについて学習する。			
授業計画 (同期型) 以外は非同期遠隔授業として実施する。 第1回：ガイダンス 第2回：ハードとソフト、制御とは 第3回：センサ 第4回：AD変換の原理 第5回：モデリングとシミュレーション 第6回：システム同定 第7回：システムの安定性 第8回：1次遅れ要素，2次遅れ要素 第9回：制御系設計（同期型） 第10回：比例制御（同期型） 第11回：定常偏差と積分動作（同期型）			

第12回：過渡特性の改善と微分動作（同期型）

第13回：AIと計測制御

第14回：計測制御技術の応用とSociety5.0への貢献

第15回：期末試験とまとめ（同期型）

テキスト

教材を web 上で配布する。

参考書・参考資料等

なし。

学生に対する評価

期末試験（50%）および小テスト，課題（50%）によって総合評価する。

授業科目名： 情報システム開発演習	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 道法 浩孝 担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報システム（実習を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 （授業のテーマ） コンピュータシステム及び計測・制御システムを中心に、情報システムに関する知識と、システム開発及びプログラミングに関する技術を習得する。 （授業の到達目標） ・ 情報システム（コンピュータシステム及び計測・制御システム）を科学的原理・法則に基づいて説明できる。 ・ コンピュータを用いた計測・制御システムの設計・実装ができる。 ・ 計測・制御システムを目的に応じて動作させるためのプログラミングを行うことができる。			
授業の概要 具体的なシステムに基づいて、コンピュータシステム及び計測・制御システムについて学習するとともに、計測・制御システムの設計・実装及びプログラミングに関する実習を行う。 授業形態：オンライン同期型、実習部分は対面（集中講義）で実施。			
授業計画 第1回：オリエンテーション、情報システム 第2回：情報システム（1）（ハードウェア） 第3回：情報システム（2）（ソフトウェア） 第4回：情報システム及び計測・制御システムの仕組み 第5回：計測・制御システム（1）（センサ、インタフェース） 第6回：計測・制御システム（2）（アクチュエータ等、インタフェース） 第7回：情報システム及び計測・制御システムにおけるコンピュータによる情報処理の仕組み 第8回：計測・制御システムの設計（1）（問題発見と課題設定） 第9回：計測・制御システムの設計（2）（センサ、コンピュータ及びアクチュエータ等） 第10回：計測・制御システムの実装（1）（センサ及びアクチュエータ等） 第11回：計測・制御システムの実装（2）（システム全体の実装） 第12回：計測・制御システムに対するプログラミング（1）（プログラムの制作） 第13回：計測・制御システムに対するプログラミング（2）（プログラムの実行とデバッグ） 第14回：計測・制御システムに対するプログラミング（3）（プログラムの修正） 第15回：講義のまとめ 定期試験			
テキスト：特になし			
参考書・参考資料等 授業中に適宜資料を配布する。			
学生に対する評価 試験（30％）、レポート（30％）、計測・制御システムとプログラムの成果（40％）			

授業科目名： 情報通信 ネットワーク論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：相良 宗臣
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報通信ネットワーク（実習を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 （授業のテーマ） 高等学校の「情報」における「情報の科学的な理解」に必要な情報通信ネットワークについて学習する。特に、情報通信ネットワークにおける通信方法およびセキュリティ対策に関して学習を行う。 （授業の到達目標） 1. 情報通信ネットワークの仕組みや特徴を正しく理解できる。 ➤ スマートフォンや無線LANなどワイヤレス通信の仕組みや特徴，セキュリティについて説明できる。 ➤ インターネットの全般的な仕組みや特徴，セキュリティを確保するための手法を説明できる。 ➤ 基本的なネットワークの構築ができる。 2. 情報ネットワークおよび提供されるサービスを効率的かつ安全に使用できる。			
授業の概要 身近にある通信機器がどのように通信を行っているかを理解する。また、情報ネットワークを実践的に活用するために必要な基本的な知識および技術を修得する。 授業形態：オンライン同期型			
授業計画 第1回：ガイダンス、情報通信の基礎(定義，歴史，通信モデル) 第2回：情報の伝送方法（変調，多重化） 第3回：情報のスイッチング方法（回線，パケット） 第4回：モバイル・ワイヤレス通信の基礎（進展，周波数） 第5回：携帯電話(スマートフォン)の基本方式（認証，位置情報，チャンネル切り替え） 第6回：LANの概要とイーサネット（歴史，トポロジー） 第7回：ワイヤレスLANの概要（規格，セキュリティ対策） 第8回：インターネットの概要（仕組み，歴史，標準プロトコル） 第9回：インターネットの通信プロトコル（TCP/IP，各階層の構成） 第10回：インターネットの通信プロトコル（TCP/IP，インターネット層） 第11回：IPアドレスとルーティング（NAT・PAT，サブネット，OSPF，RIP） 第12回：ネットワーク構築（実習） 第13回：インターネットのセキュリティ（概要，暗号） 第14回：インターネットのセキュリティ（認証方式，その他） 第15回：まとめ（期末試験の注意，関連トピック，キーワード） 定期試験			
テキスト 授業時に資料の配布を行う			
参考書・参考資料等 特になし。			
学生に対する評価 中間レポート（35点），期末試験（35点），毎回の課題（30点）			

授業科目名： マルチメディア技術		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 宮崎 英一
				担当形態： 単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める		教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等		マルチメディア表現・マルチメディア技術（実習を含む）		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) 最近、Society5.0やAIといった新しい情報世界が我々の日常生活に訪れている。これらの進展に伴い、マルチメディア技術も日々急速に発展し続けており、学習指導要領の「マルチメディア表現」においてもこれらに対応できる人材の育成が望まれている。本講義では、基礎的なマルチメディア作品の制作を通じて、今後のマルチメディア技術に対応できる人材の確立をめざす。 (授業の到達目標) 1. マルチメディア技術の基礎的な知識を理解できる。 2. 基本的なマルチメディア作品を作成できる。 3. マルチメディアを通して情報社会の問題を考えることができる。				
授業の概要 本講義は、高校専門教科「情報」の各科目において習得した知識とプログラミング技術を互いに連携づけながら初歩的なマルチメディアを活用した作品の制作を行う。この制作において、従前に各科目で習得した知識とプログラミング技術を生かしてマルチメディア技術の特性を生かした作品を制作し、これを通じて情報の基礎的知識やプログラミング技術の体得を目指す。更には、本講義を通して実際の「情報」授業に活用できる能力や態度を涵養する。 ※授業形態：オンライン同期型				
授業計画 第1回： マルチメディアとは デジタルメディアについて 第2回： マルチメディアとインターネット マルチメディアでの著作権 第3回： 体験的コンピュータシミュレーション（水の流れ） 第4回： 体験的コンピュータシミュレーション（きつねとうさぎの生息数） 第5回： VBAによるプログラミング学習（マクロの応用） 第6回： VBAによるプログラミング学習（VBAによるエクセル制御） 第7回： ビジュアルプログラミングの学習（応用課題作成） 第8回： これまでの応用課題の発表と評価				

- 第9回： Scratchを用いてAIで音声・画像認識基礎（Teachable Machineを用いて）
- 第10回： Scratchを用いた学習進度に応じてレベルアップする計算ドリルの作成
- 第11回： Scratchを用いた多言語案内板の作成
- 第12回： マルチメディア作品コンペ オリジナルのマルチメディア作品を考える
- 第13回： マルチメディア作品制作 オリジナルのマルチメディア作品基礎作成
- 第14回： マルチメディア作品制作 オリジナルのマルチメディア作品拡張追加
- 第15回： マルチメディア作品制作発表と評価 オリジナルのマルチメディア作品発表

テキスト 授業中にマルチメディア教育の基礎となる資料及びWEB上の動画のURL等適宜資料を配付する。

参考書・参考資料等

特になし

学生に対する評価

出席態度及び発言貢献度（30％）、毎回の授業の最後に提出する小レポート（30％）、最終課題（40％）

授業科目名： デジタル画像処理	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 黒田 勉
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 マルチメディア表現・マルチメディア技術（実習を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ （授業のテーマ） デジタル画像処理とは、コンピュータで認識した画像に様々な処理を施すことによってその画像に含まれる情報を読み取る技術であり、種々の情報処理システムにおいて広く用いられている。ここでは、画像情報処理の基本について概説する。 （授業の到達目標） 画像情報処理の基本について様々な手法を理解し、生徒に説明できるように理解する。			
授業の概要 デジタル画像処理とは、コンピュータが取得した画像情報を読み取り、各種処理を通してユーザーに認識させることである。このとき、画像の取得から処理の仕組みまで概説する。さらに3時限グラフィックスの基本的試行について解説する。※授業形態：オンライン同期型			
授業計画 第1回：本講義の意義と目的について知る 第2回：画像処理の基本1，デバイスの概要 第3回：画像処理の基本2，計測環境と照明 第4回：画像処理の基本3，色彩 第5回：基本的な画像処理手法1，輝度分布（ヒストグラム） 第6回：基本的な画像処理手法2，二値化，多極化画像 第7回：基本的な画像処理手法3，画像の数学的考察 第8回：基本的な画像処理手法4，雑音除去（平滑化处理，ノイズフィルタ） 第9回：基本的な画像処理手法5，エッジ処理（微分），細線化，輪郭線抽出 第10回：基本的な画像処理手法6，各種フィルタ 第11回：点，直線の画像認識手法 第12回：各種形状の画像認識手法 第13回：2次元画像処理の応用 第14回：3次元画像処理（コンピュータグラフィックスの基礎） 第15回：3次元画像処理（CADにおける論理演算）			

テキスト 大崎紘一他，画像認識システム学
参考書・参考資料等 特になし
学生に対する評価 各講義時間毎のレポート提出（50％），ならびに，実習結果（50％）により評価を行う．

授業科目名： 情報・職業	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 黒田 勉 担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分	教科に関する専門的事項 ・情報と職業		
授業のテーマ 情報社会での生活、情報社会と高等教育、情報技術と社会の変革、情報技術と人材育成、国際化、メディアの活用について概説し、就職・進路指導方法について、情報化社会を高校生に理解させる方法について理解する。			
授業の到達目標 各項目についての内容を、生徒に指導できるようになること。			
授業の概要 本講義の意義を解説する。そして、情報社会での生活、情報社会と高等教育、情報技術と社会の変革、情報技術と人材育成、国際化、メディアの活用について概説する。			
授業計画 第1回：情報化社会と職業：本講義の意義 自己学習課題：何故教職を目指すのか 第2回：情報化社会と職業：産業界の体質変化 第3回：情報化社会と職業：職業指導と雇用制度 第4回：情報化社会と私たちの生活：危機管理 第5回：情報化社会と私たちの生活：高齢化社会と学習社会 第6回：情報化社会と高等教育：生涯学習 第7回：情報化社会と高等教育：授業計画の作成 第8回：情報技術と社会の変革：情報と情報通信技術 第9回：情報技術と人材育成：資格とその認知・情報産業 第10回：情報社会と国際化/グローバル化：情報技術革命とは・インターネット 第11回 情報社会と国際化/グローバル化：国際規格とグローバル化 自己学習課題：指導案の立案 第12回：情報社会と国際化/グローバル化：ビジネスモデルと倫理 第13回：情報技術とメディアの活用：情報技術を利用した協働 第14回：情報技術とメディアの活用：情報技術と消費行動 自己学習課題：情報化社会について 第15回：情報技術とメディアの活用：知的財産の保護と活用 自己学習課題：相互評価を行う			
テキスト：近藤勲編著，情報と職業，丸善，2002			
参考書・参考資料等 文部科学省学習指導要領「高等学校・情報」，「中学校・技術家庭科」（最新年度のもの）			
学生に対する評価 必要に応じて演習・討論を行ったレポートの提出，講義末の課題に対するレポートによる。			

授業科目名 情報社会の発展と職業	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 大西 義浩 担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報と職業		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) 情報と職業 (授業の到達目標) 以下の項目を理解し， ・ 情報技術が人や社会に果たす役割と及ぼす影響 ・ 望ましい情報社会の発展 ・ 情報社会の将来と情報産業 情報化により生活や社会がどう変わり，どのような職業が出現したかを考える。			
授業の概要 高等学校「情報」の免許取得に必修の科目である。情報技術が実社会でどのように使われており，また，情報関連の職種にはどのようなものがあるかを知ることで，「情報」の教員としての授業実践力および生徒への進路指導等を行なえる能力を身につけることを目的としている。			
授業計画 (同期型) 以外は非同期遠隔授業として実施する。 第1回：ガイダンス 第2回：情報技術の発展と社会の変化 第3回：サービス業における情報技術 第4回：製造業における情報技術 第5回：社会基盤における情報技術 第6回：グループワーク（課題説明・戦略作成）（同期型） 第7回：グループワーク（設備の検討）（同期型） 第8回：グループワーク（維持コスト検討）（同期型） 第9回：グループワーク（リスク検討）（同期型） 第10回：グループワーク（発表準備と仕上げ）（同期型） 第11回：情報技術発展に伴う負の面について（非同期） 第12回：情報関連の職種とキャリアパス（非同期）			

第13回：進路指導について（非同期）

第14回：模擬面接指導（同期型）

第15回：期末試験とまとめ（同期型）

テキスト

教材をweb上で配布する。

参考書・参考資料等

なし

学生に対する評価

期末試験（40%）およびグループワークを含む課題（60%）によって総合評価する。

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：山口 直木
情報変革と職業	選択科目	2 単位	担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等	・ 情報と職業		
授業のテーマ及び到達目標			
【テーマ】			
・ デジタル社会における職業や職業に対する考え方の変化			
・ デジタル社会での教育と職業指導の変化			
【到達目標】			
・ デジタル化による社会の変化			
・ デジタル社会における職業や職業に対する考え方の変化			
・ デジタル社会での教育と職業指導の変化			
以上の事項を理解し、その内容を生徒に指導できるようになること。			
授業の概要			
デジタル社会で必要となる技術や知識，それに伴う職業の変化を講義し，それらによる教育現場の変化と職業指導への影響を解説する。			
授業計画			
第1 回：社会・企業におけるデジタル化の現状			
第2 回：政策としてのデジタル化			
第3 回：デジタル化を支える技術：AI，IoTなど			
第4 回：デジタル化を支える技術：セキュリティ，ネットワークなど			
第5 回：デジタル化を支える技術：プログラミングなど			
第6 回：デジタル化を支える技術：データ分析など			
第7 回：デジタル社会での働き方			
第8 回：デジタル社会で必要となる人材			
第9 回：デジタル社会で働く意味			
第1 0 回：デジタル社会で生きる職業人の考察			
第1 1 回：教育現場のデジタル化の実例			
第1 2 回：デジタル社会での教育現場の変化：技術，設備，人材育成など			
第1 3 回：デジタル社会での教育現場の変化：セキュリティ，個人情報など			
第1 4 回：教育現場のデジタル化と職業指導への影響			
第1 5 回：全体のまとめとレポートによる振り返り			
定期試験は行わない。			

テキスト

特になし。

参考書・参考資料等

文部科学省『高等学校学習指導要領』2019年

学生に対する評価

授業におけるレポート課題の内容によって評価する。

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
情報科教育法 1	必修科目	2 単位	黒田勉、河村泰之
			担当形態：
			複数
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ (授業のテーマ) 情報科教育法 1 (授業の到達目標) ・ 高等学校の教科「情報」の教育目標を理解する ・ 小中学校との関連、総合的学習における位置づけなどを意識し、情報社会における教育課題に対応できる高校教員になるための態度を養う			
授業の概要 高等学校「情報」の免許取得に必修の科目である。教科「情報」の成り立ちを概観し、情報教育に求められていることを学ぶ。また、教科で扱う内容の基本事項を確認する。その上で、指導案を作成し、授業づくりについてポイントを整理する。			
授業計画 第 1 回 ガイダンス、学習指導要領の概説と教員養成の仕組み 第 2 回 情報科の成立過程と科目編成 第 3 回 「情報Ⅰ」で扱う内容 第 4 回 「情報Ⅰ」での学習 第 5 回 「情報Ⅱ」で扱う内容 第 6 回 「情報Ⅱ」での学習 第 7 回 課題学習「特色ある情報教育の取り組みの調査」 第 8 回 専門教科「情報」で扱う内容：「情報産業と社会」を中心に 第 9 回 専門教科「情報」で扱う内容：「情報の表現と管理」を中心に 第 1 0 回 専門教科「情報」で扱う内容：「情報セキュリティ」を中心に 第 1 1 回 専門教科「情報」で扱う内容：「情報テクノロジー」を中心に 第 1 2 回 指導計画案の作り方（情報通信技術の活用を含む） 第 1 3 回 指導案の検討，指導上の注意や指導内容のポイント整理（情報通信技術の活用を含む） 第 1 4 回 評価について 第 1 5 回 試験とまとめ			

テキスト 文科省「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 情報編」
参考書・参考資料等 なし
学生に対する評価 期末試験（40％）および課題（60％）によって総合評価する。

授業科目名： 情報科教育法2	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2 単位	担当教員名： 黒田 勉 担当形態：単独
科 目	教育課程及び指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用法を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ テーマ：普通教科および専門教科の「情報」を担当する上で不可欠な「情報」の設置意義に加え、「情報」に盛り込まれた教科内容とその意図について認識し、学習指導上の自覚と責任の習得を目指す。さらに、生徒の発達成長および興味・関心を見極めながら、生徒一人ひとりの学習実態を把握し、学習意欲を向上させる指導技術に関する基礎的な事項などを学ぶ。 到達目標： 教科「情報」の設置意義、「情報」に盛り込まれた教科内容とその意図について認識する。その上で、指導技術の習得とその向上を図る。			
授業の概要 情報科教育の専門学科で開設される科目の各論を学習指導要領に従って、教育目標とその内容と取り扱いについて学習していく。さらに、教育実習や教職実践演習等で会得した授業方法論や教育目標や教科内容を検討し、情報科教育の各科目の教育方法や問題点を明らかにする。			
授業計画 第1回：本講義の意義と目的について知る 第2回：第1節 情報産業と社会，第2節 課題研究 第3回：1，2回の講義内容についての指導案作成と模擬授業の実施 第4回：第3節 情報の表現と管理，第4節 情報と問題解決 第5回：4回の講義内容についての指導案作成と模擬授業の実施 第6回：第5節 情報テクノロジー，第6節 アルゴリズムとプログラム 第7回：第7節 ネットワークシステム 第8回：授業における情報通信技術の効果的な活用法の設計・計画 第9回：6～8回の講義内容についての指導案作成と模擬授業の実施 第10回：第8節 データベース，第9節 情報システム実習 第11回：第10節 情報メディア 第12回：第11節 情報デザイン 第13回：第12節 表現メディアの編集と表現，第13節 情報コンテンツ実習			

第14回：10～13回の講義内容についての指導案作成と模擬授業の実施
第15回：課程の編成と年間指導計画の作成
テキスト 適宜指示する。
参考書・参考資料等 高等学校学習指導要領解説（情報編）最新版を使用のこと、その他
学生に対する評価 適宜演習を行い、レポートを提出させる。課題に対するレポート点を基に単位認定を行う。

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：森山 潤
情報科教育特論	必修科目	2 単位	担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
高等学校共通教科「情報」の実践に向けた基礎的な指導力を習得するために、学習内容を理解し、題材設定、教材研究の視点を身につける。			
授業の概要			
高等学校共通教科「情報」の目標、学習内容、カリキュラム構成の考え方などを講義すると共に、具体的な教材研究について演習を行う。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、社会の変化に対応した新しい情報教育の考え方			
第2回：高等学校共通教科「情報」の目標、科目構成			
第3回：科目「情報Ⅰ」、科目「情報Ⅱ」の主な学習内容			
第4回：[演習] 科目「情報Ⅰ」、「情報Ⅱ」の研修資料調べ			
第5回：情報社会の問題解決に関する教材研究			
第6回：情報デザインに関する教材研究（1）～コミュニケーションと情報デザインの考え方～			
第7回：情報デザインに関する教材研究（2）～教材例：Webページの情報デザイン～			
第8回：プログラミングに関する教材研究（1）～体系的なプログラミング教育の考え方～			
第9回：プログラミングに関する教材研究（2）～教材例：Microbit×Pythonなど～			
第10回：統計・データサイエンスに関する教材研究（1）～データの活用～			
第11回：統計・データサイエンスに関する教材研究（2）～データの分析～			
第12回：科目「情報Ⅰ」、科目「情報Ⅱ」の特性に応じたICTの活用とデジタル学習環境			
第13回：[演習]マイクロティーチング準備			
第14回：[演習]マイクロティーチングの実施と授業改善の視点～前半チーム～			
第15回：[演習]マイクロティーチングの実施と授業改善の視点～後半チーム～、全体のまとめ			
テキスト			
適宜、資料を配布する。			
参考書・参考資料等			
文部科学省 高等学校情報科 研修資料			
学生に対する評価			
演習課題及びマイクロティーチング60%、授業における活動状況及びポートフォリオ40%			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：森山 潤
情報科教育授業論	選択科目	2 単位	担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 高等学校共通教科「情報」の実践に向けて、授業デザイン、学習評価の視点を身につけ、学習指導案として具体化できる力を習得する。			
授業の概要 高等学校共通教科「情報」の授業デザイン、指導計画の立案方法、学習評価の考え方などを講義すると共に、マイクロティーチングについて演習を行う。			
授業計画 第1回：オリエンテーション、高等学校共通教科「情報」の目標、内容の確認 第2回：共通教科情報科の授業デザイン 第3回：共通教科情報科の学習評価 第4回：[演習] 科目「情報Ⅰ」、「情報Ⅱ」の実践事例調べ 第5回：[演習] 実践事例プレゼンテーション（「情報Ⅰ」） 第6回：[演習] 実践事例プレゼンテーション（「情報Ⅱ」） 第7回：共通教科情報科における題材設定 第8回：共通教科情報科における単元の指導計画の立て方 第9回：共通教科情報科における学習指導案 第10回：[演習] 学習指導案作成1(目標、単元構成、教材観) 第11回：[演習] 学習指導案作成2(生徒観、指導観、展開計画、評価) 第12回：[演習] マイクロティーチング準備 第13回：[演習] マイクロティーチング（1）～前半チーム～ 第14回：[演習] マイクロティーチング（2）～後半チーム～ 第15回：[演習] マイクロティーチングの振り返り、全体のまとめ			
テキスト 適宜、資料を配布する。			
参考書・参考資料等 文部科学省 高等学校情報科 実践事例集			
学生に対する評価 演習課題及びマイクロティーチン60%、授業における活動状況及びポートフォリオ40%			

授業科目名： 人権教育	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 櫻井佳樹
			担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標			
本講義では、以下の点にポイントを置きながら、人権教育の基礎を押さえる。①人権及び人権教育に関する歴史と現状について説明することができる。②現代の人権に関する様々な課題と学校教育等での取組について説明することができる。③一人ひとりの尊厳と多様性を承認し、よりよい市民としての社会づくりを探究することができる。			
授業の概要			
本授業は、人権をめぐる様々な現代的課題を取り上げながら、社会人として必要な人権の基本的知識の修得とその考え方を養うとともに、教員として教育実践する上での基本的知識・理解や態度を養成することを目的とする。			
授業計画			
第1回：ガイダンス			
第2回 日本社会における人権教育の概観～人権に関する課題の歴史と現状			
第3回 法と人権			
第4回 日本社会における現代の課題と取組 ①障害者差別問題と人権			
第5回 日本社会における現代の課題と取組 ②同和問題と人権			
第6回 日本社会における現代の課題と取組 ③子どもに関する人権			
第7回 日本社会における現代の課題と取組 ④ジェンダーと人権			
第8回 日本社会における現代の課題と取組 ⑤外国籍市民の人権			
第9回 学校教育における人権教育 小学校での取組事例に学ぶ			
第10回 学校教育における人権教育 中学校・高校での取組事例に学ぶ			
第11回 香川の人権教育に関する取り組み			
第12回 学校教育における実践事例			
第13回 よりよい社会づくりのために私たちができること 課題選択とグループ形成			
第14回 調査とグループディスカッション			
第15回 発表と全体のまとめ			
テキスト:特になし			
参考書・参考資料等：			
各授業で資料を配付する、または参考書を紹介する。			
学生に対する評価：			
出席・小レポート(35%) グループディスカッションと発表(15%) 最終レポート(50%)を総合的に判断して評価する。			

授業科目名： 教育実践プレ演習	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名：松下 幸司 担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標			
【授業のテーマ】 子ども理解			
【到達目標】			
① 教育実習の予備的体験を通して、教育実習に向けての意欲を高めるとともに、 教育活動への参加に際しての心構えや基本的な知識を身に付ける。			
② 子どもと関わる体験活動を通して、子どもの実態を把握し、子どもとの関係の持ち方、 子ども同士の関係の持たせ方などを実践的に身に付ける。			
③ 事前活動や教育実習関連活動を通して、授業づくりと授業実践の基本的な考え方を 身に付ける。			
④ 教師に必要な資質能力を、体験を通して確認し、次年度の教育実習に向けた自己課題を 探り、今後の学びの計画を構想することができる。			
授業の概要			
教員養成のコアカリキュラムを構成する科目である。1 年次の教職概論と 3 年次の教育実践 演習(事前・事後指導)、さらに教育実習とをつなぐ科目として位置づいている。9 月に行われ る 3・4 年生の教育実習と関連した活動と、10 月に行われる「未来からの留学生」を活用した 「子ども理解」のための体験活動を主な演習の柱とし、その事前・事後活動をもって授業を構 成する。併せて、法令遵守、社会規範や教職・教育に対する使命の自覚、モラル・マナーの向 上を図る。次年度の教育実習についてイメージを高める講話と演習活動を通して、現時点での 自己課題を探り、今後の学びの計画を構想する。			
授業計画			
受講生全体での活動（オリエンテーション、全体交流など）、領域別の活動（「子ども理解」関連活 動・教育実習関連演習など）、多彩な形式で行なわれる。			
第1回：オリエンテーション（第1回全体授業(1)：教師を目指す学生としての心がまえ)			
第2回：事前活動1 （第1回全体授業(2)：「子ども理解」の重要性1) 基礎			
第3回：事前活動2 （第2回全体授業(1)：「子ども理解」の重要性2) 応用			
第4回：事前活動3 （第2回全体授業(2)：「子ども理解」の重要性3) まとめ			
第5回：事前活動4 （第3回全体授業(1)：「子ども理解」と授業実践)			
第6回：事前活動5 （第3回全体授業(2)：附属学校参観の心がまえ)			
第7回：「子ども理解」関連活動1（上級生との交流活動 など）			
第8回：「子ども理解」関連活動2（領域別子ども支援活動 など）			

第9回：教育実習関連活動1 （例：教育実習生 公開授業参観 など）基礎
第10回：教育実習関連活動2 （例：教育実習生 公開授業参観 など）応用
第11回：「子ども理解」関連活動3（例：領域ごとに設定された活動 など）基礎・応用
第12回：「子ども理解」関連活動4（例：領域ごとに設定された活動 など）まとめ
第13回：「子ども理解」のための体験活動1（「未来からの留学生」に関する体験活動 など）基礎
第14回：「子ども理解」のための体験活動2（「未来からの留学生」に関する体験活動 など）応用
第15回：まとめ（第4回全体授業）

テキスト

本学教育学部発行の「教育実践プレ演習 活動の手引」をベースとする。

（必要に応じて適宜資料・ワークシート等を配布する。）

参考書・参考資料等

授業時に必要に応じて指示します。またmoodleにも記載し周知します。

学生に対する評価

「教育実践プレ演習 活動の手引」における学習記録(60%)、ワークシートの記述と全体交流(20%)、出席及び参加態度（積極的な活動など）(20%)を総合して評価します。

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：大村隆史
生涯学習概論	選択科目	2 単位	担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める			
科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標			
1. 生涯学習について学ぶなかで、学習や教育の場が社会に広く存在していることを認識できる。			
2. 生涯学習社会を構成する家庭・学校・地域における教育の固有性について、比較・検討できる。			
3. 生涯学習に関する個別の事例について検討し、意義や課題について自分の考えを論じられる。			
授業の概要			
この授業では、学校にとどまらない学びの場として、家庭や地域における学びに焦点をあて、社会において人間が形成され、発達していくことについて理解を深めるような概論的な講義をおこないます。その際、教員による講義に加えて、受講者が自分自身の経験に引きつけて考え、生涯学習を身近なものとして考えるグループディスカッションの機会を作ります。			
授業計画			
第1回 オリエンテーション			
第2回 生涯学習とは何か			
第3回 社会教育を知って生涯学習を知ろう			
第4回 公務としての社会教育			
第5回 社会教育の担い手はだれか			
第6回 社会教育施設の概要（公民館）			
第7回 社会教育施設の概要（図書館）			
第8回 社会教育施設の概要（博物館）			
第9回 振り返り、学習成果の共有			
第10回 生涯学習と人間形成			
第11回 生涯学習と家庭教育			
第12回 生涯学習と学校教育			
第13回 生涯学習と社会教育			
第14回 生涯学習社会における教育の場の相互の連携と体系化			
第15回 振り返り、まとめ			
テキスト			
教科書は特に指定しない。参考書は授業中に適宜案内する。			
参考書・参考資料等			
・ 生涯学習・社会教育行政研究会編集『生涯学習・社会教育行政必携（平成28年版）』第一法規、2016年			
・ 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター『二訂 生涯学習概論ハンドブック』2018年			
学生に対する評価			
学習成果の提出30%、期末レポート70%で採点する。			

授業科目名： 教職研究Ⅰ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 毛利 猛
			担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標 人間形成論、教育学、心理学、特別支援教育、各教科教育学など、多くの教職科目を履修してきた知識を総合的、体系的及び実践的に理解し、集団討論、模擬授業等の演習に自分なりの教育観をもって参加し、表現することができる。			
授業の概要 教職に対する使命感と高い意識をもつとともに、集団討論や模擬授業等の演習を通じて、より教育的な実践感覚を身に付ける。			
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：教育の最新事情（1）… 教育現場の実際（小学校） 第3回：集団討論演習 第4回：教育の最新事情（2）… 教育現場の実際（中学校） 第5回：集団討論演習 第6回：教育の最新事情（3）… 地域との連携について 第7回：集団討論演習 第8回：教育の最新事情（4）… 保護者との連携について 第9回：集団討論演習 第10回：教育の最新事情（5）…不登校・虐待への対応について 第11回：集団討論演習 第12回：模擬授業について 第13回：模擬授業実践（1） 小・中学校コース別に実施（授業者1・2、授業討議） 第14回：模擬授業実践（2） 小・中学校コース別に実施（授業者3・4、授業討議） 第15回：模擬授業実践（3） 小・中学校コース別に実施（授業者5・6、授業討議）			
テキスト 小学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）、中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）、高等学校学習指導要領（平成30年3月告示 文部科学省）、小学校学習指導要領解説（平成29年3月告示 文部科学省）、中学校学習指導要領解説（平成29年3月告示 文部科学省）、高等学校学習指導要領解説（平成30年3月告示 文部科学省）			
参考書・参考資料等 授業中に適宜資料を配付する。			
学生に対する評価 小レポート（20%）、演習への参加態度（40%）、レポート課題（40%）			

授業科目名： 総合的学習論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：北林雅洋 担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標			
地域の特色に応じた課題の題材として四国遍路・遍路文化に焦点を当て、 ① フィールドワークによる実地の体験活動や関係する地域の方たちとの交流活動を実施し、 そのような活動をしなければわからなかったことについて掘り下げ、それをまとめてわかりやすく情報発信ができるようになる。 ② そのようなわかり方の価値について実感を伴って理解する。 ③ 地域の方たちとの交流・連携活動を推進するスキルを身につける。			
授業の概要			
集中活動日を設けて四国遍路・遍路文化に関するフィールドワークを実施し、そこでわかったことを掘り下げてまとめて、最終報告会において情報発信をする。最終報告会には関係する地域の方たちにも出席していただきコメントしていただく。これらの実施に向けて、学習方法の基本的な理解を図るとともに、文献調査による課題発見に取り組む。			
授業計画			
第1回：ガイダンス、学習指導要領における総合的な学習について 第2回：フィールドワーク学習の基本、地域の特色に応じた課題に関する文献の紹介 第3回：予備的フィールドワーク 第4回：地域の特色に応じた課題に関するゲストスピーカーによる講義 第5回：学生による文献の概要発表と発見した課題の報告 第6回：フィールドワークの実施計画の作成 第7回：フィールドワークの事前準備 第8回：フィールドワークの実施（集中活動日） 第9回：フィールドワークの実施（集中活動日） 第10回：フィールドワークの実施（集中活動日） 第11回：フィールドワークの振り返り、報告の構想の検討 第12回：報告に向けた補充的フィールドワーク・調査の実施 第13回：中間報告、教員によるフィードバック 第14回：報告の準備、製作物の作成 第15回：最終報告会 定期試験（レポート）			
テキスト：特になし			

参考書・参考資料等

小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（平成29年6月、文部科学省）

中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（平成29年7月、文部科学省）

高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（平成21年7月、文部科学省）

その他、授業中に適宜紹介する。

学生に対する評価

最終報告会の発表内容（50％）と最終レポートの内容（50％）による。

授業科目名： 教職研究Ⅱ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 毛利 猛
			担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標 学校現場での教育活動の意義やその運用について、総合的に理解することができる。			
授業の概要 学校の設置、組織・運営、教育活動等、この授業では教職員の実務にかかわる問題を中心に、教職をめざす者が知っておかなければならない教育時事問題に対する理解を深める。さらに具体的な事例を取り上げながら、教員に求められる実践的・判断力や行動力とは何かという点についても考察を加える。			
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：最新の教育動向について（1）個別最適化された学び 第3回：最新の教育動向について（2）感染症への対応 第4回：学校現場における様々なケーススタディについて（1）学級経営 第5回：学校現場における様々なケーススタディについて（2）特別活動 第6回：学校の危機管理と学校安全の考え方 第7回：学校の危機管理と学校組織の信頼 第8回：学校現場における様々なケーススタディについて（3）いじめ 第9回：学校現場における様々なケーススタディについて（4）不登校・児童虐待 第10回：教育関係の答申・通知について（1）学校における働き方改革 第11回：教育関係の答申・通知について（2）教育の情報化 第12回：学習指導要領について（1）新しい時代の初等中等教育の在り方 第13回：学習指導要領について（2）新小学校学習指導要領 第14回：学習指導要領について（3）新中学校・高等学校学習指導要領 第15回：学習指導要領について（4）新しい学習評価 定期試験			
テキスト 小学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）、中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）、高等学校学習指導要領（平成30年3月告示 文部科学省）、小学校学習指導要領解説（平成29年3月告示 文部科学省）、中学校学習指導要領解説（平成29年3月告示 文部科学省）、高等学校学習指導要領解説（平成30年3月告示 文部科学省）			
参考書・参考資料等：授業中に適宜資料を配付する。			
学生に対する評価 定期試験（40%）、レポート課題（30%）、毎回の授業の最後に提出する小レポート（30%）			

授業科目名： 授業実践論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名：毛利 猛 担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標			
・よりよい授業づくりのポイント、配慮すべき事項について説明することができる。 ・小・中学校の学習指導案を作成し、身に付けた基礎的な知識や技能を発揮して模擬授業を行うことができる。 ・ワークショップ型形式の授業討議において、他の人の模擬授業の良かった点、改善点等を伝えることができる。 ・模擬面接等で、教育における自分の考えや方策を相手に分かりやすく伝えることができる。			
授業の概要			
・小学校、中学校における授業について、教材研究や授業展開の方法等、具体的な指導技術を理解し、よりよい授業づくりやその実践のあり方を追究する。学習指導案の作成の仕方、板書や発問等授業づくりに関する基本的な技術を学び、それらを活用して実際に模擬授業を実践する。実践後にワークショップ型形式の授業討議を行う。 ・模擬面接等を通して教育についての考えをまとめ、互いに伝え合うことを通して見識を深める。			
授業計画			
第1回：ガイダンス			
第2回：面接で伝える①		個人面接、集団面接（集団活動）への対応	
第3回：面接で伝える②【演習】		分科会（班）に分かれて個人面接、集団面接（集団活動）	
第4回：授業づくり①		学習指導案の書き方	
第5回：授業づくり②		発問・板書について【演習含む】	
第6回：面接で伝える③【演習】		第3回とは異なる班編成で個人面接、集団面接（集団活動）	
第7回：授業づくり③		学習指導案作成・検討	
第8回：面接で伝える④		面接【演習】の成果・課題の確認	
第9回：模擬授業とは		模擬授業・授業討議の方法について	
第10回：模擬授業①【演習】		小・中学校コース別に実施（授業者1・2、授業討議）	
第11回：模擬授業②【演習】		小・中学校コース別に実施（授業者3・4、授業討議）	
第12回：模擬授業③【演習】		小・中学校コース別に実施（授業者5・6、授業討議）	
第13回：模擬授業④【演習】		小・中学校コース別に実施（授業者7・8、授業討議）	
第14回：模擬授業⑤【演習】		小・中学校コース別に実施（授業者9・10、授業討議）	
第15回：模擬授業⑥		振り返り及び交流、学習指導案の修正	
テキスト			
小学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）、中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）、高等学校学習指導要領（平成30年3月告示 文部科学省）			
参考書・参考資料等：授業中に適宜資料を配布する。			

学生に対する評価

学習指導案・板書計画案（写真可）等・・・40%、模擬授業・授業討議・・・40%、
振り返り票及び授業態度・・・20%（学習指導案・板書計画・書写シートの未提出は不可）

授業科目名： 介護実践演習	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1 単位	担当教員名：小方朋子 担当形態： 単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標 本授業は「介護等体験」を実施するうえで、事前に施設や特別支援学校について理解し、体験後に自らの学びを深めるための授業である。 ① 介護実践演習の実習の全体活動を通じて、人権感覚を磨く。 ② 障害のある人との適切な交流をとおして、教職を志向した対人能力を身に付ける。 ③ 多様な障害のある人と接するなかで、実践的理解を深める。 ④ 介護実践演習の分析や自己の省察から人間性を高めようとする力を培う。			
授業の概要 介護実践演習は、教員になるための人権感覚を磨くための授業である。大学における多様な学びを総合し、学校現場で様々な教育実践を行うためには、適切な人権感覚が必要とされている。多様な関わりの中で、自らの実践を省察し、人権感覚の礎を培うことを目的としている。			
授業計画 第1回：介護等体験とは 第2回：日本の社会福祉施策について 第3回：体験する施設について 高齢者福祉施設 第4回：体験する施設について 児童福祉施設 第5回：体験する施設について 障害者福祉施設 第6回：日本の特別支援教育について 第7回：特別支援学校における教育（ゲストティーチャー） 第8回：障害者施設の実態について（ゲストティーチャー） 第9回：障害者施設における活動について グループ活動及び発表 第10回：介護等体験終了後の振り返り発表 第11回：体験活動後のグループ活動・発表 第12回：地域包括支援センターについて 第13回：認知症サポーター養成講座（ゲストティーチャー） 第14回：高齢者福祉についてのグループ活動・発表 第15回：まとめ			
テキスト：その都度資料を配布する			
参考書・参考資料等 全国特別支援学校長会編著『介護等体験ガイドブックフィリア』ジアース教育新社、平成30年 全国特別支援学校長会編著『新介護等体験ガイドブック新フィリア』ジアース教育新社、令和2年			
学生に対する評価 課題への取り組み、発表等（60%）、最終レポート（40%）			

授業科目名： 学校インターンシ ップ I A（学校支援活動 ）	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名：櫻井佳樹 担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標 香川県義務教育課が提供する小中学校におけるボランティア活動及び附属学校園が募集するボランティアに参加し、日常的な学校教育全般の業務に従事することを通して、教職における実践的な力を身につける。 1. ボランティア活動に継続的に参加し、教科指導・教科外指導に関わる教師としての職務全般について理解する。 2. 継続的なボランティア活動を通して、子どもとの適切な交流、学校教員との連携など、教職を志向した対人能力を身に付ける。			
授業の概要 学生が香川県義務教育課および附属学校園が提供する学校教育に関係するボランティア活動に主体的に参加し、日常的な学校教育全般の業務に従事することを通して、教職における実務を体験的に学習する。学生が参加した学校教育活動に対して単位を認定し、学校教育全般の実務について理解を深めるとともに教職への使命感を醸成する。			
授業計画 ①：学校インターンシップのガイダンス ②：学校インターンシップ研修会 ③：学校インターンシップへの参加と活動記録の作成 ④：学校インターンシップ活動報告会 学校インターンシップ活動登録カードを提出し、在学中にのべ30時間以上香川県義務教育課および附属学校園が提供する学校教育に関係するボランティア活動に参加した学生で、指定の期日までに「学校インターンシップ活動報告書」及び「学校インターンシップ活動の記録」を提出した学生は、単位認定を申請することができる。			
テキスト：特になし			
参考書・参考資料等：特になし			
学生に対する評価 活動記録、報告会の内容を基に、基準を満たせば「合格」とする。			

授業科目名： 学校インターンシ ップ I B（学校支援活動 ）	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名： 櫻井佳樹
			担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標 香川県義務教育課が提供する小中学校におけるボランティア活動及び附属学校園が募集するボランティアに参加し、日常的な学校教育全般の業務に従事することを通して、教職における実践的な力を身につける。 1. ボランティア活動に長期的に参加し、教科指導・教科外指導に関わる教師としての職務全般について理解する。 2. 長期的なボランティア活動を通して、子どもとの適切な交流、学校教員との連携など、教職を志向した対人能力を身に付ける。			
授業の概要 学生が香川県義務教育課および附属学校園が提供する学校教育に関係するボランティア活動に主体的に参加し、日常的な学校教育全般の業務に従事することを通して、教職における実務を体験的に学習する。学校インターンシップ I A を単位取得済みの学生がさらに継続的に参加した学校教育活動に対して単位を認定し、学校教育全般の実務について理解を深めるとともに教職への使命感を醸成する。			
授業計画 ①：学校インターンシップのガイダンス ②：学校インターンシップ研修会 ③：学校インターンシップへの参加と活動記録の作成 ④：学校インターンシップ活動報告会 学校インターンシップ活動登録カードを提出し、在学中に学校インターンシップ I A の単位を取得し、さらにのべ30時間以上香川県義務教育課および附属学校園が提供する学校教育に関係するボランティア活動に参加した学生で、指定の期日までに「学校インターンシップ活動報告書」及び「学校インターンシップ活動の記録」を提出した学生は、単位認定を申請することができる。			
テキスト：：特になし			
参考書・参考資料等：特になし			
学生に対する評価： 活動記録、報告会の内容を基に、基準を満たせば「合格」とする。			

授業科目名： 学校インターンシップ Ⅱ A（公立学校実習）	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1 単位	担当教員名： 櫻井佳樹
			担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標 ①実習の全体活動を通じて、教職への使命感を醸成する。 ②児童・生徒との適切な交流、実習生間での協働、公立学校教員との連携など、教職を志向した対人能力を身に付ける。 ③児童・生徒の成長・発達に関する実践的理解や、児童・生徒の多様性に対応プロセスの複雑性に関する実践的理解を深める。 ④専門的な知識・理解を活用しながら、教科指導・教科外指導に関わる実践的指導力を身に付ける。 ⑤他者の教育実践の分析や自己の教育実践の省察から、自らを高めようとする探究心を培う。			
授業の概要 本授業は、附属学校での教育実習の経験を活かし、より地域社会に密着した公立学校での学校インターンシップ（公立校実習）を体験することによって、児童・生徒への理解や教員としての職務の理解を深め、教職へ就くことへの意識向上を図ることを目的とする。教職に就くことを強く希望し、かつ、教育実習を終えた教育学部学生（4年生）を対象として、公立学校で1週間実施される公立校実習プログラムである。本授業は、附属学校とは異なる多様な児童・生徒の実態や教員としての職務の理解を深め、教職へ就くことへのさらなる意識向上を図る。また、教師として必要な倫理観や道徳観を身につけ、職務遂行能力に加えて、率先して児童・生徒と関わろうとする態度、実践的知識・技能を学び取ることを目的とする。生徒の前に教師として立つにあたり、高い意欲と志、教育に関わる基本的な知識・理解を十分に身に付けていることが求められる。 1週間にわたり、教師のあり方についての指導、教育実践の観察活動、生徒との交流活動、机間指導など授業における支援活動といった入門的段階から、授業構想・授業実践・授業省察さらに学級経営に関する内容も含めた本格的段階までプログラムが用意されている。			
授業計画 第1回：事前指導 第2回～14回 公立校における実習を実施する（1週間） 第15回：事後指導			
テキスト：特になし			
参考書・参考資料等：学校インターンシップⅡ A（公立校実習）の手引き			
学生に対する評価：公立校実習におけるすべての活動を対象として、「指導」「態度」「研究」の大区分別による評価表を用いて、評価を行う。			

授業科目名： 学校インターンシップ Ⅱ B（公立学校実習）	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 櫻井佳樹
			担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標 ①実習の全体活動を通じて、教職への使命感を醸成する。 ②児童・生徒との適切な交流、実習生間での協働、公立学校教員との連携など、教職を志向した対人能力を身に付ける。 ③児童・生徒の成長・発達に関する実践的理解や、児童・生徒の多様性に対応プロセスの複雑性に関する実践的理解を深める。 ④専門的な知識・理解を活用しながら、教科指導・教科外指導に関わる実践的指導力を身に付ける。 ⑤他者の教育実践の分析や自己の教育実践の省察から、自らを高めようとする探究心を培う。			
授業の概要 本授業は、附属学校での教育実習の経験を活かし、より地域社会に密着した公立学校での学校インターンシップ（公立校実習）を体験することによって、児童・生徒への理解や教員としての職務の理解を深め、教職へ就くことへの意識向上を図ることを目的とする。教職に就くことを強く希望し、かつ、教育実習を終えた教育学部学生（4年生）を対象として、公立学校で2週間実施される公立校実習プログラムである。本授業は、附属学校とは異なる多様な児童・生徒の実態や教員としての職務の理解を深め、教職へ就くことへのさらなる意識向上を図る。また、教師として必要な倫理観や道徳観を身につけ、職務遂行能力に加えて、率先して児童・生徒と関わろうとする態度、実践的知識・技能を学び取ることを目的とする。児童・生徒の前に教師として立つにあたり、高い意欲と志、教育に関わる基本的な知識・理解を十分に身に付けていることが求められる。 2週間にわたり、教師のあり方についての指導、教育実践の観察活動、児童・生徒との交流活動、机間指導など授業における支援活動といった入門的段階から、授業構想・授業実践・授業省察さらに学級経営に関する内容も含めた本格的段階までプログラムが用意されている。			
授業計画 第1回：事前指導 第2回～14回 公立校における実習を実施する（2週間） 第15回：事後指導（担当：教育実習実施専門委員会並びに附属学校教員）			
テキスト：特になし			
参考書・参考資料等：学校インターンシップⅡ B（公立校実習）の手引き			
学生に対する評価： 公立校実習におけるすべての活動を対象として、「指導」「態度」「研究」の大区分による評価表を用いて、評価を行う。			

授業科目名： 学級経営論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名： 毛利 猛
			担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標 学級づくりの意義と担任教師の役割についての理解を深めるとともに、学級づくりの基礎的な方法、学級活動の特質と指導法を実践的に学ぶことを通して、学級経営力を備えた担任教師を育成する。			
授業の概要 学級における教師と子どもおよび子ども相互の人間関係のあり方と学級で起こる様々な問題について多面的・多角的に考察し、学級づくりの意義と担任教師の役割についての理解を深めるとともに、学級づくりの基礎的な方法、指導のあり方を実践的に学ぶ。			
授業計画 第1回：学級経営とは 第2回：学級づくりと学級目標 第3回：学級の仕事と仕組みー生活班、係と当番の活動 第4回：学級担任の1日 第5回：学級集団と教師 第6回：学級活動の特質と指導法 第7回：教室の仲良しグループ 第8回：学級モラルの形成と教師のかかわり 第9回：子ども理解 第10回：いじめ問題と対応 第11回：保護者とのよりよい関係づくり 第12回：学級経営案を立てる 第13回：場面指導ー小学校の学級担任になってやってみよう 第14回：場面指導ー中学校の学級担任になってやってみよう 第15回：場面指導ー高等学校の学級担任になってやってみよう			
テキスト：山本木ノ実他編「子どもたちが育つ学級経営～安心な居場所づくりのために～」 美巧社			
参考書・参考資料等：小学校・中学校・高等学校学習指導要領（最新版） 特別活動編			
学生に対する評価：課題への取組（60％）、場面指導（40％）による総合評価			

授業科目名：美術教育 演習	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：吉川暢子 担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標 中学校及び高等学校学習指導要領美術や美術における基盤的理論から美術教育の役割や教育的意義、可能性について理解し、教育現場に必要な知識・技能を獲得する。			
授業の概要 美術教育に関する文献等を読んで省察し、討議することや実際の美術科授業を観察することを通して、生徒の実態を知る。美術教育に関する専門的な知識を習得するとともに、美術教育の関心や問題意識を深める。			
授業計画 第1回：イントロダクション 第2回：美術教育の意義とは何か。 第3回：学習指導要領（美術科）からみる課題 第4回：アートと教育1 論文購読 第5回：アートと教育2 ディスカッション 第6回：アート思考とは何か1 論文購読 第7回：アート思考とは何か2 ディスカッション 第8回：Arts-Based-Researchからみる美術的探求1 論文購読 第9回：Arts-Based-Researchからみる美術的探求2 ディスカッション 第10回：美術科における課題の探求1 課題を見つける 第11回：美術科における課題の探求2 文献購読 第12回：美術科における課題の探求3 プレゼンテーションの作成 第13回：美術科における課題の探求4 発表 第14回：美術科における課題の探求5 まとめ 第15回：振り返りとレポート作成 定期試験 なし			
テキスト：文部科学省中学校学習指導要領（平成29年告示）解説美術編 文部科学省高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説美術編			
参考書・参考資料等 神林恒道『美術教育ハンドブック』三元社 末永幸歩『13歳からのアート思考』ダイヤモンド社			
学生に対する評価 授業への参加度(40%), レポート（60%）			

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
地域ワークショップ デザイン	選択科目	2 単位	吉川 暢子（香川大学） 古草 敦史（香川大学） 尹 智博（香川大学） 小川 勝(鳴門教育大学) 山田芳明(鳴門教育大学) 栗原 慶(鳴門教育大学) 内藤 隆(鳴門教育大学) 佐原 理（徳島大学）
			担当形態： 複数
科 目	大学が独自に設定する科目（中学校及び高等学校 美術）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
授業の到達目標及びテーマ			
本授業では Arts-Based-Research （ABR=美術による探求）を用いて地域に遍在する価値を発見し、子どもの視点を生かしながら地域の価値を共創していくデザイン手法を学び、美術教育が地域とどのように貢献可能なのか実践知を獲得することを目的とする。			
授業の概要			
我が国の美術教育の中心的価値である創造性や感性に根ざした教育をどのような観点から深められるのか、本授業では教育現場フィールドに出向き実際の地域に遍在する教育資源を活用する方法論について学ぶ。そこで、 ABR によって地域の場所性や可能性を子どもの目線から探求し、芸術による気づきを基に、デザイン思考などの発想の方法論を援用しながら、地域デザインの手法を探求する。本実践を通じて、学校が四国各地の地域拠点として美術教育を通してどのようにそれぞれの地域と共存し創造的に持続可能な発展が可能なのか具体的な知見を得る。			
授業計画			
第1回：イントロダクション：「地域ワークショップデザイン」とは？			
第2回：学びのフィールドについて知ろう 1 ABR の方法論			
第3回：学びのフィールドについて知ろう 2 歩いてまわる(FW)			
第4回：学びのフィールドについて知ろう 3 地域資源の探究(FW)			
第5回：学びのフィールドについて知ろう 4 地域資源の発見方法(FW)			
第6回：地域を創造的に捉えるフィードバック 1 各教員からのテーマ			
第7回：地域を創造的に捉えるフィードバック 2 美術教育の視点から考える			
第8回：地域を創造的に捉えるフィードバック 3 子どもの発想を整理する			
第9回：地域を創造的に捉えるフィードバック 4 デザイン思考による落とし込み			
第10回：美術教育によって地域をデザインする 1 子どもの視点を整理する			
第11回：美術教育によって地域をデザインする 2 ワークショップを設計する			
第12回：美術教育によって地域をデザインする 3 プロトタイピング			
第13回：美術教育によって地域をデザインする 4 実践してみる			
第14回：美術教育によって地域をデザインする 5 フィードバックを得る			
第15回：まとめ			
テキスト			
なし			

参考書・参考資料等

小松佳代子『美術教育の可能性』勁草書房，2018

笠原広一，リタ・L・アーウィン『アートグラフィー ―芸術家/研究者/教育者として生きる探求の技法―』BookWay,2020

学生に対する評価

授業への参加度（30%），学習成果物（30%），レポート（40%）

授業科目名： 家庭科教育演習(オムニバス)	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：時岡晴美、畦五月、一色玲子、松井剛太 担当形態：オムニバス
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
【授業のテーマ】 中学校・高等学校の家庭科の学習内容(家族と家庭生活・食生活・衣生活・保育)とその指導方法について、基礎的な内容を理解する。得られた知識を用いて、家庭科の授業をする立場に立った実践的能力の基礎を身につける。 【授業の到達目標】 1. 食生活領域の内容及び学習方法について、具体的に説明することができる。 2. 衣生活領域の内容及び学習方法について、具体的に説明することができる。 3. 家族と家庭生活の内容及び学習方法について、具体的に説明することができる。 4. 保育領域の内容及び学習方法について、具体的に説明することができる。 5. 小学校・中学校の家庭科の実態について、具体的に記述できる。			
授業の概要 本授業は、中・高等学校における家庭科の学習内容（家庭経営・食生活・衣生活・住生活と環境・保育）とその指導方法について、基礎的・実践的能力を身につけることを目的としている。教員による講義だけでなく、討議や実習、プレゼンテーションといった様々な活動を交え、履修者が主体的に参加できる授業とする。			
授業計画 第1回：ガイダンス（畦） 第2回：衣生活の内容（一色） 第3回：衣生活の学習方法（一色） 第4回：家庭科教育の実践（一色） 第5回：食生活の内容（畦） 第6回：食生活の学習方法（畦） 第7回：家庭科教育の実践（畦） 第8回：家族と家庭生活の内容（時岡） 第9回：家族と家庭生活の学習方法（時岡） 第10回：家庭科教育の実践（時岡） 第11回：保育の内容（松井） 第12回：保育の学習方法（松井） 第13回：家庭科教育の実践（松井） 第14回：模擬授業とその評価（衣生活と食生活分野）（一色・畦）			

第15回：模擬授業とその評価（家庭生活と保育分野）（時岡・松井）

テキスト：なし

参考書・参考資料等

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・文科省(平成29年)中学校学習指導要領解説、家庭編・文科省(平成30年)高等学校学習指導要領解説、家庭編・開隆堂「わたしたちの家庭科5・6」(小学校家庭科教科書)・開隆堂「技術・家庭 家庭分野」(中学校家庭科教科書)・東京書籍「家庭基礎」(高等学校家庭科教科書) |
|--|

学生に対する評価

食生活領域(20%)、衣生活領域(20%)、家族と家庭生活(20%)、保育領域(20%)、家庭科教育の実践領域(20%)で評価する。
--

ナンバリングコード B2JRS-bcxG-10-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 020202) 法学 Law A 日本国憲法入門 (Introduction to the Constitution of Japan)	科目区分 学問基礎科目	時間割 後期木5	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B2JRS	DP・提供部局 bcxG	対象学生・特定プログラムとの対応 10
	授業形態 Lx	単位数 2	担当形態 単独
科目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	日本国憲法		
担当教員名 岸野 薫	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×15回＋自学自習 (準備学習15時間＋事後学習30時間)			
授業の概要 この授業では、日本国憲法の定める基本的人権の保障および統治の仕組みについて学んでいく。基本的に講義形式で進めるが、適宜、「憲法上、どこに問題があると思うか」、「あなたはどうか考えるか」を問うていくので、自分なりの答えを考え、伝える力を身につけてもらいたい。			
授業の目的 日本国憲法の定める基本的人権及び統治機構に関する基礎知識を習得するとともに、その基礎知識を用いて実際の政治や裁判を憲法学の視点から考察できるようになる。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
①日本国憲法に関する基礎知識を習得し説明することができる。 〔→共通教育スタンダードの「知識・理解／広範な人文・社会・自然に関する知識」に対応〕 ②具体的な憲法問題につき自分ならどう解決するかを考え、文書にまとめることができる。 〔→共通教育スタンダードの「問題解決・課題探求能力／21世紀社会の諸課題に対する探求能力」に対応〕			
成績評価の方法と基準 期末試験50%〔主に到達目標①に対応〕、授業中に行う数回のミニレポート50%〔主に到達目標②に対応〕			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業の方法】 講義形式で対面授業を行う。 授業のテーマに応じて授業内でミニレポートを作成する。			
【授業計画】 第1回 イントロダクション 第2回 日本国憲法の成立 第3回 基本的人権の保障①基本的人権の享有主体 第4回 基本的人権の保障②生命・自由および幸福追求権 第5回 基本的人権の保障③法の下での平等 第6回 基本的人権の保障④自由権 (1) 第7回 基本的人権の保障⑤自由権 (2) 第8回 基本的人権の保障⑥自由権 (3) 第9回 基本的人権の保障⑦自由権 (4) 第10回 基本的人権の保障⑧社会権 (1) 第11回 基本的人権の保障⑨社会権 (2) 第12回 権力分立①国会・内閣 第13回 権力分立②裁判所 (1) 第14回 権力分立③裁判所 (2) 第15回 まとめ 期末試験 ＊なお、授業計画は進捗状況により変更する場合がある。			
【準備学習・事後学習のためのアドバイス】 授業の中で次回テーマの教科書該当ページを指定するので、教科書を一読の上、授業に臨んでももらいたい。 授業後には、授業ノートを整理し、理解が不十分な所や知識をより増やしたい所を、教科書や参考書で補足してほしい。			
教科書・参考書等 毛利透『グラフィック憲法入門 (第2版)』(新世社、2021年) 2,250円＋税 なお、初回授業で参考書一覧を配布する。			
オフィスアワー 後期: 木曜日13:30-14:30 (南キャンパス6号館5階)			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 特になし			

ナンバリングコード B2SPR-adxG-10-Pg1 授業科目名 (時間割コード：061211) 健康・スポーツⅠ (バレーボール) Volleyball	科目区分 コミュニケーション 科目	時間割 前期金3	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B2SPR	DP・提供部局 adxG	対象学生・特定プログラムとの対応10
	授業形態 単独	単位数 1	担当形態：単独
科目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	体育		
担当教員名 上野 耕平	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 実技90分 × 15回 + 自学自習 (準備学習 1時間 + 事後学習14時間)			
授業の概要 バレーボールの基本技術を身につけると共に、戦術を理解し、意図のあるプレーに基づいたゲームを展開できる能力を獲得することを目指します。同時に受講者の体力の維持・増進を図れるよう、発達段階（青年期）に応じた運動量を確保します。また受講者同士のコミュニケーションを図れるよう、グループ活動を多く取り入れます。なお毎回の授業では、前半にウォーミングアップ、筋力トレーニング及びワンポイントレッスン、後半はゲームを実施します。			
授業の目的 バレーボールの実践を通じて、健康・スポーツ科学に対する知見を広げると共に、その技能や知識を活かし、社会と積極的に関わりつつ、生涯にわたって健康で、明るく、豊かな生活を送るための能力を養う			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 基本的な個人技術（サーブ、アタック、レシーブなど）を獲得する。 2. 意図のあるプレーにより攻撃を組み立てることができる。 3. 自分だけでなく、他の受講者の学習を促進できるよう協調し、助け合うことができる。 4. スポーツマンシップを理解し、対戦相手・チームメイトを尊重しつつプレーできる。			
成績評価の方法と基準 授業への積極的貢献の状況（70%）、技術・戦術の評価（30%）			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
バレーボールのルール（ネットの高さ、リベロ制ほか）は受講者の経験レベルに応じて適宜改変して実施し、バレーボールの楽しさを味わえるよう配慮します。なお特別な状況にない限り、全て対面で行います。 1回目：履修上の注意 ルール、スポーツマンシップの説明 ゲーム 2回目：基礎練習 サーブ ゲーム 3回目：基礎練習 アタック ゲーム 4回目：基礎練習 ブロック・カバー、ゲーム 5回目：基礎練習 Aクイック ゲーム 6回目：基礎練習 Bクイック ゲーム 7回目：基礎練習 Cクイック ゲーム 8回目：基礎練習 ブロード攻撃 ゲーム 9回目：基礎練習 バックアタック ゲーム 10回目：基礎練習 時間差攻撃 ゲーム 11～15回目：リーグ戦 【自学自習のためのアドバイス】 第1回 ルール、スポーツマンシップについて調べ、授業時に紹介できるよう準備する(1時間) 第2回 次回の授業で活かせるよう、各グループでサーブを練習してくる(1時間) 第3回 次回の授業で活かせるよう、各グループでアタックを練習してくる(1時間) 第4回 次回の授業で活かせるよう、各グループでブロックを練習してくる(1時間) 第5回 次回の授業で活かせるよう、各グループでAクイックを練習してくる(1時間) 第6回 次回の授業で活かせるよう、各グループでBクイックを練習してくる(1時間) 第7回 次回の授業で活かせるよう、各グループでCクイックを練習してくる(1時間) 第8回 次回の授業で活かせるよう、各グループでブロード攻撃を練習してくる(1時間) 第9回 次回の授業で活かせるよう、各グループでバックアタックを練習してくる(1時間) 第10回 次回の授業で活かせるよう、各グループで時間差攻撃を練習してくる(1時間) 第11～14回 各回のリーグ戦も問題点について話し合い、次回の試合に活かせるよういくつかのグループで集まって練習してくる。 第15回 授業で得られたコミュニケーションネットワークを活かして、自分たちで空き時間に集まってリーグ戦を行う(1時間)			
教科書・参考書等 特になし			
オフィスアワー 月曜日 2時限目			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 体育館での活動に適した服装及びシューズを準備して下さい。またペアやグループでの活動がほとんどですので、他の受講者に迷惑をかけないよう遅刻は厳に慎んで下さい。			

ナンバリングコード B1SPR-dxxG-10-Pg1 授業科目名 (時間割コード：061225) 健康・スポーツⅡ フィットネストレーニング Fitness Training Fitness Training	科目区分 健康・スポーツ科目	時間割 後期金4	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B1SPR	DP・提供部局 dxxG	対象学生・特定プログラムとの対応 10
	授業形態 Pg	単位数 1	
担当教員名 石川 雄一	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 実技90分 × 15回 + 自学自習として自主的な体力トレーニングおよび技術トレーニング等 (15時間)			
授業の概要 【キーワード】フィットネス 健康 トレーニング 「フィットネス (fitness)」という言葉は、スポーツや運動の分野で「体力」と同義で用いられます。「体力」は筋力や持久力といった運動能力に関係する要素ばかりでなく、免疫力や病気、けがからの回復力といった健康の維持に関する要素も含んでいます。ですから「フィットネストレーニング」は「健康・体力づくり」と言い換えることができるでしょう。 さて「フィットネストレーニング」は、一人ひとりの状況に合わせてその方の目標とする生き方に心身の状態をFit (適応) させていく作業だと考えています。大げさなようですが、人生の目標を達成するために、その大元となる「ココロとカラダ」を整備しましょう。 受験勉強,あるいは日々の勉強の連続で錆びついた身体を改善したい、またスポーツ系サークルに所属していなくても自分の身体を鍛えたいと思っている人は多いと思います。ウエイトトレーニングを中心として各種体力トレーニングを実践することで、人間が本来持っている運動系機能を目覚めさせていきます。			
授業の目的 筋力トレーニング、体幹トレーニング、エアロビクストレーニングなど、各種体力を維持、増進させるための方法を理解・実践することで人間が本来持っている運動系機能を目覚めさせ、運動やトレーニングが果たす役割を実技を通じて理解することを目的として授業を実施します。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 健康で文化的な生活習慣を営むことを通じて、集団の一員として行動することができる。 (共通教育スタンダードの「市民としての責任感と倫理観」に対応) 2. 運動やトレーニングの方法・効果について説明できる。 3. 間が本来持っている運動系機能を目覚めさせることができる。			
成績評価の方法と基準 授業への出席状況を60%とし、授業への参加やレポートを加味する。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 筋力トレーニングを中心に授業を実施しますが、並行して体幹トレーニングや有酸素的(エアロビクス)トレーニングも行います。運動部活動に参加している学生にはその種目に合わせたトレーニングを、またダイエットを目的とした女子学生にも適切なトレーニングを提案します。 第1回 授業オリエンテーション 第2回 各種体力測定(筋力・パワー・柔軟性・持久力等) 第3回 サーキットトレーニング1 第4回 サーキットトレーニング2 第5回 サーキットトレーニング3 第6回 サーキットトレーニング4 第7回 筋力トレーニング(筋肥大を目的として)1 第8回 筋力トレーニング(筋肥大を目的として)2 第9回 筋力トレーニング(筋肥大を目的として)3 第10回 筋力トレーニング(筋肥大を目的として)4 第11回 クロストレーニング(サーキット、筋力、持久力)1 第12回 クロストレーニング(サーキット、筋力、持久力)2 第13回 クロストレーニング(サーキット、筋力、持久力)3 第14回 クロストレーニング(サーキット、筋力、持久力)4 第15回 クロストレーニング(サーキット、筋力、持久力)5			
「自学自習のアドバイス」 体力づくりの情報を集め準備する。(5時間) 週1回の授業での運動による効果を高めるために、朝の体操、就寝前のストレッチングや、毎日継続可能な自分に相応しい健康づくりプログラムを作り、毎日の生活の中で取り組んで			

みる。(10時間) この科目は全回対面授業を行います。なお状況によっては全てまたは一部の授業回の授業形態を遠隔・課題学習へ変更する可能性があります。
教科書・参考書等 特に指定しない。
オフィスアワー 金曜日の16時20分から17時
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 第1 体育館、およびトレーニングルームで実施します。 トレーニングを実施するのにふさわしい服装とシューズを着用してください。

ナンバリングコード B2SPR-acxG-10-Pg1 授業科目名 (時間割コード: 061235) 健康・スポーツⅢ (ニュースポーツ) New Sport B New Sport B (Slow Joging, Rope Exercise, KinBall)	科目区分 コミュニケーション 科目	時間割 後期集中	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B2SPR	DP・提供部局 acxG	対象学生・特定プログラムとの対応 10
	授業形態 Pg	単位数 1	担当形態 単独
科目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	体育		
担当教員名 野崎 武司	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 実技90分 × 15回 + 自学自習 (自主的健康づくり活動) 15時間			
授業の概要 生涯スポーツの実現に向けて、体を動かすことを生涯にわたって生活に取り入れる習慣の形成をめざす。競技スポーツとは異なり、遊戯性がたかく、しかも継続することで成長感の得られる活動 (スロージョギング、縄跳び運動、キンボール) を中心に授業を展開する。また腹式呼吸法など、健康増進のためのプログラムを用意する。			
授業の目的 (1) 健康で文化的な生活習慣を営むとともに、集団の一員として行動することができる。(2) ニュースポーツに触れることで、体を動かすことの楽しさを知り、スポーツの生活化への志向を高めることができる。 (3) 基本的な運動技能を習得し (共通教育スタンダード「課題解決のための汎用的スキル (幅広いコミュニケーション能力)」に対応)、仲間と協力して課題を達成することができる。 (4) 複式呼吸法に親しみ、自らの健康について前向きに捉えることができる。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
(1) 健康づくりやニュースポーツ (生涯スポーツ) には、幅広い活動分野があることを知ることができる。 (2) 手軽でポイントをつかみやすい活動内容を通じて、グループで話し合い、与えられた課題を分析的に捉え、チームとして課題解決することができる。 (3) 基本的な運動技能を、相応しい状況の中でうまく活用することができる。 (4) 複式呼吸法など、基本的な健康づくりプログラムを、継続的に取り組むことで、運動の生活化の実践的感覚を体験できる。			
成績評価の方法と基準 授業への積極的参加の状況・活動状況 (40%)、学習記録 (40%)、実技能力 (20%) を目安に単位認定を行う。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
集中授業の中、活動場面と振り返り場면을構成する。振り返り場面では、仲間とのコミュニケーションによるワークショップ活動を重視する。 第1回 受講にあたってのガイダンス 第2回┐ 第3回┐スロージョギング、縄跳び運動の基本練習と集団達成課題への取り組み 第4回┐ 第5回┐ 第6回┐ 第7回┐キンボール操作の基本練習と簡易ゲーム 受講生の状況によって進度は異なる 第8回┐ 第9回┐ 第10回┐ 第11回┐キンボールの戦略学習と本格的なゲーム 第12回┐ 第13回┐ 第14回 まとめ1 (キンボールゲーム大会と実技評価) 第15回 まとめ2 (キンボールゲーム大会と実技評価)			
【自学自習に関するアドバイス】 (1) インターネットで「スロージョギング」「なわとび」「キンボール」などのキーワードで検索してみよう。いま、どのような取り組みが行われているか、情報を集めよう。(3時間) (2) インターネットで「ニュースポーツ」「健康づくり」などのキーワードで検索してみよう。いま、どのような活動団体が、どのような取り組みを展開しているか、情報を集めよう。(3時間) (3) 健康づくりに関する文献 (下記の参考書を含む) を調べて、どのような取り組みが行われているか情報を集め、自分に相応しい活動を見つけよう。(3時間) (4) 朝の体操、就寝前の柔軟体操や、ニュースポーツの運動プログラムなど、毎日継続可能な、自分に相応しい健康づくりプログラムを作り、毎日の生活の中で取り組んでみよう。(トータル6時間以上)			

実技であるので、原則対面授業を基本とする。
教科書・参考書等 田中宏暁『スロージョギング健康法』朝日新聞出版、高岡英夫『身体意識を鍛える』青春出版社
オフィスアワー 後期木曜日 3 時限目をオフィスアワーとします。 他、集中授業であるため、下記のメールアドレスを通じてコンタクトをとってください。
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 運動着、体育館シューズが必要。

ナンバリングコード B2ENG-abxG-1N-Ex2 授業科目名 (時間割コード：041206) 外国語 (英語 Communicative English IIL(6)) Communicative English II Communicative English II	科目区分 コミュニケーション 科目	時間割 後期金4	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B2ENG	DP・提供部局 abxG	対象学生・特定プログラムとの対応 1N
	授業形態 Ex	単位数 2	担当形態 単独
科目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
担当教員名 瀬良 和彦	関連授業科目	主題科目B-2で提供される講義	
	履修推奨科目	Communicative English III (2年次に履修)	
学習時間	授業90分×15回＋自学自習 (English Central (20時間) ＋ 準備学習 (20時間) ＋ 事後学習 (20時間))		
授業の概要 幅広いコミュニケーション能力は、香川大学の全学生がその習得を求められるスキルのひとつです。授業はDVD教材など4技能統合型教材を用いて英語を理解し、理解した内容に基づいて自分の考えを述べる部分から構成されています。授業外では、e-learningを用いて英語の基礎力の向上を目指します。全受講生は、学期中にTOEIC-IPテストを受験します。			
授業の目的 この授業は、「英語を用いてコミュニケーションを行うための基礎的な能力」を身につけることを目的とします。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 自分の英語力の現状を把握し、具体的な学習目標を立てることができる。 2. リーディング：日本語訳に頼らず平易な英語を直読直解することができる。 3. リスニング：自然な速度で話される短い英文の要点を理解することができる。 4. TOEIC：前期に受験したTOEIC-IPテストのスコアを向上させることができる。 5. コミュニケーション能力：英語を用いて積極的にコミュニケーションを取ろうとすることができる。 1～5は共通教育スタンダードの「課題解決のための汎用的スキル（幅広いコミュニケーション能力）」と「広範な人文・社会・自然に関する知識」に対応する。			
成績評価の方法と基準 以下に挙げた項目が評価の基準となります。示された比率を目安として総合的に判断して単位認定を行います。なお健康上の理由以外でTOEIC未受験の場合、TOEIC が300点未満の場合、またはe-learning の学習達成率が60%未満の場合は単位が認定されませんので注意して下さい。 平常点〔提出率・課題内容・小テストなど〕 30%（4回未提出で単位不認定） 期末テスト20%（未受験の場合は単位を認定しない） TOEIC-IPの結果：30%（未受験又は300点未満の場合は単位を認定しない） e-learning：20%（獲得ポイントが60%未満の場合は単位を認定しない）			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業の方法】 この科目は基本的に対面授業を行います。なお状況によっては全てまたは一部の授業回の授業形態を遠隔へ変更する可能性があります。 【授業計画】 第1回：オリエンテーション 第2回：Introduction to Environmental Issues 第3回：Climate Change 第4回：Energy 第5回：Waste 第6回：Review 1: Units 1-4（小テスト） 第7回：Population Growth 第8回：Pollution 第9回：Water 第10回：Deforestation 第11回：Review 2: Units 6-9（小テスト） 第12回：Hydroelectricity 第13回：Solar Panels 第14回：Wind Turbines 第15回：Nuclear Energy 第16回：Review 3: Units 11-14（期末テスト：予定） 授業外（日程は別途指示）：TOEIC-IPテスト			

【自学自習に関するアドバイス】

(1) e-learning (English Central)

インターネット接続のパソコンもしくはスマートフォンを用いて、教科書に準拠したビデオ動画に基づきTOEIC対策にも関連する英語学習を行います。学習成果はサーバー上に記録され成績の一部として考慮されます。計画的に取り組んで下さい。

(2) テキスト

授業ではテキストを使用します。授業担当者の指示に従って予習をしてから授業に臨んで下さい。予習の具体的な内容については授業ごとに異なります。

教科書・参考書等

Our World Today. (Adam Murray & Anderson Passos). 2019. Nan'un-do. ISBN:9784523178903.

オフィスアワー 授業時に教員と相談の上、日時を決定して下さい。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

第1回目の授業で行われるオリエンテーションで、授業の進め方、TOEIC、e-learningについて説明を行います。必ず指定された教科書を購入の上、第1回目の授業に出席して下さい。

ナンバリングコード B2DEU-abxG-10-Lx2 授業科目名 (時間割コード： 043102) 外国語 (ドイツ語 I JA(2)) German I German I	科目区分 外国語科目	時間割 前期月3, 木2	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B2DEU	DP・提供部局 abxG	対象学生・特定プログラムとの対応 10
	授業形態 Lx	単位数 2	担当形態 単独
	科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等		外国語コミュニケーション	
担当教員名 最上 英明	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 授業90分 × 30回 + 自学自習 (準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 この授業では、日常生活に必要なドイツ語のコミュニケーション能力（聞く、話す、読む、書く）を総合的に養成する。まず、日常生活で遭遇する個々のシチュエーションに即した表現を学び、練習を繰り返すことで、それぞれを確実に身につけ、さらに語彙を拡大する。また、個々のシチュエーションに関連して、ドイツ語圏（ドイツ、オーストリア、スイス）の文化的な背景についても理解を深める。			
授業の目的 異文化理解について開かれた態度をとれるようになるとともに、ドイツ語の基礎的なコミュニケーション能力（聞く、話す、読む、書く）を身につける。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. ドイツ語の基礎を身につけることができる。 2. 挨拶、自己紹介などの表現ができる。 3. ドイツ語検定試験5級に合格できるドイツ語能力を獲得することができる。 4. 異文化理解について開かれた態度をとれるようになる。 これらは共通教育スタンダードの「課題解決のための汎用的スキル」、「広範な人文・社会・自然に関する知識」に対応。			
成績評価の方法と基準 中間試験および期末試験の成績が評価が中心になるが(90%)、小テスト、課題の提出状況(10%)を総合して成績評価を行う。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス この授業は、週2回連続して行う。授業の進展や内容に合わせて、テキストのほかに補助教材（プリントなど）を使う。さらに小テストや中間試験を行い、随時宿題を課す。また、比較的少人数の演習形式の授業で行うので、毎回の出席はもちろん、能動的な学習態度が要求される週2回の連続授業なので、進度も早く、学習内容も多い。従って、欠席が重なると授業についてゆけなくなるので、初歩の外国語だと思って甘く見ないように。中間試験や宿題は授業中に指示するので、欠席すると不利になることもあるから注意すること。また、ドイツ語を書く練習は、教室ではほとんど出来ない。家で、ドイツ語の語彙、表現を良く書いて練習すること。			
第1回：Lektion 1 ドイツ語圏の国々 第2回：アルファベット、発音 第3回：動詞の人称変化 第4回：Dialogのまとめ 第5回：Übungen、Lesetext 第6回：Lektion 2 名詞とは 第7回：名詞の性・数 第8回：名詞の格変化 第9回：Dialogのまとめ 第10回：Übungen、Lesetext 第11回：Lektion 3 複数形とは 第12回：名詞の複数形 第13回：複数の格変化 第14回：Dialogのまとめ 第15回：Übungen、Lesetext、中間試験 第16回：Lektion 4 動詞とは 第17回：不規則動詞 第18回：命令形 第19回：Dialogのまとめ 第20回：Übungen、Lesetext 第21回：Lektion 5 前置詞とは 第22回：前置詞の格変化 (1) 3格支配、4格支配 第23回：前置詞の格変化 (2) 3・4格支配			

第24回：Dialogのまとめ
 第25回：Übungen、Lesetext
 第26回：Lektion 6 冠詞類とは
 第27回：定冠詞類
 第28回：不定冠詞類
 第29回：Dialogのまとめ
 第30回：Übungen、Lesetext
 定期試験

この科目は全回対面授業を行います。

【自学自習のためのアドバイス】
 語学に王道はありません。単語や文を発音したり紙に書いたりして、地道に語彙をインプットしていきましょう。

教科書・参考書等
 『ベルリンに夢中』
 ベアーテ・ヴォンデ他著（同学社）

オフィスアワー 水曜日 1 時限目、またはメール等での相談。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業では、二人、または二人以上で「パートナー練習」を行うことがある。日本人同士での練習を嫌がる傾向もあるが、練習と割り切って、協力して行うこと。また、自分から積極的に「話す、聞く」練習に取り組むこと。

ナンバリングコード B2FRA-abxG-10-Lg2 授業科目名 (時間割コード：044102) 外国語 (フランス語 I (2)) French I フランス語 I French I	科目区分 外国語科目	時間割 前期月3, 木3	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B2FRA	DP・提供部局 abxG	対象学生・特定プログラムとの対応 10
	授業形態 Lg	単位数 2	担当形態 複数
科目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
担当教員名 園部 裕子, 太田 陽子	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分 × 週2回 × 15回 + 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 日常生活でコミュニケーション手段として使われている生きたフランス語を題材に、まずは挨拶などの慣用表現から始める。毎回、教科書に沿って少しずつ初級文法・基本語彙を説明し、フランス語の仕組みを理解できるようにする。フランス語を正確に読み、聞き、書き、話す総合的な能力が身につくよう、読解だけでなく、聴き取りや発音練習を繰り返し行う。			
授業の目的 フランス語の初歩的な文法・語彙・発音規則を習得する。日本語とも英語とも異なる言葉の使い方を学ぶ。言葉の背景にある考え方、文化や社会についても理解できるようになる。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
フランス語検定試験 5 級合格程度の語学力が獲得できる。 言葉の背景にある考え方、文化や社会について説明できる。 以上は、共通教育スタンダードの「課題解決のための汎用的スキル」及び「広範な人文・社会・自然に関する知識」に対応。			
成績評価の方法と基準 平常点 (授業への積極的な参加) 40%、中間試験20%、期末試験40%によって総合的に評価する。いずれかの要素が「0ゼロ」の場合、単位は認定されない。 2 / 3 以上の出席は単位認定に必須である。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
教科書に沿って、まず音声を聞き、会話文や例文を理解し、各課の練習問題を解く。 初級段階で習得すべき基本的な文法・語彙・表現に慣れ親しみ、実際に使えるようにする。			
【学習の方法】 受講生には、目・口・耳・手など、からだ全体を使って学習に取り組むことが求められる。 ・毎回授業に出席し、そのつどしっかり理解・練習すること。 ・進路に合わせて予習、復習、宿題をして授業にのぞむこと。 ・音声を繰り返し聴き、声に出して読む練習を継続すること。			
【授業計画】 ・各曜日の指定の教科書の前半を学修するので、教科書の目次を参照すること。クラスごとに進度は異なる。以下はおよその目安とする。 ・第 1 回：教科書と内容の確認、Alphabet ・第 2 回～第 7 回 教科書の前半 ・第 8 回ごろ (予定) 授業中に中間試験を行う 第 9 回～第 1 5 回 教科書の前半の続き ※ 中間試験：各クラスとも、各曜日ごとに、授業時間内に行う【月・木に各 1 回ずつ受験する】。上記の日程はおよその目安であり、実際の日程は授業中に指示する。			
この科目は全回、対面授業を行います。なお状況によっては授業形態をすべて対面または一部の授業回を遠隔へ変更する可能性があります。			
・学期末試験 ※全クラス合同で 1 度だけ行う【1 回だけ受験する】。			
【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 ・準備学習：1時間×週2回×15週＝30時間 ・事後学習：1時間×週2回×15週＝30時間 ※語学は一度にまとめて勉強しても身につけません。毎回少しずつ、継続するのがコツです。			

教科書・参考書等

月曜、木曜、それぞれ一つの教科書を進める。生協書籍部にて購入すること。

月曜：『Pierre et Hugoピエールとユゴー』三訂版、白水社 2500円＋税

木曜：『Café Français Nouveau 新装カフェ・フランセ』朝日出版社 2400円＋税

必ず生協で売っている最新版を買うこと。教科書は毎年、改訂されるので、旧版を使用してはならない。

＊辞書は紙のものを購入し、毎回、必ず授業に持参すること。

自分で実際に手に取ってみて、使いやすいものを選ぶとよい。

推薦辞書として『プチ・ロワイヤル』（旺文社）、『ロベール・クレ』（駿河台出版社）、『ディコ』（白水社）、『クラウン』（三省堂）、『プログレッシブ』（小学館）。

ポケット版は1年間の必要単語数を満たさないので、使用しないこと。

電子辞書は、初学者は単語を引くのに時間がかかりすぎるので、推奨しない。

スマートフォンを辞書代わりに使用してはならない。

オフィスアワー 各担当教員が講義中に指示する。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業中の会話や聞き取り練習には積極的に参加すること。まったく参加しない場合は「不可」とすることもある。

スマートフォンを辞書代わりに使用してはならない。

中間試験の日程や範囲は、月・木それぞれの授業中に指示され、掲示はされない場合がある。未受験の場合も教員から連絡はしないので、自己管理すること。特別な事由による欠席の場合は、所定の書式を提出すること。

いずれの試験も受験しなかった場合、「不可」となる。

ナンバリングコード B2CHN-abxG-1N-Lg2 授業科目名 (時間割コード：045105) 外国語 (中国語 I (3)Z I) Chinese I Chinese I	科目区分 外国語科目	時間割 前期月3, 木2	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B2CHN	DP・提供部局 abxG	対象学生・特定プログラムとの対応 1N
	授業形態 Lg	単位数 2	担当形態 複数
	科目 教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等		外国語コミュニケーション	
担当教員名 何 燕萍, 高橋 明郎	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 90分×30回+自学学習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 中国語の初習者を対象として、中国語の発音と基礎文法の習得を目指し、応答練習を通して簡単なコミュニケーション能力を身につける。こうした中国語を読み、書き、聞き、話すための基礎力を養成し、様々な領域で日本と深い関係を保つ中国の社会と文化に対する関心と理解を深める。			
授業の目的 中国語は中国大陸・台湾の広い地域にわたって共通のことばとして使用されている。現在約13億の人々が中国語を母語として使用しており、英語を除くと世界で最も使用人口の多い言語である。中国は現在、政治や経済、科学技術の分野でますます発展を続けており、今後あらゆる分野で中国語運用能力が必要になるだろう。初級中国語の最重要ポイントである発音を、前期で習得すれば、卒業後中国語が必要になり、再度勉強しようと思った時にも、スムーズに勉強を再開することができる。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1) 語法 動詞構文・形容詞構文などの基礎的な文法を修得する。 2) 作文 既習の文法事項を利用した文章が書ける。 3) 聴力 母音子音をそれぞれ区別して聞き取れ、また音声をピンインを用いて記述することができる。 4) 発音 ピンインにしたがい、母音子音声調を区別して発音することができる。また簡単な日常的フレーズを使うことができる。 5) 言語の使用される背景となる文化について一定の知識を得、開かれた態度で接することができる。 1)～5) は共通教育スタンダードのa:課題解決のための汎用的スキルb:広範な人文・社会・自然に関する知識に対応する。			
成績評価の方法と基準 中間と期末の2回の試験を、学年共通問題で試験を実施する。これにレポートや小テストの点数を加味する。判定はクラスごとではなく学年の順位に基づき行う。 外国語の学習では、授業時間内の練習は重要である。従って欠席の回数が授業回数の3分の1を超えた場合は、受講しなかったものとする。また指示された課題を未提出の場合は、成績評価の対象としない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 特にリスニングクラスでは、極力ネイティブスピーカーを配し文法クラスの半分の人数で、ピンインという発音記号の規則をしっかりと身につけた上で、日常会話を覚えていく過程の中で、発音の練習を繰り返し練習する。毎回の授業の前後に予習・復習を欠かさず行うこと。文法については講義と、ドリル問題を利用した知識の定着を図る。異文化理解のため、中国に関する日本語のレポート提出を求める。以下の30回で構成される。 1) 発音部分 第1回 声調・単母音 第2回 子音 第3回 子音、鼻音 第4回 複合母音 第5回 変調 2) 文法部分 第1回 形容詞述語文 第2回 代名詞と有、在の用法 第3回 疑問詞、的の用法 第4回 時態助詞 第5回 中間試験 (リスニング分野を含む) 第6回 進行と比較 第7回 時量詞 第8回 動量詞 第9回 数詞			

第10回 名量詞
 第11回 離合動詞
 第12回 助動詞
 第13回 総復習

3) 会話・リスニング部分

第1回 挨拶
 第2回 自己紹介
 第3回 宿舎で
 第4回 宿舎案内
 第5回 食事
 第6回 近況
 第7回 授業
 第8回 誕生パーティ
 第9回 手紙
 第10回 家庭
 第11回 買い物
 第12回 総復習

なお、授業は対面で行う。

【自学自習のためのアドバイス】

教科書該当箇所について音声を確認する（15時間）
 該当箇所の進出単語を調べる（15時間）
 練習問題、ドリルを用いた復習（20時間）
 指示された課題の作成（10時間）

教科書・参考書等

高橋明郎・王維・毛勇編『漢語 会話と語法』白帝社。

長く中国語を学んでいくために、初級用辞典ではなく初めから中型辞典を購入するとよい。

2022年出版のテキストを購入すること。なお、2021年度にこの科目を履修している場合、ドリルのみ別途教員を通じ購入し、2021年度の教科書を使用しても差し支えない。

オフィスアワー 非常勤の教員のオフィスアワーについては、授業後の時間を利用して欲しい。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

クラスは学部別ではないので掲示に注意すること。この講義は1年次（編入は3年次）の学生のみ受講できる。中国語Ⅰ・Ⅱは連続するカリキュラムであり、農学部・創造工学部の学生はその点を理解して受講申し込みをすること。

なお、再履修者は予めMoodleで申込み、クラス指定を受けること。

ナンバリングコード B2KOR-abxG-10-Lx2 授業科目名 (時間割コード：046105) 外国語 (韓国語 I (5)) Korean I	科目区分	時間割 前期月4, 木3	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B2KOR	DP・提供部局 abxG	対象学生・特定プログラムとの対応 10
	授業形態 Lx	単位数 2	担当形態 単独
	科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等		外国語コミュニケーション	
担当教員名 宮島 美花	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分 × 30回 + 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 韓国語 I の (1) から (6) の6クラスはいずれも同内容である。はじめて韓国語を学ぶ人を対象とする。文字・発音の習得に力点をおきながら、平易な構文でかつ実際の日常で使用される頻度の高い表現を通じて、基礎的な文法事項を学んでいく。			
授業の目的 基本的な構文による平易な内容について韓国語の基礎能力を養成する。韓国語は、語順が日本語と似ている上に、共通する漢字語も多いので、日本語話者には入りやすい外国語である。しかしながら、外国語である以上、手を抜かずに努力をしなければならないことは他の外国語の場合と同じである。そうした地道な努力を積み重ねた受講生が、学んだ表現を用いて、あるいは応用させることによって、少しずつ簡単な内容の意思疎通ができるようにする。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
はじめて韓国語を学ぶ人が、1)韓国語と固有の文字 (ハングル) の基本的特徴を理解する。ハングルを正確に書け、発音できるようになる。2)文法的には最も基本の文法 (「～は」「～が」といった助詞や、「～です／ます」丁寧語尾)を理解し、基本的な単語を覚え、簡単な文章で表現することができる。終了時にハングル能力検定5級程度の能力を獲得できる。(共通教育スタンダードの「課題解決のための汎用的スキル」および「広範な人文・社会・自然に関する知識」に対応)。			
成績評価の方法と基準 宿題、授業中に行う小テスト、中間試験、期末試験を総合し決定する。香川大学の全学的な評価基準に基づき、全体の3分の2以上の出席がない場合は不可となり、中間テストと期末テストを主とする総合評価で100点満点のうち60点以上で合格となる。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 テキストの各課を順番に学び進め、概ね中ごろで中間テストを行い、最後の授業までにテキストの最終課 (第12課) までの内容を学び終える。 クラスの大半の学生の理解度にあわせて進度は調節されるが、標準的な進度の一例は以下のとおりである。 第1回 オリエンテーション、テキスト第1課 文字と発音 (1) 単母音 第2回 第1課 文字と発音 (2) 半母音 第3回 第2課 文字と発音 (3) 初声 (平音) 第4回 第2課 文字と発音 (4) 二重母音 第5回 第3課 文字と発音 (5) 初声 (激音)、初声 (濃音) 第6回 第3課 文字と発音 (6) 終声 第7回 第4課 「～は」「名詞＋です (ハムニダ体)」 第8回 第4課 第4課本文解説・音読練習 第9回 第5課 「～が」「名詞＋です (ヘヨ体)」 第10回 第5課 第5課本文解説・音読練習 第11回 第6課 漢数詞、「～ (場所) に」 第12回 第6課 「あります／ないです」、第6課本文解説・音読練習 第13回 第7課 「～を」「～も」「～です／ます (ヘヨ体)」作文 第14回 第7課 第7課本文解説・音読練習 第15回 中間テスト 第16回 第8課 縮約パターン1～4の「～です／ます (ヘヨ体)」 第17回 第8課 「～ (場所) で」「～ (人) に」、中間テスト返却・解説 第18回 第8課 第8課本文解説・音読 第19回 第9課 縮約パターン5～9の「～です／ます (ヘヨ体)」 第20回 第9課 手段・方法の「～で」、「～ (場所) から～ (場所) へ」、固有数詞 第21回 第9課 第9課本文解説・音読 第22回 第10課 丁寧形のハダ変則 第23回 第10課 「～しに」「～ (時間) から～ (時間) まで」			

第24回	第10課	第10課本文解説・音読
第25回	第11課	過去形
第26回	第11課	ウ変則活用、否定形
第27回	第11課	第11課本文解説・音読練習
第28回	第12課	尊敬形
第29回	第12課	「～するつもりです」、「～したい」
第30回	第12課	第12課本文解説・音読練習

【授業及び学習の方法】

この科目は基本的に対面授業を行う。一部の授業回では遠隔授業を行う。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性がある。

テキストを使用して授業を行い、ハングルを正しく書け、発音できるようになると同時に基本的な単語を覚える。授業時間内だけで初めて学ぶ新しい文字とその発音を覚えることはできないので、履修生各自が前回内容を復習した上で毎回の授業の臨むことが必須となる。常に口を動かし（発音・発話練習）、手を動かして（正しいスペルで書き、正しく活用させる練習）学んでもらうので、能動的な姿勢で授業に臨むことが求められる。

授業中に中間テストを含むテストを行い、クラスの理解度を確認しながら、進度を進める。当然ながらクラスの大半が理解できていることを確認して進度を進め、クラスの大半にとって適度な速度で進度を進める（予復習を怠るごく一部の学生にあわせるのではない）。テストの前は時間をとってテスト準備をすること。

【自学自習のアドバイス】

テストで存在しないハングル（自分で勝手に作ったハングルらしきもの）を書く学生が少なくない。初めて学ぶ文字の習得を甘く考え、授業時間以外に復習の時間を持つことを怠れば、この授業をパスすることは困難である。このことを理解している人だけが履修すること。また「韓国語は日本語に似ていて簡単そう」という思い込みを捨て、初めて学ぶ外国語として真剣に取り組まないと入口の段階で挫折することになる。基礎段階からしっかり取り組むこと。

教科書・参考書等

テキストは全クラス共通の指定テキストを使用する。今年は、李潤玉ほか『韓国語の世界へー入門編一』（朝日出版社）を使用する。大学生協で購入すること。この授業ではまだ辞書を使用しない。

オフィスアワー 各担当教員が授業時間前後の休み時間に対応する。担当教員が非常勤講師の場合、10分休みでは対応できないような長い相談は、前の週に申し出て、授業前後の時間の都合をうかがい、約束しておくことが望ましい。専任教員（宮島のみ）の場合は研究室（5月～6月頃に南4号館2階から南7号館3回に移転予定）で対応する。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

香川大学全体の規定のとおり、欠席が全体の3分の1に達した場合（出席が3分の2以下の場合）となる。

ナンバリングコード B1INF-acdG-10-Lx1 授業科目名 (時間割コード：082102) 情報リテラシーA	科目区分 情報リテラシー	時間割 前期木3	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B1INF	DP・提供部局 acdG	対象学生・特定プログラムとの対応 10
	授業形態 Lx	単位数 1	担当形態 単独
科目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	数理、データ活用及び人工知能に関する科目又は情報機器の操作		
担当教員名 黒田 勉	関連授業科目	特に無し	
	履修推奨科目	特に無し	
学習時間 (講義+演習) 90分 × 8回 + 自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 本講義は、教育学部学生が最低限必要と考えられるコンピュータ・リテラシーの習得を基礎におく。学部学生として、レポート・論文作成に必要なワードプロセッサや表計算の活用のみならず、プレゼンテーションツールの利用法・Webページの作成・登録方法も含めて学習することで、卒業論文作成・発表に必要なスキルを身につける。卒業後も学校教育現場はもとより、ビジネスの分野にも役立つ技術を養っていくものである。			
授業の目的 情報化の進む社会や学校教育現場に対応しなければならない現実を踏まえ、社会人・教員に必要な最低限のコンピュータ操作能力、情報の収集・判断能力（情報リテラシー）を身に付ける。			
到達目標			
・コンピュータの基本的な構成と機能を知り、操作ができること ・ワープロソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションを用いて、基本的な情報の処理ができること ・マルチメディアの特徴と利用方法を知ること。 ・マルチメディアの作成に関して、ソフトウェアを選択して、表現や発信ができること ・インターネットを中心とした情報の伝達方法の特徴と利用方法を知ること ・インターネットにおける情報を収集、判断、処理し、発信ができること。 以上の点は、共通教育スタンダードの「課題解決のための汎用的スキル」（幅広いコミュニケーション能力）に対応。			
成績評価の方法と基準 出席状況（学則等で認められた欠席を除く）、各種提出物（講義内容により異なるが、原則作成したファイルを所定のディレクトリに収納すること）の内容を基に、受講態度を勘案し総合的に評価を行う。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
学内における情報機器の使用法、及び次年度以降の教育・研究に必要な種々のアプリケーションソフトの基礎的な使用法の説明と実習を行っていく。さらに、自分のWebページを作成し学内での配信を基に、公序良俗に反しない情報発信の方法を身に付ける。			
(1) PC教室の使用法、注意事項の解説、Webブラウジングソフトの使用法 ・この時間は事前学習は不要であるが、PC利用の習熟のため事後学習（次時の事前学習を含む）が15時間以上必要			
(2) キー入力方法、タッチタイピング練習 ・この時間は事前学習は前時の事後学習を含めて15時間以上必要で、習熟のため事後学習が15時間以上必要			
(3) 日本語ワードプロセッサソフト 文書作成・整形 ・この時間は、アプリケーションソフトの起動、簡単な操作方法並びにアプリケーションソフトの終了方法を事前学習として15時間以上必要、また、習熟のため事後学習が15時間以上必要			
(4) 表計算ソフト1 表計算ソフトの使用目的 ・この時間は、アプリケーションソフトの起動、簡単な操作方法並びにアプリケーションソフトの終了方法を事前学習として15時間以上必要、また、習熟のため事後学習（次時の事前学習を含む）が15時間以上必要			
(5) 表計算ソフト2 成績処理への応用、グラフの作成 ・この時間は事前学習は前時の事後学習を含めて15時間以上必要で、習熟のため事後学習（次時の事前学習を含む）が15時間以上必要			
(6) データの統合 文書へのグラフ貼り付け ・この時間は事前学習は前時の事後学習を含めて15時間以上必要で、習熟のため事後学習が15時間以上必要			
(7) プレゼンテーションソフトの利用 ・この時間は、アプリケーションソフトの起動、簡単な操作方法並びにアプリケーションソフトの終了方法を事前学習として15時間以上必要、また、習熟のため事後学習が15時間以上必要			
(8) プレゼンテーション実習 ツールを使って各自が発表 ・各自のデータ作成を事前学習として15時間以上必要、また、習熟のため事後学習が15時間以上必要			

教科書・参考書等

購入の義務はありませんが以下を参考書として指定.

文化系のためのコンピュタリテラシー 太田忠一編, サイエンス社

久野靖, 佐藤義弘, 辰己丈夫, 中野由章監修: キーワードで学ぶ最新情報情報トピックス2016, 日経BP社(2016)
1,296円(税込み) ISBN: 978-4-8222-9217-1

その他, 各種市販図書も参考にできる.

オフィスアワー 火曜日6コマ 8号館4F, または, 1F情報工学実験室

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

入学時に学生証と同時に総合情報センターから配布される学生用メールアカウント及びログインパスワードが必要なので, 授業開始時には必ず持参すること.

質問等があるときは, 事前に kuroda.tsutomu@kagawa-u.ac.jp 宛に連絡されたし.

ナンバリングコード B1INF-axxG-10-Le1 授業科目名 (時間割コード: 083001) 情報リテラシーB	科目区分 情報リテラシー	時間割 前期集中	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B1INF	DP・提供部局 axxG	対象学生・特定プログラムとの対応 10
	授業形態	単位数 1	担当形態 複数
科目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	数理、データ活用及び人工知能に関する科目又は情報機器の操作		
担当教員名 林 敏浩, 藤澤 修平	関連授業科目	情報リテラシーA	
	履修推奨科目	情報リテラシーA	
学習時間 授業 (e-Learning) 90分×8回+自学自習 (準備学習15時間+事後学習15時間)			
授業の概要 Society 5.0で実現する社会で、論理的思考能力や規範的判断力に基づき柔軟に対応できる人材育成が急がれている。このような社会要請に基づき、香川大学に入学した学生が文系理系を問わず初年次に身につけるべき数理・データサイエンスの基礎を学習するために、1年次生対象に開講される必修科目であり、e-Learningで提供される授業である。			
授業の目的 本授業の目的は、単にコンピュータなどの情報機器の操作ができるということにとどまらず、情報科学や情報工学の観点から、文系理系の専門分野に関わらず身につけるべき数理・データサイエンスの基礎を理解する。これによりさらに高度に情報機器を取り扱う素養を身につける。			
到達目標			
1. 数理・データサイエンスの必要性を説明できる 2. 地域を含む実社会での数理・データサイエンスの事例を例示できる 3. どのような思考方法で数理・データサイエンスを扱うか説明できる 4. 代表的な数理・データサイエンスの技術とその利点・欠点を概説できる ※全ての到達目標が共通教育スタンダードの「課題解決のための汎用的スキル」(幅広いコミュニケーション能力)に対応する。			
成績評価の方法と基準 授業中に課せられる課題を全て提出して受理されれば単位認定される。秀優良可 (SABC) による評価は行わないので注意されたい。期末試験は行わない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 第1週: 履修ガイダンス／データ・AIにおける心得 第2週: 数理・データサイエンスを活用した地域活性 第3週: データサイエンスと社会への応用 第4週: 実社会のデータサイエンスの事例 第5週: データサイエンス入門 1 ～データサイエンスを始める考え方、データの確認と関数の使い方～ 第6週: データサイエンス入門 2 ～回帰分析と統計的仮説検定～ 第7週: 機械学習の実装 1 ～機械学習の概要とクラウドサービス～ 第8週: 機械学習の実装 2 ～回帰とクラスタリング～ ※今後、授業計画 (各回の名称など) の一部が変更になる可能性があります。もし、変更になった場合はLMSで案内をしますのでご注意ください。			
【授業および学習の方法】 e-Learningによる非同同期型授業として実施します。本講義はフルオンデマンドで実施されるため講義室での授業は行いません。受講はインターネットに接続できるパソコンでLMS (Learning Management System) にアクセスして、e-Learningコンテンツを視聴する形態になります。出席確認も兼ねて各回で理解度を判定する課題を課します。コンテンツ視聴後、課題を必ず回答してLMSでオンライン提出ください。			
【自学自習のためのアドバイス】 各回において、e-Learningコンテンツ視聴や課題対応以外に、準備学習 2 時間、事後学習 2 時間程度の自学自習を推奨します。準備学習は前回の振り返りやハンドアウトを見て不明な点などの事前調査などです。事後学習はコンテンツ視聴などの学習から余り時間をおかずにその回の復習をしたりすることが挙げられます。また、夏休みなどの長期休暇での全体的な復習として事後学習に時間配分しても結構です。			
教科書・参考書等: なし			
オフィスアワー 林: 金曜日 1 時限目 幸町北キャンパス研究交流棟 4 階教員室 藤澤: 木曜日 2 時限目 幸町北キャンパス 5 号館 5 階教員室 (備考) 不在時あるいは対面が困難な場合は電子メール(fujisawa.shuhei@kagawa-u.ac.jp) を活用されたい。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ e-Learningは基本的には自学自習ですので計画的な履修 (コンテンツ視聴、オンラインレポート提出) を心がけてください。e-Learningの落とし穴に落ち込まないようにしてください。 不明な点があれば、担当教員にメールで速やかに連絡ください。			

授業科目名： 教育原論		教員の免許状取得のための 必修科目		単位数： 2 単位		担当教員名：櫻井 佳樹 担当形態：単独	
科 目		教育の基礎的理解に関する科目					
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想					
授業のテーマ及び到達目標							
本授業は、「教職基礎科目」の「教育の理念と歴史・思想」の区分に該当する科目であり、教員免許状を取得しようとするすべての者が履修しなければならない「教育の基礎的理解に関する科目」である。本授業を通して、教育の基本概念とは何か、また教育の理念にはどのようなものがあり、教育の歴史や思想において、それらがどのように現れてきたのかについて学ぶとともに、これまでの教育及び学校の営みがどのように捉えられ、変遷してきたのかを理解する。							
①教育の基本的概念を身に付けるとともに、教育を成り立たせる諸要因とそれら相互の関係を理解する。							
②教育の歴史に関する基礎的知識を身に付け、それらと多様な教育の理念との関わりや過去から現代にいたるまでの教育及び学校の変遷を理解する。							
③教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育及び学校とのかかわりを理解している。							
授業の概要							
教育とは何であり、いかにあるべきか、という教育の本質・理念・思想を理解することを目的とする。また近代から現代に至る教育の流れを歴史的に捉え、現代の教育問題や課題について思想的に考察する。							
授業計画							
第1回：オリエンテーション							
第2回：教育の基本的概念							
第3回：教育の本質と理念							
第4回：教育の成立要因とその関係							
第5回：教育の理念と思想							
第6回：古代・中世の教育思想ープラトン							
第7回：近代の教育思想（1）ーコメニウス							
第8回：近代の教育思想（2）ールソーとペスタロッチ							
第9回：近代の教育思想（3）ーヘルバルトとデューイ							
第10回：中間まとめ							
第11回：家族と社会の教育史							
第12回：日本の近代教育制度の成立							
第13回：戦後日本の学校教育と理念							
第14回：現代教育の課題と学校教育の在り方							
第15回：まとめ							
テキスト：特になし							
参考書・参考資料等							
小笠原道雄・伴野昌弘・渡邊満『教職概論』福村出版、2008年。宮澤康人『近代の教育思想』放送大学教育振興会、1993年。村井実『教育思想（上）』『教育思想（下）』2005年。小笠原道雄『教育哲学の課題』福村出版、2015年							
学生に対する評価： 課題への取り組み（60%）、最終レポートの結果（40%）を総合的に評価する。							

授業科目名： 教職概論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：松下幸司 担当形態：単独
科 目	教育の基礎的理解に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教職の意義及び教員の役割・職務内容（チーム学校運営への対応を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
1. 教職の意義および教員の役割・職務内容・教員の服務について理解する。			
2. 教育・教職について課題意識を持ち、クラスにおける交流活動や演習活動を通してそれを深めることができる。			
3. 教職をめざす学生としてモラル・マナー・規範意識を向上させ、教職の使命を自覚する。			
授業の概要			
これから教職を志すその端緒として、教職の意義や役割について改めて問い直し、課題意識を深め、自己自身を捉え直していくことを本授業の中心目的とする。「教師になる学びの計画と履歴」を参考にしながら、自己の課題を整理し、今後の学びの計画を立案する。			
また本授業は、教職を目指す学生としての在り方について、法令遵守、社会規範や教職・教育に対する使命の自覚の観点から理解し、これからの大学生活を考える礎としての役割を担うものとする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション 本授業の目的と到達目標、現時点の「教師像」を描こう			
第2回：学校について理解しよう① 求められる教師像			
第3回：学校について理解しよう② 教師の仕事と学校の仕組み ～「チーム学校」体制と外部連携～			
第4回：学校について理解しよう③ 学校種別に再確認しよう			
第6回：教職を知る① 教育法規の基礎、個人情報とその保護			
第7回：教職を知る② 「朝の会・帰りの会」と「板書」について知ろう・考えよう・やってみよう			
第8回：教職を知る③ 児童生徒の危険/犯罪と安全教育について ～外部連携の視点から～			
第9回：教職を知る④ 養護教諭の仕事と学校における現代的課題 ～「チーム学校」の視点から～			
第9回：学校体験を振り返る ～思い出の教師と教師の魅力～			
第10回：授業について考える よい授業とは・よい保育とは ～授業の基礎基本～			
第11回：キャリアガイダンス① 将来について考えよう			
第12回：キャリアガイダンス② 教職を目指すとは ～先輩の話を聞こう～			
第13回：キャリアガイダンス③ 教師になった理由と教職の魅力(ゲスト教員による講話)			
第14回：めざす教師像① 自己を見つめ「目指す教師像」を描く			
第15回：めざす教師像② 教師になるために…「目指す教師像」を交流し総括する			
テキスト			

第1回授業において周知（壺井栄「二十四の瞳」角川文庫 ほか）

参考書・参考資料等

文部科学省「幼稚園教育要領」、文部科学省「小学校学習指導要領」

文部科学省「中学校学習指導要領」、文部科学省「高等学校学習指導要領」

学生に対する評価

最終レポート課題（70%）、各授業回で取り扱う内容に関する小レポート課題（演習活動等における積極的参加姿勢等を含む）（30%）

授業科目名： 教育社会学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：小方直幸 担当形態：単独
科 目	教育の基礎的理解に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教育に関する社会的、制度的又は経営的事項（学校と地域との連 携及び学校安全への対応を含む）		
授業のテーマ及び到達目標			
①学校を巡る近年の様々な状況の変化を理解している、②子供の生活の変化を踏まえた指導上 の課題を理解している、③近年の教育政策の動向を理解している、④諸外国の教育事情や教育 改革の動向を理解している、⑤地域との連携・協働による学校教育活動の意義及び方法を理解 している、⑥地域との連携を基とする開かれた学校づくりが進められてきた経緯を理解してい る、⑦学校の管理下で発生する事件、事故及び災害の実情を踏まえ、危機管理や事故対応を含 む学校安全の必要性について理解している、⑧生活安全・交通安全・災害安全の各領域や我が 国の学校をとりまく新たな安全上の課題について、安全管理及び安全教育の両面から具体的 な取組を理解している。			
授業の概要			
(1) 社会の状況を理解し、その変化が学校教育にもたらす影響とそこから生じる課題、並びに それに対応するための教育政策の動向を理解し、(2) 学校と地域との連携の意義や地域との協 働の仕方について、取り組み事例を踏まえて理解し、(3) 学校の管理下で起こる事件、事故及 び災害の実情を踏まえて、学校保健安全法に基づく、危機管理を含む学校安全の目的と具体 的な取組を理解する。			
授業計画			
第1回：生命の誕生と命の大切さ			
第2回：虐待の実態と子どもへの影響			
第3回：躰と虐待の境界と保護者支援			
第4回：子どもの貧困の実態と進路への影響			
第5回：貧困をめぐる学校・家庭・行政の連携			
第6回：学校安全と養護教諭			
第7回：保育の意義と役割			
第8回：保育の日本の特性と近年の保育政策			
第9回：学歴社会と学力格差			
第10回：学力格差をうめる学校・家庭・行政の連携			
第11回：外国籍の子どもの教育			
第12回：教師の働き方			
第13回：不登校の実態と児童生徒への影響			
第14回：いじめの実態と児童生徒への影響			
第15回：不登校・いじめをめぐる政策動向と学校観の変容			
テキスト：授業中に適宜配布する。			
参考書・参考資料等：			
酒井朗・多賀太・中村高康編著（2020）『よくわかる教育社会学』ミネルヴァ書房			
加野芳正・越智康詞編著（2012）『新しい時代の教育社会学』ミネルヴァ書房			
学生に対する評価：			
毎回のレポート（30％）及び学期末の最終レポート（70％）で評価			

授業科目名： 教育経営学		教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：柳澤良明
				担当形態：単独
科 目		教育の基礎的理解に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教育に関する社会的、制度的又は経営的事項（学校と地域との連携及び学校安全への対応を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標				
①学校を巡る近年の様々な状況の変化を理解している。				
②子どもの生活の変化を踏まえた指導上の課題を理解している。				
③近年の教育政策の動向を理解している。				
④諸外国の教育事情や教育改革の動向を理解している。				
⑤公教育の原理及び理念を理解している。				
⑥公教育制度を構成している教育関係法規を理解している。				
⑦教育制度を支える教育行政の理念と仕組みを理解している。				
⑧教育制度をめぐる諸課題について例示することができる。				
⑨公教育の目的を実現するための学校経営の望むべき姿を理解している。				
⑩学校における教育活動の年間の流れと学校評価の基礎理論を含めたPDCAの重要性を理解している。				
⑪学級経営の仕組みと効果的な方法を理解している。				
⑫教職員や学校外の関係者・関係機関との連携・協働の在り方や重要性を理解している。				
⑬地域との連携・協働による学校教育活動の意義及び方法を理解している。				
⑭地域との連携を基とする開かれた学校づくりが進められてきた経緯を理解している。				
⑮学校の管理下で発生する事件、事故及び災害の実情を踏まえ、危機管理や事故対応を含む学校安全の必要性について理解している。				
⑯生活安全・交通安全・災害安全の各領域や我が国の学校をとりまく新たな安全上の課題について、安全管理及び安全教育の両面から具体的な取組を理解している。				
授業の概要				
現代の学校教育に関する制度的、経営的事項について、基礎的な知識を身に付けるとともに、それらに関連する課題を理解する。なお、学校と地域との連携に関する理解および学校安全への対応に関する基礎的知識も身に付ける。				
授業計画				
第1回：公教育論Ⅰ：公教育の原理と理念				
第2回：公教育論Ⅱ：教育法と教育制度				
第3回：公教育論Ⅲ：教育行政のしくみ				
第4回：公教育論Ⅳ：教育政策の動向				
第5回：公教育論Ⅴ：教育経営の諸課題				
第6回：学校組織論Ⅰ：チームとしての学校				
第7回：学校組織論Ⅱ：学校評価の理念としくみ				
第8回：学校組織論Ⅲ：学級経営と学年経営				
第9回：学校組織論Ⅳ：学校内外での協働体制づくり				
第10回：学校組織論Ⅴ：学校安全と危機管理				
第11回：学校参加論Ⅰ：開かれた学校づくりの展開				
第12回：学校参加論Ⅱ：学校評議員制度				
第13回：学校参加論Ⅲ：学校運営協議会制度				
第14回：学校参加論Ⅳ：日独比較①：学校会議の理念としくみ				
第15回：学校参加論Ⅴ：日独比較②：民主主義教育の進展と生徒参加の拡大				
テキスト：授業中に適宜資料を配布する。				
参考書・参考資料等：浜田博文編著（2014）『教育の経営・制度』一藝社。				
小島弘道編著（2015）『全訂版 学校教育の基礎知識』協同出版。				
学生に対する評価：各回のミニレポート（30％）および学期末の最終レポート（70％）による。				

授業科目名： 学校防災論		教員の免許状取得のための 選択科目		単位数： 2単位		担当教員名：北林雅洋 担当形態：単独	
科 目		教育の基礎的理解に関する科目					
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教育に関する社会的、制度的又は経営的事項(学校と地域との連携及び学校安全への対応を含む。)					
授業のテーマ及び到達目標							
① 過去の災害事例に基づいて、学校防災に関して重視すべき点と課題を具体的にとらえる。							
② 防災に関する調査活動を実施し、課題解決の諸方策とそれらの有効性をとらえる。							
③ 学校と教員の役割と責任、地域との連携の重要性について理解を深める。							
授業の概要							
東日本大震災で津波に被災した小・中学校の事例に基づいて学校防災の在り方を考える。近年多発し激甚化している風水害について、その傾向と特徴、留意すべき点を明確にする。多文化社会化が進行している学校・地域を念頭に防災情報の伝え方を考える。そのうえで、学生がグループまたは個人でテーマを設定して防災に関する調査活動を実施し、その結果をまとめて報告し合う。互いの報告をもとに議論し、課題解決の方策を多面的にとらえ、それらの有効性について批判的に検討する。							
授業計画							
第1回：学校防災に関する予備的討論							
第2回：東日本大震災に学ぶ ①次の手が打てる避難の重要性							
第3回：東日本大震災に学ぶ ②事前に避難し続けることのたいへんさ							
第4回：東日本大震災に学ぶ ③保護者への引き渡しをめぐる課題							
第5回：東日本大震災に学ぶ ④「奇跡」と「悲劇」の共通点と相違点							
第6回：風水害 ①降水量と災害							
第7回：風水害 ②台風災害について							
第8回：風水害 ③豪雨災害について							
第9回：多文化社会の防災							
第10回：課題調査の準備							
第11回：課題調査の実施①							
第12回：課題調査の実施②							
第13回：課題調査結果のまとめ・発表準備							
第14回：課題調査発表会							
第15回：発表に対する質疑・応答、討論							
定期試験（レポート）							
テキスト：特になし							
参考書・参考資料等							
小学生用防災教育副読本・地震がやってくる前に（みんなで考える香川の防災ブック）（平成27年9月、香川県危機管理局危機管理課）							
その他、授業中に適宜資料を配布する。							
学生に対する評価							
課題調査発表の内容（50％）と最終レポートの内容（50％）による。							

授業科目名： 学校教育心理学	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2 単位	担当教員名： 岡田 涼・大久保 智生
			担当形態：オムニバス
科 目	教育の基礎的理解に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	・ 幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程		
授業のテーマ及び到達目標			
教育心理学に関する基礎的な理論を理解するとともに、学校教育における児童・生徒理解の在り方とその方法について理解を深めることを目的とする。			
①学校教育において教育心理学が果たす役割を理解し、説明できる。			
②児童生徒の心理的発達や動機づけなどの理論について理解し、説明することができる。			
③教育心理学の視点からみた児童生徒の行動の特徴について理解し、説明することができる。			
④教育心理学における学習や実践の方法について理解し、具体例を説明することができる。			
授業の概要：学校教育に関連する様々な事象について、そこに内在する法則性や一般的な原理を心理学の立場から明らかにし、教師からの児童生徒に対する教育的働きかけをより効果的なものにするための知見や方法を提供する。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション（担当：大久保 智生）			
第2回：教育心理学とは（担当：大久保 智生）			
第3回：発達1：認知発達とその障害（担当：岡田 涼）			
第4回：発達2：仲間関係の発達（担当：岡田 涼）			
第5回：動機づけ1：内発的動機づけ（担当：岡田 涼）			
第6回：動機づけ2：学習性無力感（担当：岡田 涼）			
第7回：教育評価1：教育評価の次元（担当：岡田 涼）			
第8回：教育評価2：教育評価と学習指導（担当：岡田 涼）			
第9回：学習1：レスポナント学習（担当：大久保 智生）			
第10回：学習2：オペラント学習・障害と課題分析（担当：大久保 智生）			
第11回：教育相談1：学校における教育相談（担当：岡田 涼）			
第12回：教育相談2：教育相談とアセスメント（担当：岡田 涼）			
第13回：学校適応1：問題行動、学校不適応、障害（担当：大久保 智生）			
第14回：学校適応2：いじめの4層構造と対応、障害と偏見（担当：大久保 智生）			
第15回：学校適応3：学校の荒れ、学級崩壊と教師の指導（担当：大久保 智生）			
定期試験			
テキスト：特になし。			
参考書・参考資料等：以下の書籍以外は授業中に適宜紹介・配布する。			
大久保智生・牧郁子（編）「実践をふりかえるための教育心理学」（ナカニシヤ出版）			
学生に対する評価：期末試験（100%）によって評価する。			

授業科目名： 児童心理学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：松本博雄 担当形態：単独
科 目	教育の基礎的理解に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程		
授業のテーマ及び到達目標 主に学童期の心身の発達過程及び特徴、それを踏まえた学習を支える指導について理解する			
授業の概要 ヒトの発達に固有の特徴を検討し、続いて学童期の発達のな特徴について、前後の発達期との連続性も含めて整理する。最後に教育の場でそれを支えるあり方を探る。			
授業計画 第1回：はじめに：ヒトの心身の発達特徴 第2回：発達理論の概要 第3回：教育における発達理解 第4回：乳幼児期から学童期へ 第5回：学童期前期の発達：運動 第6回：学童期前期の発達：言語 第7回：学童期前期の発達：認知 第8回：学童期前期の発達：社会性 第9回：学童期後期から思春期の発達：運動 第10回：学童期後期から思春期の発達：言語 第11回：学童期後期から思春期の発達：認知 第12回：学童期後期から思春期の発達：社会性 第13回：発達・学習・教育：学習理論の基礎 第14回：発達・学習・教育：学習評価の在り方 第15回：おわりに：主体的な学びを支えるために 定期試験			
テキスト 心理科学研究会（編）（2009）『小学生の生活とこころの発達』 福村出版			
参考書・参考資料等 授業中に適宜資料を配付する			
学生に対する評価 定期試験（85％） 各回授業時の小レポート（15％）			

授業科目名： 青年心理学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 大久保 智生・岡田 涼
			担当形態：オムニバス
科 目	教育の基本的理解に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	・ 幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程		
授業のテーマ及び到達目標			
1. 青年期（思春期）の発達の特徴について、身体、認知、対人関係、自己という4つの領域について明確に論述できる。			
2. 青年期の適応・不適応について理解し、青年期の発達と関連づけながら自分自身を振り返り、自分のこれまでの体験の意味を考える機会をもつことができる。			
授業の概要：思春期と青年期の心理的特徴や発達過程について、生涯発達の中に位置づけながら講義する。青年期には、身体の急速な発達、抽象的思考の発達が進み、親との関係や友人との関係も大きく変化する。また、自分の内面に深い関心を持ち、自分や重要な他者についての様々な問いに直面するため、悩みやすい時期でもある。この授業では、青年期の発達の様々な側面を概観し、青年期の発達の特徴および生じやすい心の問題について理解を深めていく。受講生の多くが青年期にあたるため、講義に加えて、自己評定や自らの体験を素材としたグループ・ディスカッションを行う。			
授業計画			
第1回：はじめに：子どもと大人のはざまとしての青年（担当：大久保 智生）			
第2回：身体発達：思春期の身体変化とボディイメージ（担当：岡田 涼）			
第3回：認知発達1：知能と認知能力の発達（担当：岡田 涼）			
第4回：認知発達2：動機づけの発達（担当：岡田 涼）			
第5回：認知発達3：クリティカルシンキングの発達（担当：大久保 智生）			
第6回：対人関係1：親子関係（担当：大久保 智生）			
第7回：対人関係2：友人関係（担当：岡田 涼）			
第8回：対人関係3：恋愛関係（担当：大久保 智生）			
第9回：自己の発達1：自我同一性の確立（担当：岡田 涼）			
第10回：自己の発達2：自己概念と自尊心（担当：岡田 涼）			
第11回：自己の発達3：レジリエンスとハーディネス（担当：岡田 涼）			
第12回：適応と不適応1：不登校・引きこもりの心理（担当：大久保 智生）			
第13回：適応と不適応2：非行・犯罪の心理（担当：大久保 智生）			
第14回：キャリア教育1：キャリア形成と職業観（担当：大久保 智生）			
第15回：キャリア教育2：ライフコースの多様化とフリーター・ニート問題（担当：大久保 智生）			
定期試験			
テキスト：特になし			
参考書・参考資料等：適宜配布する			
学生に対する評価：定期試験（100％）で評価する			

授業科目名： 特別支援教育基礎論		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 小方朋子、中島栄美子
				担当形態：オムニバス
科 目		教育の基礎的理解に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解		
授業のテーマ及び到達目標				
本授業は、「教職基礎科目」の「特別支援の理解」の区分に該当する科目である。通常の学級にも在籍している発達障害や軽度知的障害をはじめとする様々な障害等により特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒が授業において学習活動に参加している実感・達成感をもちながら学び、生きる力を身に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に対応していくために必要な知識や支援方法を理解する。				
① 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の障害の特性及び心身の発達を理解する。				
② 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する教育課程や支援の方法を理解する。				
③ 障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難とその対応を理解する。				
授業の概要：この授業は、特別支援教育の理念や制度、および発達障害の障害特性や指導方法などの基礎的な知識を学ぶものである。教員が、幼・保および小・中学校の通常学級に在籍する特別な支援を要する子どもを理解できるかどうかは、小一プロブレムやいじめ、学級崩壊、学力向上等学校現場のかかえる問題にも直結する重要な課題である。				
授業計画				
第1回：オリエンテーション（担当：小方朋子）				
第2回：障害観の変化について（担当：小方朋子）				
第3回：さまざまな障害について（担当：小方朋子）				
第4回：発達障害について①ASDの特徴とその支援について（担当：小方朋子・中島栄美子）				
第5回：発達障害について②ADHDの特徴とその支援について（担当：小方朋子・中島栄美子）				
第6回：発達障害について③LDの特徴とその支援について（担当：小方朋子・中島栄美子）				
第7回：特別支援教育の制度と仕組み（担当：小方朋子）				
第8回：特別支援教育の教育課程（担当：小方朋子）				
第9回：個別の指導計画と個別の教育支援計画（担当：小方朋子）				
第10回：特別支援学校における教育（担当：小方朋子）				
第11回：特別支援教育における関係機関との連携（担当：小方朋子）				
第12回：通級指導教室の利用（担当：中島栄美子）				
第13回：特別支援教室すばるについて（担当：中島栄美子）				
第14回：外国にルーツを持つ子どもたちの支援について（ゲストスピーカー）				
第15回：まとめ				
テキスト：特になし				
参考書・参考資料等：武蔵・恵羅『エッセンシャル特別支援教育コーディネーター』大学教育出版、2011				
学生に対する評価：課題への取り組み（40%）、最終レポート（60%）				

授業科目名： 学校教育課程論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：山岸知幸 担当形態：単独
科 目	教育の基礎的理解に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教育課程の意義及び編成の方法（カリキュラム・マネジメントを含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 教育課程・カリキュラムに関する歴史や理論を学ぶとともに、学習指導要領の意義を理解し、教員として教育課程を編成・実施・評価・改善していくための基礎的な力を身につける。 1. 教育課程・カリキュラムに関わる歴史や編成原理について説明できる。 2. 学習指導要領（総則）の内容やポイントについて説明できる。 3. 学校現場での年間指導計画、日課・週時程を作成できる。			
授業の概要 教育課程・カリキュラムの意義及び編成原理、学習指導要領のポイントについて講義するとともに、学校における教育課程の実践について具体的な事例をもとに考察する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：我が国の戦後の教育課程の変遷 第3回：カリキュラム改革の歴史（1）－児童中心主義思想を中心に－ 第4回：カリキュラム改革の歴史（2）－教育内容の現代化を中心に－ 第5回：教育課程の編成原理と類型 第6回：教育課程の編成・実施・評価・改善 第7回：教育課程の現状と課題 第8回：校種間連携と教育課程 第9回：学習指導要領を学ぶ（1）－総則を中心に－ 第10回：学習指導要領を学ぶ（2）－カリキュラム・マネジメントの視点から－ 第11回：教育課程の実践（1）－年間行事計画－ 第12回：教育課程の実践（2）－教科年間指導計画－ 第13回：教育課程の実践（3）－時間割、日課・週時程の編成－ 第14回：教育課程の実践（4）－特色ある学校づくりと学校評価－ 第15回：まとめ－これからの教育課程・カリキュラムの課題－			
テキスト：小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領			
参考書・参考資料等： 小学校学習指導要領解説、中学校学習指導要領解説、高等学校学習指導要領解説 総則編 その他、授業中に適宜資料を配付する。			
学生に対する評価：レポート（50％）、小テスト（50％）			

授業科目名： 道徳教育論		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 櫻井佳樹
				担当形態：単独
科 目		道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		道徳の理論及び指導法		
授業のテーマ及び到達目標 道徳の意義や原理等を踏まえ、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育及びその要となる道徳科の目標や内容、指導計画等を理解するとともに、教材研究や学習指導案の作成、模擬授業等を通して、実践的な指導力を身に付ける。 ①道徳の意義や原理等を踏まえ、学校における道徳教育の目標や内容を理解する。 ②学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育及びその要となる道徳科における指導計画や指導法を理解する。				
授業の概要 授業を大まかに理論編と実践編に分ける。理論編では、現代社会と道徳問題について概説し、道徳及び道徳教育の本質について講義する。実践編では、学習指導要領に基づいた道徳教育のあり方や実践的方法について具体例や演習を通して考えていく。				
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：Ⅰ理論編：道徳教育の歴史 第3回：道徳の本質 第4回：道徳性の発達 第5回：現代社会と道徳問題 第6回：学校における道徳教育及び道徳科の目標と内容 第7回：Ⅱ実践編：学校における道徳教育の指導計画 第8回：道徳科の指導方法 第9回：道徳科の教材と授業設計（小学校） 第10回：学習指導案の作成（小学校） 第11回：模擬授業と学習評価（小学校） 第12回：道徳科の教材と授業設計（中学校） 第13回：学習指導案の作成（中学校） 第14回：模擬授業と学習評価（中学校） 第15回：まとめ 定期試験				
テキスト 『小学校学習指導要領解説 道徳編』『中学校学習指導要領解説 道徳編』				
参考書・参考資料等 授業時に随時提示する。またはプリントを配布する。				
学生に対する評価 定期試験(30%)、授業への取り組み（小レポート）及び指導案や模擬授業(70%)				

授業科目名： 総合的な学習の時間の 指導法	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1 単位	担当教員名：北林雅洋 担当形態：単独
科 目	道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に 関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	総合的な学習の時間の指導法		
授業のテーマ及び到達目標			
① 日本の教育における総合的な学習の意義をとらえたうえで、具体的な授業づくりの視点・ 手立てが明確になる。			
② 学習指導要領に例示された三つの探究課題について、相互の関係を理解したうえで、指導 計画を構想できる。			
授業の概要			
香川県内の実践を具体的な題材として授業を構成するが、香川大学教育学部附属高松小学校の 「児童の興味・関心に基づく課題」に徹した特色ある実践も位置づける。他に例のない特色あ る実践について、他の学校でも実施可能かどうか検討することで、総合的な学習の時間の意義 や役割について、そもそものところに立ち返って考えることができるようになる。			
授業計画			
第1回：総合的な学習の時間と「生きる力」			
第2回：各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力のとらえ方とその指導			
第3回：自己の生き方を考えていくための資質・能力のとらえ方とその指導			
第4回：現代的な諸課題に対応する課題の実践と指導計画の作成・検討			
第5回：地域の特色に応じた課題の実践と指導計画の作成・検討			
第6回：児童・生徒の興味・関心に基づく課題の実践とその評価			
第7回：日本の教育史における総合的な学習の意義			
第8回：授業づくりに欠かせない評価の真価が問われる総合的な学習の時間			
定期試験は実施せず、レポートを課す。			
テキスト：なし			
参考書・参考資料等			
小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（平成29年6月、文部科学省）			
中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（平成29年7月、文部科学省）			
高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（平成21年7月、文部科学省）			
その他、授業中に適宜資料を配布する。			
学生に対する評価			
最終レポートの結果（90％）に、ミニ・レポートの内容（10％）を加味する。			

授業科目名： 特別活動論		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1 単位	担当教員名： 柳澤良明・小方直幸
				担当形態：複数
科 目		道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		特別活動の指導法		
授業のテーマ及び到達目標				
①学習指導要領における特別活動の目標及び主な内容を理解している。				
②教育課程における特別活動の位置付けと各教科等との関連を理解している。				
③学級活動・ホームルーム活動の特質を理解している。				
④児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事の特質を理解している。				
⑤教育課程全体で取り組む特別活動の指導の在り方を理解している。				
⑥特別活動における取組の評価・改善活動の重要性を理解している。				
⑦合意形成に向けた話し合い活動、意思決定につながる指導及び集団活動の意義や指導の在り方を例示することができる。				
⑧特別活動における家庭・地域住民や関係機関との連携の在り方を理解している。				
授業の概要：学校における多様な集団活動を通して課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して行われる活動の総体である特別活動の意義を理解し、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」「チームとしての学校」の視点から、学年の違いによる活動の変化、各教科等との往還的な関連、地域住民や他校の教職員と連携した組織的な対応等、特別活動の特質を踏まえた指導に必要な知識や素養を身に付ける。				
授業計画				
第1回：特別活動の意義・目標・内容と教育課程における位置づけ（小～高）				
第2回：学級活動の意義・目標・内容（小・中）				
第3回：ホームルーム活動の意義・目標・内容（高）				
第4回：児童会・生徒会活動の意義・目標・内容（小～高）				
第5回：クラブ活動および学校行事の意義・目標・内容（小～高）				
第6回：特別活動の指導の在り方Ⅰ－小学校の事例を中心に－				
第7回：特別活動の指導の在り方Ⅱ－中学校・高等学校の事例を中心に－				
第8回：これからの特別活動（小～高）				
テキスト：授業中に適宜資料を配布する。				
参考書・参考資料等：「小学校学習指導要領解説 特別活動編」（平成29年 6 月 文部科学省） 「中学校学習指導要領解説 特別活動編」（平成29年 7 月 文部科学省） 「高等学校学習指導要領解説 特別活動編」（平成30年 7 月 文部科学省）				
学生に対する評価：各回のミニレポート（30％）および学期末の最終レポート（70％）による。				

授業科目名： 教育の方法と技術（情報通信技術を活用した教育の理論及び方法を含む。）		教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 笹屋孝允・松下幸司 担当形態：オムニバス
科 目		道徳，総合的な学習の時間等の指導法 及び生徒指導，教育相談等に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教育の方法及び技術 情報通信技術を活用した教育の理論及び方法		
授業のテーマ及び到達目標				
(1) 教育方法の基礎的理論（教授・学習・評価など）と実践を理解する。 (2) これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するための教育方法の在り方（主体的・対話的で深い学びの実現など）を理解する。 (3) 学級・児童及び生徒・教員・教室・教材など授業を構成する基礎的な要件を理解するとともに、話法・板書など、授業を行う上での基礎的な技術を身に付ける。 (4) 基礎的な学習指導理論を踏まえて、目標・内容、教材・教具、授業展開、学習形態、評価規準等の視点を含めた学習指導案を作成することができる。 (5) 社会的背景の変化や急速な技術の発展も踏まえ、個別最適な学びと協働的な学びの実現や主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、ICT支援員等との連携、学校におけるICT環境整備など、情報通信技術の活用の意義と在り方について理解する。 (6) 育成を目指す資質・能力や学習場面に応じ、情報通信技術を効果的に活用した指導事例について理解し、デジタル教材作成・教育利用の基礎的な技術を身に付ける。 (7) 情報活用能力（情報モラルを含む）について、各教科等の特性に応じた指導事例を理解し、情報活用能力（情報モラルを含む）の育成をねらいとする学習活動を構想し、指導案を作成することができる。				
授業の概要				
教員免許取得のための必修科目である。3年次以降の教育・保育実習に向けて、授業や指導の実践的知識や技術を身につけられるよう、その基礎となっている教育方法学の諸理論を紹介する。実践事例から学びながら、理論で実践を意味づける活動を通し、結果として理論の理解と指導技術の習得を目指す授業である。また、子どもたちの興味関心を高めたり学習内容をまとめさせたりするために、加えて子どもたちの情報活用能力を育成するために、情報機器をいかに活用すればよいか、実践事例を手がかりに考え、学習活動や授業を構想しながら、指導技術の習得を目指す授業である。なお、授業中に演習等で使用するため、ノートPC必携とする。				
授業計画				
第1回：オリエンテーション（担当：笹屋 孝允・松下 幸司）				

第2回：教授の理論（5段階教授法）と、それに基づく指導案の作成（担当：笹屋 孝允）
 第3回：教授の理論（経験主義）と、それに基づく指導案の作成（担当：笹屋 孝允）
 第4回：学習の理論（認知理論）と、それに基づく板書案の作成（担当：笹屋 孝允）
 第5回：学習の理論（社会文化理論）と、それに基づく指導案の作成（担当：笹屋 孝允）
 第6回：主体的・対話的で深い学びの意義と、それに向けた課題づくりの演習（担当：笹屋 孝允）
 第7回：児童生徒を対象とした評価の理論と、それに基づく指導案の作成（担当：笹屋 孝允）
 第8回：授業に活かす評価の理論と、通知表、指導要録の作成方法（担当：笹屋 孝允）
 第9回：学校におけるICT環境整備と教師に求められるICT活用指導力（校務の情報化を含む）
 （担当：松下 幸司）
 第10回：主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善とICTの活用（担当：松下 幸司）
 第11回：各学校種における情報通信技術を活用した実践事例（特別の支援を必要とする児童生徒に対する実践や遠隔/オンライン教育実践を含む）（担当：松下 幸司）
 第12回：教育課程における情報活用能力の育成とICT活用（担当：松下 幸司）
 第13回：情報活用能力の育成を目指す情報通信技術を活用した実践事例（担当：松下 幸司）
 第14回：情報活用能力の育成を目指す、デジタル教材の構想と作成（担当：松下 幸司）
 第15回：情報活用能力の育成を目指す、ICT機器・デジタル教材を活用した学習活動の構想・指導案作成（担当：松下 幸司）

テキスト

『新しい時代の教育方法（改訂版）』田中耕治・鶴田清司・橋本美保・藤村宣之（著），有斐閣，ISBN978-4641221251

参考書・参考資料等

参考資料は随時moodleに掲載する。（「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」の該当授業において取り扱う参考書・テキストは、開講年度において最新の参考書・テキストを初回授業時に周知するほか、moodleに書籍情報を掲載し周知する。 使用予定書籍例：『タブレット端末を授業に活かす NHK for School実践事例62』中川一史・今野貴之・小林祐紀・佐和伸明（監修），NHK出版，ISBN978-4140817452）

学生に対する評価

授業中の課題（25％），中間課題（25％），情報通信技術を活用した教育に関する課題（50％）

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：毛利 猛
生徒指導・進路指導論	必修科目	2単位	担当形態：単独
科 目	道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目		
施行規則に定める	生徒指導の理論及び方法		
科目区分又は事項等	進路指導およびキャリア教育の理論及び方法		
授業のテーマ及び到達目標			
この授業では、学校の教育活動全体を通じて行われる生徒指導、進路指導・キャリア教育の理論と方法について学ぶ。学校において組織的・効果的な生徒指導と進路指導・キャリア教育を進めていくために必要な知識・技能や素養を身につける。			
授業の概要：この授業は、学校における生徒指導の進め方、進路指導・キャリア教育のあり方について、児童生徒の社会的な自己実現に関わる様々な「問題」やトピックスを取り上げながら臨床教育学的に考察するものである。			
授業計画			
第1回：生徒指導の意義と教育課程における位置づけ			
第2回：生徒指導の方法原理			
第3回：生徒指導と教育相談			
第4回：生徒指導と進め方（1）－ほめと叱りの人間学			
第5回：生徒指導の進め方（2）－集団づくりと生徒指導			
第6回：生徒指導の組織的な取組みと学校内外の連携			
第7回：生徒指導上の「問題」－不登校を中心に			
第8回：生徒指導上の「問題」－いじめを中心に			
第9回：生徒指導ケーススタディー－小学校の事例を中心に			
第10回：生徒指導ケーススタディー－中学校・高等学校の事例を中心に			
第11回：進路指導・キャリア教育の意義と教育課程における位置づけ			
第12回：職業に関する体験活動とキャリア教育			
第13回：進路指導・キャリア教育の組織的な推進体制と連携			
第14回：学校における異年齢集団活動			
第15回：生涯を通じたキャリア形成とキャリア・カウンセリング			
定期試験			
テキスト：毛利猛『臨床教育学への視座』ナカニシヤ出版			
文部科学省『生徒指導提要』教育図書			
参考書・参考資料等：毛利猛『哲学の講堂－中学生の君たちへ』協同出版			
学生に対する評価：学期末試験（60％）と中間レポート（40％）による総合評価			

授業科目名： 学校教育相談学	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 宮前 淳子
			担当形態：単独
科 目	道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	・教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法		
授業のテーマ及び到達目標			
学校教育相談は、子どもたちの心理的発達を支援するための日常的な教育活動である。発達段階に即しつつ、個々の特性や課題を適切に捉えるための基礎的知識や、保護者や関係機関と連携して子どもを支援するために必要な知識を身につける。また、複雑化する教育相談に関する問題について柔軟に対応するためのスキルについて学習する。			
・学校における教育相談の意義と理論を理解する。			
・教育相談を進める際に必要な基礎的知識を理解する。			
・教育相談の具体的な進め方やそのポイント、組織的な取組みや連携の必要性を理解する。			
・学校での生徒に対する予防的心理教育の方法について理解し、実践力を高める。			
授業の概要			
教育の専門家としての教師にとって、学校教育相談に関する基礎の習得は不可欠である。授業では、子ども理解の方法およびそれに基づく援助の方法について、具体的事例を挙げながら学習していく。また、保護者や関係諸機関との連携の実際や、生徒の心理的成長を支える予防的援助について学習する。			
授業計画			
第1回：学校教育相談の意義、目的			
第2回：学校教育相談の実際			
第3回：学校教育相談におけるアセスメントⅠ：アセスメントの方法			
第4回：教室での仲間づくりⅠ：関係づくりのゲーム			
第5回：対人関係ゲームの理論と実際			
第6回：学校教育相談におけるアセスメントⅡ：問題行動のアセスメント			
第7回：学校教育相談におけるカウンセリングの基礎Ⅰ：コミュニケーションの基本			
第8回：学校教育相談におけるカウンセリングの基礎Ⅱ：質問技法および感情の反映技法			
第9回：学校教育相談におけるカウンセリングの基礎Ⅲ：発達段階に応じた教育相談の在り方			
第10回：教室での仲間づくりⅡ：集団の楽しさを実感するゲーム			
第11回：いじめ			
第12回：子どもの貧困と学校			
第13回：保護者・関係機関との連携			
第14回：危機介入			
第15回：まとめ			
定期試験			

テキスト 授業時間中に適宜資料を配布します。

配布資料の例：令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省，2021），Mental health: strengthening our response (World Health Organization,2018 <https://www.who.int/news-room/fact-sheets/detail/mental-health-strengthening-our-response> 2022年3月1日閲覧)，チームで取り組む教育相談（宮前淳子，2020 学校に還す心理学 有馬道久・大久保智生・岡田涼・宮前淳子編著）など

参考書・参考資料等 特になし。

学生に対する評価 学期末試験（筆記試験）（100%）

シラバス：教職実践演習

シラバス：保育・教職実践演習（幼・小・中・高）		単位数：2単位	担当教員名： 教科担当：宮崎英一・北林雅洋・鈴木正行 ・青山夕夏・上野耕平・松島充 教職担当：山岸知幸・松井剛太・櫻井佳樹 ・小方朋子・松本博雄・宮前淳子・岡田涼 ・中島栄美子・笹屋孝允		
科 目	教育実践に関する科目				
履修時期	4年次後期	履修履歴の把握(※1)	○	学校現場の意見聴取(※2)	○
受講者数 32人(5クラスで実施・1クラス教員3名が担当)					
教員の連携・協力体制 担当教員が各回の講義及び演習を進める。交流人事教員の協力を得ながら学校現場の視点をより取り入れる。また、教育委員会との連携のもと現地調査や実務研修を進める。					
授業のテーマ及び到達目標 これまでの教職課程における授業科目の履修や教職課程以外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、幼稚園、小学校、中学校、及び高等学校の教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され形成されたかについて学部目標に照らして確認し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図る。 ①教職について基本的な理解が身につけている（使命感を含む）。 ②対人能力の基本的な能力を身につけている。 ③子ども理解のための基本的な知識を身につけている。 ④指導力の基本的な内容を理解している（ICT活用能力を含む）。 ⑤教師に求められる専門知識と幅広い教養を身につけている。					
授業の概要 個人の学習履歴をまとめたファイルをもとに、5つの事項（①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科の内容等の指導力に関する事項、⑤教育課題の探究に関する事項）について、事例研究・グループ討議を行い、それらを通して各自が身に付けた資質能力を確認するとともに、自己の課題を明確化する。そして、自己課題を意識しながら、教員としての資質能力をより一層高められるよう、主体的に現地調査や実務研修に参加し、自らの学びを深める。					

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 「学びの履歴」による自己点検、及び自己課題の明確化についてのグループ討議

第3回 「教育課題の探究」に関する講義及び演習①ー今日的課題の事例研究ー

第4回 「教育課題の探究」に関する講義及び演習②ーグループ討議による今日的課題への対応案検討ー

第5回 「授業づくり」に関する講義及び演習①ー授業づくりの事例研究ー

第6回 「授業づくり」に関する講義及び演習②ーICT を活用した模擬授業及びグループ討議による学習指導案検討ー

第7回 「学級経営」に関する講義及び演習①ー今日的課題の事例研究ー

第8回 「学級経営」に関する講義及び演習②ーロールプレイング及びグループ討議による学級経営のポイント検討ー

第9回 「生徒指導」に関する講義及び演習①ー今日的課題の事例研究ー

第10回 「生徒指導」に関する講義及び演習②ーロールプレイング及びグループ討議による生徒指導のポイント検討ー

第11回 学校現場や関連教育施設における現地調査や実務研修①ー学校訪問ー

第12回 学校現場や関連教育施設における現地調査や実務研修②ー授業参観ー

第13回 学校現場や関連教育施設における現地調査や実務研修③ー授業検討会への参加ー

第14回 学校現場や関連教育施設における現地調査や実務研修④ー現職教員による講話ー

第15回 全体交流によるまとめ

※「授業づくり」に関する回については教科専門教員が担当する。

※本授業では、学校現場と同様にICTを活用しながら進めます。情報の収集やレポートの提出またオンラインを通じた交流やグループ討議もあります。毎時、ノートパソコン等のICT機器を持参してください。

自学自習のアドバイス

◎「教師になるための学びの計画と履歴」（「学びの履歴」）をしっかりと振り返ろう。

◎日常的にICT機器に慣れ親しもう。

◎幅広く教育関係者と交流しよう（スクールボランティア、等）。

テキスト

「教育実践演習 基本テキスト」

参考書・参考資料等

「教師になるための学びの計画と履歴」（「学びの履歴」）、その他、適宜関連資料を配布する。

学生に対する評価

毎回の「講義及び演習」の成果を、「学びの履歴」を元にして作成したルーブリックに基づいて評価を行う。

授業終了後、「学びの履歴」と最終レポートを提出する。ルーブリック（同上）に基づいて評価を行う。

※1 履修カルテを作成し、これを踏まえた指導を行う体制が備えられていることを確認し、「○」と記載すること。

※2 授業計画の立案にあたって教育委員会や学校現場の意見を聞いた場合には「○」と記載すること。そうでない場合は空欄とせず、「×」とすること。